

CGS

Center for Gender Studies
International Christian University
Tokyo.....Asia



- CGSは、教育研究棟（ERB）3階301にあります。開室時間は平日12～16時です（大学暦に準じた休業日や臨時閉室日があります）。
- 図書・映像資料は一部を除いて貸し出し可能です（要登録）。
- CGS is located in Room 301 on the 3rd floor of the ERB building. It is open from 12:00 to 16:00, Monday to Friday, except when the university is closed.
- We provide books and audio-visual materials related to Gender and Sexuality Studies.

目 次

研究論文

日本のアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムにおける 恋愛指向の多面性	三宅大二郎、平森大規	1
「性的な存在」の関係論的形成 ——恋愛／性愛における違和の経験に着目して	佐川魅恵	27
ベルサーニの暴力的ケア／サエボグの横滑りする身体	長尾優希	51
オーストラリアのメディアにおけるセリーナ・ウィリアムズへの 人種差別と性差別：セレブリティ・フェミニズムと黒人女性の 関係性を異文化間の文脈から理解するために	菅沼勝彦	77
中国における性的マイノリティ問題のリフレーミング ——差別論の視点から	趙瑩瑩	99

2021年度 ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞受賞論文

2021年度ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞受賞論文に ついて	高松香奈	127
現代日本における恋愛伴侶規範性 ——アロマンティック／アセクシュアル当事者へのインタビューを 通じて	三島早希	129

ジェンダー研究センター（CGS）2021～2022年度イベント報告

身体を／が語る：日本文学における妊娠、出産、授乳
コーディネーター：レティツィア・グアリーニ 135

ヒストリー・レッスンズ：
日本におけるフェミニスト／クィア映画キュレーションの現在
報告者：浜崎史菜 143

フェミニストとして書き、訳し、出版する
コーディネーター：レティツィア・グアリーニ 155

『トランスジェンダー問題』を生きる
コーディネーター：葛原千景 163

同性婚合法化の軌跡、これから始まる抵抗の可能性について
コーディネーター：洪毓謙 165

ジェンダー研究センター（CGS）2022年度活動報告 169

付記

執筆者紹介 179

CGS所員リスト 181

第19号投稿規程 185

編集後記 192

CONTENTS

Research Papers

- Multidimensionality of Romantic Orientation among the Aromantic/
Asexual Spectrum in Japan
Daijiro MIYAKE, Daiki HIRAMORI 1
- Relational Formations of “Sexualized-Gendered Subject”:
The Experiences of Gender Dysphoria in Romantic/Sexual
Relationships
Misato SAGAWA 27
- Bersani’s Violent Care/Saeborg’s Sliding Bodies
Yuki NAGAO 51
- Racism and Sexism against Serena Williams in Australian Media:
Understanding Celebrity Feminism and Black Women in Cross-
Cultural Contexts
Katsuhiko SUGANUMA 77
- Reframing Sexual Minority Issues in China:
Analysis from a Discrimination Theory Perspective
ZHAO Yingying 99

AY2021 Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies Recipient

- The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies
in AY 2021
Kana TAKAMATSU 127
- Amatonormativity in Japan:
Interviews with Self-Identified Aromantics/Asexuals
Saki MISHIMA 129



CGS Events Reports

Narrating Bodies: Pregnancy, Childbirth, and Breastfeeding
in Japanese Literature

Organizer: Letizia GUARINI 135

History Lessons

— The Present of Feminist/Queer Film Curation in Japan

Reporter: Fumina HAMASAKI 143

Writing, Translating, and Publishing Feminist Books

Organizer: Letizia GUARINI 155

Living with *The Transgender Issue*

Organizer: Chikage KUZUHARA 163

The Possibility of Resistance from Now

— After Legalization of Same-Sex Marriage

Organizer: Yuh-Chain HUNG 165

AY 2022 CGS Activity Reports

169

Notes

Author Profile 179

Members of the Center for Gender Studies 181

Journal Regulations for Vol. 19 185

Postscript from the Editor 192

研究論文

日本のアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムにおける恋愛的指向の多面性

三宅大二郎、平森大規

1 はじめに

近年、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー（LGBT）の可視化とともに、多様な性のあり方が認知されるようになってきた。その中でも、日本で可視化が進みつつあるのが「他者に性的に惹かれない」（Decker, 2019, p. 20）ことを意味する「アセクシュアル（asexual/asexuality）」¹である。そして、アセクシュアルとともに言及されることが多いのが「誰にも恋愛感情を持たない」（Decker, 2019, p. 43）ことを意味する「アロマンティック（aromantic/aromanticism）」である。これらの両方を自認する人は「アロマンティック・アセクシュアル」と呼ばれており（三宅 & 平森, 2021）、テレビドラマ（野口 et al., 2022）やラジオ（アシタノカレッジ, 2022）、ウェブニュース（日本放送協会, 2022）などメディアを中心に上げられることが増えている。

一方、日本の学術研究においては、アロマンティックが取り上げられることは少なく、アセクシュアルに関する研究が少数あるのみである（Lehtonen, 2018; 松尾, 2021; 松浦, 2020; 三宅 & 平森, 2021; 吉岡, 2019）。大阪市（釜野 et al., 2019）や埼玉県（埼玉県, 2021）がアセクシュアルを選択肢の1つとして含んだ性的指向の設問や恋愛的惹かれに関する設問を含む無作為抽出調査を実施しているが、恋愛的指向アイデンティティについてはたずねられていない。諸外国に目を向けると、アセクシュアルの恋愛的側面について研究しているものがみられ（Antonsen et al., 2020; Carvalho & Rodrigues, 2022）、アロマンティックがアセクシュアルとの関連の中で議論されていることがわかる。諸外国においても、アロマンティックを選択肢の一つとして設定している無作為抽出調査はほとんどな

¹ 本稿では、先行研究で Asexual や A セクシュアル と表記されている場合でも、まとめてアセクシュアルと表記する。

いが、アロマンティックに関連する多様な恋愛的指向アイデンティティを持つ当事者コミュニティである Aromantic-spectrum Union for Recognition, Education, and Advocacy (AUREA) によるオープン型ウェブ調査が行われており、恋愛的指向アイデンティティの多様性や恋愛的指向の多面性を示唆する結果が報告されている (AUREA Aro Census Team 2020, 2021)。

以上から、既存研究で不足している点を3つ指摘したい。1つ目に、日本の研究ではアロマンティックなどの恋愛的指向アイデンティティを主な関心とする研究がほとんどない点である。後述するように、用語の意味が日本語と英語で異なる場合があるなど、アロマンティックやアセクシュアルをとりまく社会的・文化的背景は日本と英語圏で大きく異なる。欧米における既存研究はアセクシュアルが関心の中心にあり、アロマンティックはアセクシュアルの恋愛的指向の1つとして捉えられる傾向がある。一方で、日本では、アセクシュアルに関する議論自体が恋愛を中心に展開されている傾向があり、当事者コミュニティにおける恋愛的指向の位置づけが英語圏とは異なる。2つ目に、既存研究ではアロマンティックか否かという二分法に基づいた議論がなされており、後述する当事者コミュニティの多様性が考慮されていない点である。アロマンティックをスペクトラムとして捉え、多様なアイデンティティを前提に恋愛的指向を議論する必要がある。3つ目に、2つ目の課題と関連して、既存研究では恋愛的惹かれの有無のみで恋愛的指向を捉えている点である。当事者コミュニティによる調査結果から恋愛的指向には多面性があることが示唆されており、恋愛的指向アイデンティティや恋愛的惹かれ、恋愛に関連する欲求を含む恋愛的指向のさまざまな側面について議論する必要がある。

そこで本稿では、日本において初めてアロマンティックを含む多様なあり方を想定して設計されたオープン型ウェブ調査である「アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム調査2020」(以下、「Aro/Ace調査2020」)を用いて(Aro/Ace調査実行委員会, 2021)、日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛的指向アイデンティティや恋愛的惹かれ、恋愛に関連する欲求について記述し、恋愛的指向の多面性について議論する。

2 背景

2-1 アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムに関連する概念

2-1-1 アイデンティティの細分化と包括概念

アロマンティックは、「恋愛の指向 (romantic orientation)」の1つとされ、性的指向の1つとされるアセクシュアルとは別次元の概念として用いられる。恋愛の指向は誰に対して恋愛の的に惹かれるのか惹かれないのかということと関連し、性的指向とは区別される (Antonsen et al., 2020)。アセクシュアル当事者の中で性的指向と恋愛の指向の区別が意識されるようになったのは、アセクシュアルの性的指向に関する議論の中だったといわれている (Chu, 2014)。AUREA (2019) によれば、アセクシュアルのコミュニティには性的にも恋愛の的にも他者に惹かれない当事者が一定数おり、はじめはそのあり方に名前がなかったものの、2002年にあるアセクシュアル当事者がアロマンティックという言葉を使い始めてから徐々にアセクシュアル・コミュニティ内で定着していった。なお、アセクシュアルの恋愛の指向にはさらに多様性があり、アロマンティックのほかにも「ヘテロロマンティック (heteroromantic)」、 「ホモロマンティック (homoromantic)」、 「バイロマンティック (biromantic)」を自認することがあると報告されており (Brotto et al., 2010)、恋愛の的に惹かれるアセクシュアルをまとめて表現する際は「ロマンティック・アセクシュアル (romantic asexual)」と呼ぶのが一般的である (Antonsen et al., 2020)。さらに、惹かれの有無や惹かれる性別以外にも「惹かれ方」の多様性を示すカテゴリーも存在する。代表的なのが、「グレイロマンティック／グレイアロマンティック (greyromantic/grey aromantic)」と「デミロマンティック (demiromantic)」である。前者は、まれに／弱い恋愛の的に惹かれる人々、特定の環境下で恋愛の的に惹かれる人を指すか、恋愛の的に惹かれをまったく感じない人以外の人も包括するための用語である。後者は、情緒的な繋がりができてからのみ恋愛の的に惹かれる人という意味で用いられる (AUREA, 2021a)。その他、恋愛の的に惹かれるが、その感情が報われることや相手と関係を持つことを必要としない人を指すか、あるいは恋愛関係になると恋愛の的に惹かれがなくなるという意味で用いる「リスロマンティック (lithromantic)」というカテゴリーもある (AUREA, 2021a)。

以上、カテゴリーの細分化について記述したが、コミュニティ内の包括概念についても簡単に説明する。アロマンティックやそれに近いアイデンティティを包括する用語として「アロマンティック・スペクトラム (aromantic spectrum)」や「Aro」、アセクシュアルやそれに近いアイデンティティを包括する用語として「アセクシュアル・スペクトラム (asexual spectrum)」や「Ace」を用いることがある (AUREA, 2021b)²。

2-1-2 日本の用法

日本では、アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムに関連するアイデンティティは英語圏の用語をカタカナにして使われていることが多い (Aro/Ace 調査実行委員会, 2021)。しかしながら、用語の意味内容が一部英語圏と異なる点が日本のコミュニティの特徴として挙げられる。例えば、日本ではアロマンティック・アセクシュアルに近い意味で「アセクシュアル」を用いることがあり、ロマンティック・アセクシュアルに近い意味で「ノンセクシュアル」を用いることがある (Lehtonen, 2018)。

その一方で、現在のところアロマンティック・スペクトラム当事者のみのグループや活動は見当たらず、恋愛指向によってコミュニティが分化しているとは考えづらい。加えて、アセクシュアルとノンセクシュアルはもちろんのこと、デミセクシュアル／デミロマンティックやグレイセクシュアル／グレイロマンティックなどを含むさまざまな用語が当事者の交流会を行う団体で紹介されることから (特定非営利活動法人にじいろ学校, 2021)、日本の当事者コミュニティを分析する上ではアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムという枠組みを用いることが適切だと思われる。

2-2 アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛指向に関する研究

2-2-1 諸外国における研究動向

Antonsen et al. (2020) は英語圏で実施された複数の有意抽出の調査データ

² Aroをアロマンティックの略語、Aceをアセクシュアルの略語とする場合もある(AUREA, 2021b)。

を二次分析し、アセクシュアル・スペクトラムの25.3%がアロマンティック、26.4%がヘテロロマンティック、38.3%がバイロマンティック、4.9%がホモロマンティック、5.1%がその他の恋愛の指向だったと報告した。また、アロマンティックとロマンティックを比較した結果、恋愛の指向によって年齢や性自認の割合は変わらないことを明らかにした (Antonsen et al., 2020)。一方、複数のアセクシュアル・コミュニティを対象に調査したCarvalho & Rodrigues (2022)によれば、アロマンティック・アセクシュアルの方がロマンティック・アセクシュアルよりもノンバイナリー (男性・女性にあてはまらない性自認を持つ人) の割合が高かったと報告している。また、同じ調査から、アロマンティックとロマンティックを比較した結果、ロマンティックの方が恋愛関係になることを望む割合が高かった (Carvalho & Rodrigues, 2022)。

以上から、諸外国の研究ではアセクシュアル (スペクトラム) を対象に、その中でアロマンティックとロマンティックを比較する研究が少数あることがわかる。諸外国においても恋愛の指向に注目する研究が少ないのは、すでに述べたような性的指向と恋愛の指向の区別がアセクシュアルの当事者コミュニティの中で後から定着したことが影響している可能性がある。これらの研究の課題としては、恋愛の指向を恋愛の惹かれを抱くか否かという二分法で捉えており、すでに述べたようなアロマンティック・スペクトラムの多様性を考慮できていない点が挙げられる。

2-2-2 当事者団体による調査

以上のように既存研究では恋愛の指向を二分法的に捉えているものが多い一方、アロマンティック・スペクトラムの当事者団体による調査はアロマンティック・スペクトラムの多様性を考慮に入れている。当事者団体による調査として大規模なものは「アロ・センサス (The Aro Census)」が挙げられる。この調査は、2020年からAUREAが実施しているオープン型ウェブ調査で、アロマンティック・スペクトラムにあてはまる人を対象に英語で実施されている。2020年の調査結果によると、回答数は9,758で、回答者の居住地域はアメリカ (53.1%)、イギリス (8.9%)、カナダ (6.9%) が上位3か国だった (AUREA Aro Census Team 2020, 2021)。恋愛の指向アイデンティティについては、複数回答で上位3

つがアロマンティック／Aro (72.9%)、以前はアセクシュアル／Aceと表現していた (36.9%)、Aro スペクトラム (35.2%) だった。その他にも、グレイロマンティックが17.2%、デミロマンティックが14.3%、リスロマンティックが3.8%だったと報告している (AUREA Aro Census Team 2020, 2021)。恋愛的に惹かれた経験については、「ある」が20.7%、「ない」が45.0%、「わからない」が34.3%という結果だった。また、ときめき (crush) を感じる経験については、「ある」が36.0%、「ない」が37.0%、「わからない」が26.9%で、「ある」と「ない」が近い値だった。その一方、特定の誰かと恋愛関係になることを望む経験については、「ある」が29.7%、「ない」が50.5%、「わからない」が19.8%で、「ない」が約半数を占めた (AUREA Aro Census Team 2020, 2021)。

これらから、恋愛惹かれに関する項目は、聞く内容によって回答の分布に差が出る可能性が示唆される。上述のように、ときめきのような感情を持つ経験と恋愛関係を目指すか否かでは、後者の方が「ある」の割合が低くなっており、他者との行動を伴う欲求に関する項目の方が他者との行動を伴わない欲求の項目よりも「ある」と答える割合が低くなる可能性がある。また、恋愛指向アイデンティティ別に恋愛惹かれに関する項目を整理したデータは公開されていなかったが (AUREA Aro Census Team 2020, 2021)、恋愛指向アイデンティティによっても回答の分布に差がある可能性がある。

2-2-3 日本における研究動向

次に、日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛指向に関連する経験的研究について概観する。アセクシュアルに関する研究は少しずつ行われるようになってきているが、恋愛指向を主題にした経験的研究は質的や量的など調査手法を問わずほとんど行われていない。例えば、三宅&平森 (2021) は、本論文でも使用している「Aro/Ace 調査2020」を利用して、性別および年齢階級別にみたアセクシュアル・スペクトラム・アイデンティティの分布や性的惹かれに関連する項目間の差異について検討しているが、アロマンティック・スペクトラム・アイデンティティについては二次的に取り上げているのみである。日本でアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛指向に関する研究がほとんど行われていない背景としては、そもそもアロマン

ティック／アセクシュアル・スペクトラムに関する研究が少ないため、恋愛の指向に関する議論も発展していない点が挙げられる。そこで、以下では日本では数少ないアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛の指向に関わる経験的研究を紹介する。

現在日本に存在する量的調査のうち、アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛の指向における人口学的特徴について検討可能なデータとして、2019年に行われた無作為抽出調査の「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」（大阪市民調査）が挙げられる（釜野 et al., 2019）。この調査では、恋愛の指向アイデンティティをたずねる設問はないものの、恋愛の惹かれに関する設問がある。調査の結果、出生時に割り当てられた性別（以下、出生時性別）が女性である回答者のうち2.9%がこれまで男女どちらにも恋愛感情を抱いたことがない一方で、出生時性別が男性である回答者のうち2.0%がこれまで男女どちらにも恋愛感情を抱いたことがないことが明らかになった（釜野 et al., 2019）。また、アロマンティックをとりまく社会意識が把握可能なデータとして、全国無作為抽出調査の「性的マイノリティについての意識調査：2019年（第2回）調査」が挙げられる（釜野 et al., 2020）。調査の結果、それぞれ回答者の31.2%が「男性にも女性にも恋愛感情を抱かない女性は、おかしい」「男性にも女性にも恋愛感情を抱かない男性は、おかしい」と感じることが明らかになった。なお、回答者の26.8%が「女性が女性に恋愛感情を抱くのはおかしい」、29.3%が「男性が男性に恋愛感情を抱くのはおかしい」、28.1%が「男女両方に恋愛感情を抱くのはおかしい」と感じており、それほど大きな差はみられなかった（釜野 et al., 2020）。

質的調査法を用いた日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛の指向を検討する上で参考になるとと思われる研究も少数ではあるが存在する。例えば、Lehtonen（2018）は日本のアセクシュアルを自認する人々へのインタビューや日本の当事者コミュニティのウェブサイト、インターネットの記事等の分析を通して、日本と英語圏のアセクシュアルの差異について分析し、日本では性的なことが恋愛関係に紐づけられつつも、表面化するのには恋愛に関する規範であることを示した。これをもとに、日本のアセクシュアルに関わる議論も恋愛にフォーカスされやすく、恋愛的に惹かれないことがアセクシュアル

自認へのきっかけとなると指摘している (Lehtonen, 2018)。同じくアセクシュアルを自認する人たちにインタビューを行った松尾 (2021) も、アセクシュアルの語りにおいて恋愛に関することが多いと明らかにしている。一方で、松尾 (2021) は恋愛的に惹かれるアセクシュアルが自分の恋愛感情についてわからないと感じる経験や、恋愛的に惹かれないと認識しているアセクシュアルがパートナーを欲することからロマンティックかもしれないと悩む様子を報告しており、恋愛の指向にはゆらぎや流動性があることを明らかにしている。

以上、日本では恋愛がアセクシュアルの自認に重要な意味を持つこと、恋愛の指向のゆらぎや流動性、そして用語の使い方が混在している現状から、アロマンティック・スペクトラムとアセクシュアル・スペクトラムは諸外国以上に複雑に絡み合っていると推測される。したがって、日本で欧米諸国のようにアセクシュアル・スペクトラムの恋愛の指向を検討するには、広くアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムを対象にした調査を分析する必要があると考えられる。加えて、上述の松尾 (2021) の研究からは、恋愛に惹かれるか否かの認識の違いは特定のパートナーを望むか否かが関連している可能性が示唆される。吉岡 (2019) も特定の他者への関心や付き合うことへの主体性から恋愛への肯定的な態度が形成されていると考察しており、両者の共通点として「付き合う」など特定の他者との関係性に対する態度が、恋愛的に惹かれるまたは惹かれないことの重要な準拠点となる可能性がある。

このように、諸外国でもアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛の指向に関する研究は少なく、日本においてもほとんど行われていないのが現状である。そこで本稿では、アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムを対象にした調査研究を行うべく立ち上げられたAro/Ace調査実行委員会 (2021年12月に「アセクシュアル啓発委員会」と統合し、As Loop (アズループ) に改称) が実施した「Aro/Ace調査2020」を分析し、日本のアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムにおける恋愛の指向の多面性について検討する。

3 データと方法

3-1 データ

本稿では、「Aro/Ace 調査実行委員会」により2020年6月に実施された「Aro/Ace 調査2020」(n=1,685)を使用する。本調査は、「(1)アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムを自認している、またはそれに近い、そうかもしれないと思っている方、(2)日本語の読み書きをする方(国籍、居住地は問わない)、(3)年齢が回答時13歳以上の方」(Aro/Ace 調査実行委員会, 2021: 12)を対象としたオープン型ウェブ調査である。調査の広報には上記の文言を利用し、これら3つの条件に該当する人が調査対象者である旨を明記した上で、ソーシャル・ネットワークング・サービスのTwitter、Aro/Ace 調査実行委員会のウェブサイトや当事者LINEグループ等を通じて行われた³。サンプルの代表性を含めた調査結果の詳細については、『アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム調査2020 調査結果報告書』(Aro/Ace 調査実行委員会, 2021)に記載されている。

3-2 方法

今回の分析では、上記の先行研究からアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛の指向を考察するにあたって重要な項目である、Aro/Ace 自認前の恋愛の惹かれ、Aro/Ace 自認後の恋愛の惹かれ、特定の人に対する深い関心、ドキドキ、交際意欲の分布をアロマンティック・スペクトラムのアイデンティティ別に示す。なお、本調査ではアロマンティック・スペクトラムのアイデンティティをたずねる設問の選択肢として、「ロマンティック【恋愛的に惹(ひ)かれる】」「アロマンティック」「グレイ(ア)ロマンティック」「デミロマンティック」「リスロマンティック」「クエスチョニング」「Aro/Aceを自認していない」「その他」を用意している。分析にあたっては、アロマンティック・スペ

³ 本調査の対象者は「アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムを自認している、またはそれに近い、そうかもしれないと思っている」人であるため、他者に恋愛の／性的惹かれを持たない人であっても、上記にあてはまらない場合は調査対象者には該当しない。したがって、アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムに関する用語を知らない場合は回答しない設計になっている。

クトラムの多様性を考慮に入れるべく、「Aro/Aceを自認していない」と「その他」を「その他」と再コーディングした以外は元の選択肢をそのまま利用している。また、分析に使用する設問に無回答であるケースは分析から除外している。

4 分析結果

Table 1は、アロマンティック・スペクトラム・アイデンティティ別にAro/Ace自認前の恋愛的惹かれ（設問：「【Aro/Aceを自認する前に】恋愛的に惹（ひ）かれた相手としてもっとも近いものを選択してください。」）の分布、Table 2はアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティ別にAro/Ace自認後の恋愛的惹かれ（設問：「【Aro/Aceを自認してから】恋愛的に惹（ひ）かれた相手としてもっとも近いものを選択してください。」）の分布をみたものである。なお、本調査では恋愛的惹かきをたずねる設問の選択肢として、「男女どちらにも恋愛的に惹（ひ）かれたことがない」「男性のみ」「ほとんどが男性」「男性と女性同じくらい」「ほとんどが女性」「女性のみ」「性別に関係なく惹（ひ）かれる」「分からない」「Aro/Aceを自認していない」「その他」を用意している。分析にあたっては、「男性のみ」と「ほとんどが男性」を「男性」に、「男性と女性同じくらい」と「性別に関係なく惹（ひ）かれる」を「両性・全性」に、「女性のみ」と「ほとんどが女性」を「女性」に、「Aro/Aceを自認していない」と「その他」を「その他」と再コーディングしている。また、本項目は恋愛的惹かきの相手をたずねる設問であるため、性別に分析を行うことで異性に対する恋愛的惹かれと同姓に対する恋愛的惹かきを区別可能にしている。本調査では、出生時性別と現在自分が捉えている性別が一致していると思うかをたずね、一致していると思うと回答した場合のみ、さらに出生時性別（女性（本論文ではシスジェンダー女性として分類）または男性（本論文ではシスジェンダー男性として分類））をたずねている。したがって、出生時性別と現在自分が捉えている性別が一致していると思わない、または分からないと回答した場合（本論文では非シスジェンダーとして分類）は出生時性別をたずねていない。

Table 1のシスジェンダー女性をみると、アロマンティックの方が他のアイデンティティを持つ回答者よりも男女どちらにも恋愛的に惹かれたことがない割合が高い一方、グレイ（ア）ロマンティック、デミロマンティック、リスロマ

Table 1 性別にみたアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティとAro/Ace自認前の恋愛の惹かれの関係

(%)		ア ロ マ ン テ ィ ッ ク	ロ マ ン テ ィ ッ ク (ア)	デ ミ ロ マ ン テ ィ ッ ク	テ ィ ス ロ マ ン テ ィ ッ ク	ロ マ ン テ ィ ッ ク	ク エ ス ト シ ョ	そ の 他	全 体
シ ス ジ エ ン ダ ー 女 性 ^a	男女どちらにも恋愛の に惹かれたことがない	47.3	12.2	14.5	6.3	2.1	19.7	30.9	29.7
	男性	29.1	50.0	44.4	56.3	67.9	27.6	34.5	39.3
	両性・全性	6.2	13.5	17.9	25.0	20.0	18.4	16.4	12.5
	女性	3.1	6.8	10.3	4.7	5.7	5.3	5.5	4.9
	分からない	13.4	14.9	10.3	7.8	3.6	22.4	5.5	11.7
	その他	1.0	2.7	2.6	0.0	0.7	6.6	7.3	1.9
n		516	74	117	64	140	76	55	1,042
シ ス ジ エ ン ダ ー 男 性 ^b	男女どちらにも恋愛の に惹かれたことがない	46.3	12.5	40.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.2
	男性	2.4	12.5	20.0	0.0	14.3	0.0	0.0	7.7
	両性・全性	2.4	0.0	20.0	0.0	33.3	0.0	0.0	11.5
	女性	29.3	75.0	20.0	0.0	52.4	0.0	50.0	39.7
	分からない	17.1	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	50.0	11.5
	その他	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3
n		41	8	5	1	21	0	2	78
非 シ ス ジ エ ン ダ ー ^c	男女どちらにも恋愛の に惹かれたことがない	60.7	10.4	14.0	0.0	8.6	23.4	20.5	35.1
	男性	12.6	33.3	28.0	37.1	48.3	20.3	25.6	23.1
	両性・全性	10.5	33.3	32.0	42.9	22.4	20.3	20.5	19.8
	女性	2.8	10.4	18.0	11.4	19.0	15.6	5.1	8.9
	分からない	10.9	8.3	6.0	8.6	1.7	17.2	17.9	10.4
	その他	2.4	4.2	2.0	0.0	0.0	3.1	10.3	2.8
n		247	48	50	35	58	64	39	541

Note. いずれの性別についても期待度数5未満のセルが20%以上であったため、モンテカルロ・シミュレーションを行った上でカイ二乗検定を行っている。^a χ^2 : 263.615 ($p < .001$), Cramer's V: 0.225 ($p < .001$). ^b χ^2 : 50.456 ($p = .037$), Cramer's V: 0.360 ($p = .037$). ^c χ^2 : 199.305 ($p < .001$), Cramer's V: 0.271 ($p < .001$).

ンティック、ロマンティックの方がアロマンティックやクエスチョニングよりも男性（異性）に恋愛的に惹かれていた割合が高く、さらにロマンティックはグレイ（ア）ロマンティック、デミロマンティック、リスマンティックと比較しても割合が高い。

シスジェンダー男性についても、アロマンティックの方がロマンティックよりも男女どちらにも恋愛的に惹かれたことがない割合が高く、ロマンティックの方がアロマンティックよりも女性（異性）に恋愛的に惹かれていた割合が高いなど、シスジェンダー女性と同様の傾向がみられる。ただし、シスジェンダー男性による回答が少なく、その中でもグレイ（ア）ロマンティック、デミロマンティック、リスマンティック、クエスチョニングは特に該当者が少ないため、これらのカテゴリーについては傾向を把握することが困難である。

また、非シスジェンダーについても、アロマンティックの方が他のアイデンティティを持つ回答者よりも男女どちらにも恋愛的に惹かれたことがない割合が高く、グレイ（ア）ロマンティック、デミロマンティック、リスロマンティック、ロマンティックの方がアロマンティックよりも男性に恋愛的に惹かれていた割合が高いなど、シスジェンダー女性と同様の傾向がみられる。非シスジェンダーに特有の傾向としては、両性・全性に惹かれていた回答者の割合がシスジェンダー女性およびシスジェンダー男性よりも高いことがあげられる（ただしロマンティックのみ、シスジェンダー男性の方が両性・全性に惹かれていた回答者の割合が高い）。

Table 2 をみてみると、Aro/Ace自認後の恋愛的惹かれの分布もアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティによる差がそれぞれの性別でみられ、Aro/Ace自認前の恋愛的惹かれの分布と同様の傾向がみられる。シスジェンダー女性について、Aro/Ace自認前の恋愛的惹かれの分布（Table 1）と比較すると、いずれのアイデンティティにおいても男女どちらにも恋愛的に惹かれていない回答者の割合が増えている。例えばアロマンティックの場合、自認前の割合は47.3%であるが、自認後の割合は75.7%である。また、男性（異性）に恋愛的に惹かれている回答者の割合は減っている。例えばクエスチョニングの場合、自認前の割合は27.6%であるが、自認後の割合は9.2%である。

シスジェンダー男性についても、Aro/Ace自認前の恋愛的惹かれの分布（Table

Table 2 性別にみたアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティとAro/Ace自認後の恋愛惹かれの関係

(%)		ア ロ マ ン テ ィ ク	グ レ イ (ア) ロ マ ン テ ィ ク	デ ミ ロ マ ン テ ィ ク	リ ス ロ マ ン テ ィ ク	ロ マ ン テ ィ ク	ク エ ス チ ョ ニ ン グ	そ の 他	全 体
シ ス ジ エ ン ダ ー 女 性 ^a	男女どちらにも恋愛 的に惹かれたことがない	75.7	37.0	22.4	21.9	14.3	43.4	44.4	51.4
	男性	4.9	17.8	25.0	31.3	55.7	9.2	16.7	17.5
	両性・全性	3.1	6.8	14.7	25.0	13.6	10.5	11.1	8.4
	女性	2.0	13.7	19.8	9.4	11.4	6.6	5.6	7.1
	分からない	12.3	23.3	12.9	12.5	4.3	22.4	9.3	12.7
	その他	2.0	1.4	5.2	0.0	0.7	7.9	13.0	3.0
n		511	73	116	64	140	76	54	1,034
シ ス ジ エ ン ダ ー 男 性 ^b	男女どちらにも恋愛 的に惹かれたことがない	63.4	12.5	40.0	0.0	0.0	0.0	0.0	36.7
	男性	4.9	12.5	0.0	0.0	9.1	0.0	0.0	6.3
	両性・全性	0.0	0.0	20.0	0.0	31.8	0.0	50.0	11.4
	女性	9.8	37.5	40.0	0.0	54.5	0.0	0.0	26.6
	分からない	19.5	25.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	13.9
	その他	2.4	12.5	0.0	0.0	4.5	0.0	50.0	5.1
n		41	8	5	1	22	0	2	79
非 シ ス ジ エ ン ダ ー ^c	男女どちらにも恋愛 的に惹かれたことがない	81.1	31.9	18.0	20.0	12.1	32.8	35.9	50.4
	男性	2.5	8.5	18.0	11.4	22.4	12.5	5.1	8.6
	両性・全性	3.7	23.4	32.0	42.9	27.6	10.9	15.4	14.9
	女性	2.9	21.3	18.0	14.3	27.6	9.4	0.0	9.9
	分からない	7.8	12.8	12.0	8.6	8.6	28.1	25.6	12.5
	その他	2.1	2.1	2.0	2.9	1.7	6.3	17.9	3.7
n		243	47	50	35	58	64	39	536

Note. いずれの性別についても期待度数5未満のセルが20%以上であったため、モンテカルロ・シミュレーションを行った上でカイ二乗検定を行っている。^a χ^2 : 464.071 ($p < .001$), Cramer's V: 0.300 ($p < .001$). ^b χ^2 : 69.559 ($p < .001$), Cramer's V: 0.420 ($p < .001$). ^c χ^2 : 269.565 ($p < .001$), Cramer's V: 0.317 ($p < .001$).

1) と比較すると、Aro/Ace自認後のアロマンティックにおける男女どちらにも恋愛的に惹かれていない回答者の割合の方が自認前の回答者の割合よりも高いなど、シスジェンダー女性と同様の傾向がみられる。ただし、シスジェンダー男性による回答が少なく、その中でもグレイ(ア)ロマンティック、デミロマンティック、リスマンティック、クエスチョニングは特に該当者が少ないため、これらのカテゴリーについては傾向を把握することが困難である。

また、非シスジェンダーについても、Aro/Ace自認前の恋愛惹かれの分布(Table 1)と比較すると、Aro/Ace自認後のアロマンティックにおける男女どちらにも恋愛的に惹かれていない回答者の割合の方が自認前の回答者の割合よりも高い。ここから、シスジェンダー女性と同様の傾向が読み取れる。

Tables 3-5は、それぞれアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティ別に特定の人に対する深い関心の有無(設問:「特定の人のことを深く知りたいと思いますか。｣)、ドキドキの有無(設問:「特定の人に胸が「ドキドキ」する感情を抱くことがありますか。「ドキドキ」には憧れなど恋愛以外の好意的な感情も含まれます。)、交際意欲の有無(設問:「特定の人と「付き合いたい」と思うことがありますか。｣)の分布をみたものである。なお、本調査では各設問の選択肢として5段階で態度を測定しているが、以下の分析では3段階に変換したものをを用いる⁴。また、調査内にて「本調査における「特定の人」とは現実会ったことがある人を指します。」という注を表示している。

Table 3によると、アロマンティックの方が他のアイデンティティを持つ回答者よりも特定の人を深く知りたいと思う割合が低い。その一方で、ロマンティックやデミロマンティックはその割合が高く、グレイ(ア)ロマンティック、リスロマンティックや、クエスチョニングは中間的な位置を占めている。

Table 4によると、特定の人に対する深い関心の有無の分布と同様に、アロマンティックの方が他のアイデンティティを持つ回答者よりも特定の人に胸が「ドキドキ」する感情を抱くことがあるという割合が低い。しかしながら、ロマンティックの方が他のアイデンティティを持つ回答者よりも割合が高いのは特定の

⁴ 具体的には、「思う」「ある」と「やや思う」「ややある」を「ある」に、「どちらでもない」を「どちらでもない」に、「あまり思わない」「あまりない」と「思わない」「ない」を「ない」と再コーディングしている。

Table 3 アロマンティック・スペクトラム・アイデンティティと特定の人に対する深い関心の有無

(%)	テ ア イ ロ マ ン ク ン	ロ グ レ イ テ イ （ ア ） ク ン	テ デ イ ミ ロ マ ン ク ン	テ リ ス ロ マ ン ク ン	テ ロ マ ン ク ン	ニ ク エ ス チ ョ	そ の 他	全 体
ある	42.0	69.2	80.2	64.0	83.6	62.4	53.1	57.3
どちらでもない	11.0	7.7	5.8	13.0	6.4	10.6	14.6	9.9
ない	47.0	23.1	14.0	23.0	10.0	27.0	32.3	32.9
n	809	130	172	100	220	141	96	1,668

Note. χ^2 : 201.854 ($p < .001$), Cramer's V: 0.246 ($p < .001$).

Table 4 アロマンティック・スペクトラム・アイデンティティとドキドキの有無

(%)	テ ア イ ロ マ ン ク ン	ロ グ レ イ テ イ （ ア ） ク ン	テ デ イ ミ ロ マ ン ク ン	テ リ ス ロ マ ン ク ン	テ ロ マ ン ク ン	ニ ク エ ス チ ョ	そ の 他	全 体
ある	27.8	62.3	63.4	78.0	81.4	53.9	51.0	47.8
どちらでもない	4.0	6.2	3.5	2.0	4.5	5.7	4.2	4.2
ない	68.2	31.5	33.1	20.0	14.1	40.4	44.8	48.0
n	809	130	172	100	220	141	96	1,668

Note. χ^2 : 312.914 ($p < .001$), Cramer's V: 0.306 ($p < .001$).

Table 5 アロマンティック・スペクトラム・アイデンティティと交際意欲の有無

(%)	テ ア イ ロ マ ン ク ン	ロ グ レ イ テ イ （ ア ） ク ン	テ デ イ ミ ロ マ ン ク ン	テ リ ス ロ マ ン ク ン	テ ロ マ ン ク ン	ニ ク エ ス チ ョ	そ の 他	全 体
ある	7.4	23.1	45.9	28.0	66.4	20.0	28.1	23.9
どちらでもない	3.0	11.5	5.2	5.0	6.8	7.9	7.3	5.2
ない	89.6	65.4	48.8	67.0	26.8	72.1	64.6	71.0
n	809	130	172	100	220	140	96	1,667

Note. χ^2 : 430.644 ($p < .001$), Cramer's V: 0.359 ($p < .001$).

人に対する深い関心の有無の分布と共通している一方で、リスロマンティックの方がグレイ（ア）ロマンティック、デミロマンティックや、クエスチョニングよりも割合が高いという先ほどはみられなかった傾向が示されている。

Table 5によると、特定の人に対する深い関心の有無の分布やドキドキの有無の分布と同様に、アロマンティックの方が他のアイデンティティを持つ回答者よりも特定の人を独占したいと感じる割合が低い。ロマンティックの方が他のアイデンティティを持つ回答者よりも特定の人と「付き合いたい」と思うことがある割合が高いのもこれまで検討してきた分布の傾向と同様である。交際意欲の有無の分布では、デミロマンティックの方がグレイ（ア）ロマンティック、リスロマンティックや、クエスチョニングよりも割合が高い。

Tables 3-5を総合的に検討すると、アロマンティックをはじめとする多くのアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティで、特定の人に対する深い関心、ドキドキ、交際意欲というように、他者との行動を伴う欲求に関する項目の方が行動を伴わない欲求の項目から他者との行動を伴う欲求に関する項目になるにつれて、肯定的回答の割合が低くなっていく傾向がみられる。リスロマンティックのように必ずしもこの傾向にあてはまらない恋愛指向アイデンティティが存在するものの、例えばアロマンティック回答者のうち、特定の人に対する深い関心の有無については42.0%が肯定的回答、ドキドキの有無については27.8%が肯定的回答、交際意欲の有無については7.4%が肯定的回答をしている。これらの分析結果を踏まえて、以下では分析結果を踏まえた議論および今後の課題について検討する。

5 考察

5-1 分析結果を踏まえた議論

本稿では、日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛指向アイデンティティや恋愛惹かれ、恋愛に関連する欲求について記述し、恋愛指向の多面性を検討すべく、Aro/Ace調査実行委員会が実施した「Aro/Ace調査2020」を分析した。以下、分析で得られた結果の解釈を述べる。

Aro/Ace自認前および自認後の恋愛惹かれの分布をみると、アロマンティッ

ク・スペクトラム・アイデンティティによって傾向に違いがみられた。自認前、自認後の両方でアロマンティック自認がもっとも男女どちらにも恋愛的に惹かれたことがない割合が高いという結果は、アロマンティックの一般的な定義である「誰にも恋愛感情を持たない」(Decker, 2019, p. 43) と整合性があることを示している。また、ロマンティック自認は他のアイデンティティよりも異性に惹かれる割合が高いことから、ロマンティックが恋愛的に惹かれるアイデンティティとして認識されていることが確認できる。ただ、本調査では非スジェンダーを除き異性に恋愛的に惹かれる傾向が見られたが、海外の調査では異性よりも男女両方に恋愛的に惹かれる割合が高いという報告もあり (Antonsen et al., 2020)、これが日本特有の傾向といえるのかは議論の余地がある。

自認前と自認後の比較からは、いずれのアイデンティティでも自認後の方が男女どちらにも恋愛的に惹かれたことがない割合が高いことがわかった。恋愛的に惹かれないアセクシュアルのインタビュー調査では、自認後に恋愛の指向がゆるぐ経験が語られており (松尾, 2021)、恋愛的に惹かれには流動性がある可能性を指摘できる。ただし、それが自認の前後で認識や行動が変わるなど、当事者にとっての自認の重要性を指し示すものなのか、単に恋愛的に惹かれる流動性を示すものなのかについては今後の検討が待たれる。また、アロマンティックとロマンティック以外のアイデンティティでは、いずれもアロマンティックとロマンティックの間に位置するような数値であることがわかった。これは、アロマンティックとロマンティックがスペクトラムであり、各アイデンティティがその間に位置すると考えると理解しやすい。一方で、それぞれのカテゴリーは単に恋愛的に惹かれる強弱を表すわけではなく、デミロマンティックでいえば、情緒的な繋がりができてからのみ恋愛的に惹かれるを感じる (AUREA, 2021a) という要素が、いかに本調査の恋愛的に惹かれるの結果に反映されているのかは議論が必要な点である。また、リスロマンティックがロマンティックの次に恋愛的に惹かれる割合が高いのは、リスロマンティックの恋愛的に惹かれるがその感情が報われることや相手と関係を持つことを必要としないなどの定義 (AUREA, 2021a) との整合性から考えて妥当であると思われる。したがって、まれに／弱い恋愛的に惹かれるを感じる、または特定の環境下で恋愛的に惹かれるを感じるグレイ (ア) ロマンティック (AUREA, 2021a) やデミロマンティックは恋愛的に惹かれるを感じる程度または頻

度の低さや、恋愛的惹かれを感じる条件があるアイデンティティであるため、恋愛的に惹かれるリスロマンティックよりも恋愛的惹かれを感じるという回答の割合が低くなるという解釈も今後の議論として検討する価値がある。

次に、特定の人に対する深い関心、ドキドキ、実際意欲の分布から、アロマンティック・スペクトラム・アイデンティティによる違いが確認された。特定の人に対する深い関心については、深く知りたいという割合がロマンティックやデミロマンティックで高かったが、これは特定の人への関心が2つのアイデンティティでとくに強いことを示唆している。ロマンティックでその割合が高いことは恋愛的惹かれそのものが、特定の他者への関心と結びついているという見方もできるが、リスロマンティックがロマンティックより低い割合だったことから、特定の他者への関心と恋愛的惹かれが必ずしも一致するわけでない可能性もある。同様に、デミロマンティックで特定の他者への関心を示す割合が高かったことは、恋愛的惹かれそのものだけでなく、情緒的な繋がりができてからのみ恋愛的に惹かれる (AUREA, 2021a) という要素と関係がある可能性もある。一方で、松尾 (2021) は恋愛的に惹かれないアセクシュアルは相手によって態度を変えずに平等に接するという当事者の語りを報告しており、アロマンティックで特定の他者への関心がある割合は低かったのは、「特定の」という部分が影響しているという解釈も可能である。

ドキドキの有無に関しては、ほとんどのアイデンティティで特定の他者への関心の有無と同じ傾向が示されたが、リスロマンティックとデミロマンティックでは異なる傾向がみられた。ここから、リスロマンティックのアイデンティティには、特定の他者への関心よりもドキドキという感覚の方が恋愛的惹かれと結びつきが強い可能性が指摘できる。その反対に、デミロマンティックはドキドキという感覚よりも、特定の他者への関心の方が恋愛的惹かれとの結びつきが強い可能性が示唆される。実際意欲についても、アロマンティックとロマンティックの傾向はこれまでの項目と同様だった。一方、デミロマンティックがグレイ (ア) ロマンティックやリスロマンティック、クエスチョニングよりも実際意欲がある割合が高い結果だった。これは、情緒的な繋がりができてからのみ恋愛的に惹かれる (AUREA, 2021a) という定義から考えると、デミロマンティックの場合は情緒的な繋がりがあの人に恋愛的に惹かれることと実際との間に関連性があると推

察される。

最後に、各項目（特定の人に対する深い関心、ドキドキ、交際意欲）の結果から、交際意欲のような他者との行動を伴う欲求に関する項目の方が、特定の人に対する深い関心やドキドキのような他者への欲求ではあるものの、他者との行動を必ずしも伴わない欲求に関する項目よりも肯定的回答の割合が低い傾向があることがわかった。この結果は、英語圏の当事者コミュニティ調査でも確認されていることであり（AUREA Aro Census Team 2020, 2021）、特定の他者との関係性に対する態度が、恋愛の惹かれにおける準拠点となる可能性があるというこれまでの日本における質的研究とも同調するものである（松尾, 2021; 吉岡, 2019）。ここから、恋愛の惹かれの認識および恋愛の指向の自認において、他者との関係性（への欲求）が重要な役割を果たすことが示唆される。本稿と同じデータを用いてアセクシュアル・スペクトラムの自認と性的惹かれに関連する項目について分析した三宅&平森（2021）は、性的指向の自認においても他者との行動への欲求が準拠点となる可能性を示しており、この傾向が恋愛の指向と性的指向どちらにも共通する傾向である可能性を示唆している。

その一方で、すでに述べたように、デミロマンティックやリスロマンティックのように項目によって肯定的回答の割合が異なる場合があり、他者との行動を伴う欲求と恋愛の惹かれにおける認識の関係性は複雑であると推察される。デミロマンティックやリスロマンティックの定義に他者との関係性に関連する条件が含まれるように、恋愛の指向の自認と他者との関係性（への欲求）が関連することには変わりはないと思われるが、恋愛の惹かれは単一の基準では測定できない概念であることが本分析により計量的に示された。以上の示唆は恋愛の惹かれを扱う研究全般にも適用されると考えられ、単一の基準で測定してきた他のジェンダー・セクシュアリティ研究などでも議論していく必要がある。例えば、ロマンティック・セクシュアル（アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムではない）の人であっても、恋愛に関する欲求を細かく分けて聞いてみると、本稿と同様に多様な結果が得られる可能性がある。その点で、本稿で提示した内容はアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム研究以外にも広く開かれているといえよう。

5-2 今後の課題

本稿では、日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛指向アイデンティティや恋愛的感情、恋愛に関連する欲求について記述し、恋愛指向の多面性を示したが、限界もある。主に、以下3つの限界点を示したい。第1に、本稿では当事者コミュニティのネットワークを利用した調査のデータを分析しており、本稿で示した結果が日本のアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム人口一般に適用できるか否かについては慎重になる必要がある。「Aro/Ace 調査2020」はオープン型ウェブ調査のメリットである、関心層にアプローチしやすいという面があるものの、性別や年齢階級も含め、本調査で示した回答の分布を一般化するためには無作為抽出の調査が必要である。第2に、本稿でアプローチした当事者に偏りがある可能性もある。例えば、すでに述べたように、恋愛感情を抱いたことがない割合は女性で2.9%、男性で2.0%だったという無作為抽出調査の結果が報告されており（釜野 et al., 2019）、本稿で使用したデータよりも性別による差が小さい可能性がある。当然のことながら、恋愛的感情と恋愛指向の自認は別概念であり、単純な比較はできないが、今後は恋愛指向の自認プロセスに関する質的研究を進めるとともに、より広範に当事者にアプローチする調査設計を模索する必要がある。第3に、本稿では量的調査の特性およびアロマンティック・スペクトラム・アイデンティティ別の分析という新規性から、各結果の意味や背景の解釈に限界がある。例えば、本稿では、各アイデンティティの結果の解釈を主に定義に照らして考察したが、すでに述べたように日本における用語の使い方が多様であることを考慮すると、定義のみで解釈することが妥当であるか留意が必要である。したがって、今後は質的研究など多様なアプローチからの調査、研究が強く望まれる。

本稿では、日本におけるこれまでの研究（Lehtonen, 2018; 釜野 et al., 2019; 松尾, 2021; 松浦, 2020; 三宅 & 平森, 2021; 吉岡, 2019）では中心に扱われてこなかったアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛指向に注目し、さらにアロマンティックとロマンティックの比較研究（Antonsen et al., 2020; Carvalho & Rodrigues, 2022）を超えて、アロマンティック・スペクトラムの恋愛指向に関連する欲求等について検討した。今後は、アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの恋愛指向とそれ以外のセクシュアリティにおける

恋愛指向を比較するなど、セクシュアリティの多様性と複雑性を検討していきたい。アロマンティックやアセクシュアルが社会的に注目されつつあるものの、アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムに関する学術研究が不足している中で、本稿で示した結果とその限界点を踏まえた今後の研究の発展が望まれる。

Acknowledgments

「アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム調査2020」データの二次利用にあたっては、調査主体である As Loop の許可を得た。本稿の執筆にあたり、2名の匿名査読者より極めて重要で有益な指摘をいただいた。また、英文要旨の作成にあたっては、カリフォルニア州立大学サンバーナーディーノ校社会学部の Megan Carroll 氏による助言を受けた。ここに記して感謝申し上げたい。

References

- Antonsen, A. N., Zdaniuk, B., Yule, M., & Brotto, L. A. (2020). Ace and aro: Understanding differences in romantic attractions among persons identifying as asexual. *Archives of Sexual Behavior*, 49 (5), 1615–1630.
- AUREA. (2019). *Aromantic history*. AUREA. Retrieved August 30, 2022, from <https://www.aromanticism.org/en/news-feed/aromantic-history>
- AUREA. (2021a). *Aromantic identity terms*. AUREA. Retrieved August 30, 2022, from <https://www.aromanticism.org/en/identity-terms>
- AUREA. (2021b). *Basic aromantic terms*. AUREA. Retrieved August 30, 2022, from <https://www.aromanticism.org/en/basic-terms>
- AUREA Aro Census Team 2020. (2021). *The aro census 2020 report*. Retrieved August 30, 2022, from <https://aromanticism.org/arocensus>.
- Brotto, L. A., Knudson, G., Inskip, J., Rhodes, K., & Erskine, Y. (2010). Asexuality: A mixed-methods approach. *Archives of Sexual Behavior*, 39 (3), 599–618.
- Carvalho, A. C., & Rodrigues, D. L. (2022). Sexuality, sexual behavior, and relationships of asexual individuals: Differences between aromantic and romantic orientation. *Archives of Sexual Behavior*, 51 (4), 2159–2168.
- Chu, E. (2014). Radical identity politics: Asexuality and contemporary articulations of identity. In K. J. Cerankowski & M. Milks (Eds.), *Asexualities: Feminist and queer perspectives* (pp. 79–99). New York: Routledge.
- Decker, J. S. (2019). 『見えない性的指向 アセクシュアルのすべて——誰にも性的魅力を感じない私たちについて』(上田勢子, Trans.). 東京: 明石書店. (Original work published 2015).
- Diamond, L. M. (2003). What does sexual orientation orient? A biobehavioral model distinguishing romantic love and sexual desire. *Psychological Review*, 110 (1), 173–192.
- Lehtonen, K. (2018). *No romantic feelings – asexuality in Japan: Ren'aikanjou nai? Nihon ni okeru asekushariti*. Retrieved August 30, 2022, from <https://trepo.tuni.fi/handle/10024/103135>
- Aro/Ace 調査実行委員会. (2021). 『アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム調査 2020 調査結果報告書』. Retrieved August 30, 2022, from <https://asloop.jimdofree.com/arocensus/調査結果/2020年度/>
- アシタノカレッジ. (2022). 「アロマンティック」「アセクシュアル」という言葉を、あなたは知っていますか？～多様な性を考える～. TBS ラジオ. Retrieved August 30, 2022, from <https://www.tbsradio.jp/articles/54692/>
- 釜野さおり, 石田仁, 岩本健良, 小山泰代, 千年よしみ, 平森大規, 藤井ひろみ, 布施香奈, 山内昌和, & 吉仲崇. (2019). 『大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生についてのアンケート報告書 (単純集計結果)』. JSPS 科研費 16H03709 「性的指向と性自認の人口学—日本における研究基盤の構築」・「働き方と暮らしの多様性と共生」研究チーム (研究代表者 釜野さおり) 編 国立社会保障・人口問題研究所 内. Retrieved August 30, 2022, from [http://www.ipss.go.jp/projects/f/SOGI/*20191108大阪市民調査報告書\(修正2\).pdf](http://www.ipss.go.jp/projects/f/SOGI/*20191108大阪市民調査報告書(修正2).pdf)
- 釜野さおり, 石田仁, 風間孝, 平森大規, 吉仲崇, & 河口和也. (2020). 『性的マイノリティについての意識: 2019年(第2回)全国調査報告会配布資料』. JSPS 科研費 (18H03652)「セ

- クシュアル・マイノリティをめぐる意識の変容と施策に関する研究」(研究代表者広島修道大学 河口和也) 調査班編. Retrieved August 30, 2022, from <http://alpha.shudo-u.ac.jp/~kawaguch/2019chousa.pdf>
- 松浦優. (2020). 「アセクシュアル研究におけるセクシュアルノーマティビティ (Sexual-normativity) 概念の理論的意義と日本社会への適用可能性」. 『西日本社会学会年報』, 18, 89-101.
- 松尾由希子. (2021). 「Aセクシュアルの大学生が捉える自己と将来への展望: インタビュー調査を通じて」. 『静岡大学教育研究』, 17, 37-52.
- 三宅大二郎, & 平森大規. (2021). 「日本におけるアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラムの人口学的多様性—「Aro/Ace 調査2020」の分析結果から—」. 『人口問題研究』, 77(2), 206-232.
- 日本放送協会. (2022). 「知っていますか?“アロマンティック・アセクシュアル”」. NHK ニュース. Retrieved August 30, 2022, from <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220322/k10013544761000.html>
- 野口雄大, 押田友太, & 土井祥平 (Directors). (2022). 『恋せぬふたり [DVD of television series]』 東京: NHKエンタープライズ.
- 埼玉県. (2021). 『埼玉県 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査報告書』.
- 特定非営利活動法人にじいろ学校. (2021). 「用語一覧」. 特定非営利活動法人にじいろ学校. Retrieved August 30, 2022, from <https://www.nijikou.com/%E7%94%A8%E8%AA%9E%E4%B8%80%E8%A6%A7/>
- 吉岡真梨子. (2019). 「Asexualであるという自覚はいかにしてなされ自己受容されるのか?: ライフストーリー・インタビューによる事例から」. 『学習開発学研究』, 12, 61-70.

Abstract

Multidimensionality of Romantic Orientation among the Aromantic/Asexual Spectrum in Japan

Daijiro MIYAKE, Daiki HIRAMORI

In recent years, the aromantic/asexual spectrum has become more visible in Japan, and research on sexual orientation among the aromantic/asexual spectrum remains limited but is increasing. However, there is extremely little research that focuses on romantic orientation. Studies on romantic orientation in Western countries tend to discuss aromanticism as one of the romantic orientations that asexual people possess. In Japan, on the other hand, the framing of romantic orientation in the aromantic/asexual spectrum community differs from that in Western countries, as the terminology in Japan occasionally labels someone “asexual” only if they are neither romantically nor sexually attracted to other people. Furthermore, extant quantitative research tends to be limited to discussions that rely on the dichotomy of aromantic or not, despite findings from community-based surveys that suggest romantic orientation is multifaceted, making it necessary to discuss various dimensions of romantic orientation. This study used the “Aromantic/Asexual Spectrum Survey 2020,” a web survey conducted by the Aro/Ace Survey Executive Committee, to examine the multidimensionality of romantic orientation by describing romantic identity, romantic attraction, and romantic desire. Findings indicated that the distributions of romantic attraction before and after self-identification as aro-ace differed by aromantic spectrum identity, such as alloromantic, aromantic, gray(a)romantic, demiromantic, lithromantic, and questioning. Differences by aromantic spectrum identity were also observed in the distributions of deep interest in a particular person, romantic excitement, and the desire to date. Items related to desires that involve actions with others, such as the desire to date, tended to have a lower percentage of positive

responses than items related to desires that do not necessarily involve actions with others, such as deep interest in a particular person and romantic excitement.

Keywords:

aromantic, asexual, community-based survey, LGBT, romantic orientation

研究論文

「性的な存在」の関係論的形成 ——恋愛／性愛における違和の経験に着目して

佐川魅恵

1 はじめに

本稿の目的は、恋愛／性愛を契機とする性別違和の経験が、ジェンダー、セクシュアリティ、身体関係をどのように作り上げ、変化させていくのかを、「女」／「男」という性別二元論に当てはまらない性を生きる4名の恋愛／性愛の語りから経験的に析出していくことである。

「ジェンダー」と「セクシュアリティ」という概念やその関係をめぐっては、社会運動や当事者の立場と理論的研究の両面から、その複雑さが議論されてきた (Valentin, 2007; Rubin, 1984/1997; Sedgwick 1990/2018; Butler 1994/2020)。一方でゲイ／レズビアン運動においては、自らがどのような性別に属するのかという性自認 (gender identity) と恋愛感情を向けたり性的欲求を抱いたりする性的指向 (sexual orientation) は明確に区別されるべきである (「ゲイ男性は単に男性を愛する男性である」等) ことが主張されてきた (Valentin, 2007, pp. 53-54)。他方で学術的にも、「セクシュアリティ」と「ジェンダー」は「社会的実践に関してはふたつの異なった領域の基礎を形成している」のであり、分析概念として分離して捉えるべきとされる (Rubin, 1984/1997, pp. 133)。

しかしこうした議論では、ジェンダーとセクシュアリティを概念上別個のものとしてみなしつつも、一方が他方との関係で表現されるという点で両者は時に不可分なものとしても理解される必要があることも同時に強調されている (Sedgwick, 1990/2018, pp. 45; Butler, 1993/2021, pp. 326)。それゆえより経験的な社会学的研究では、ジェンダーがセクシュアリティを通じて、あるいはセクシュアリティがジェンダーを通じてどのように機能し、両者がいかにしてアイデンティティや他者との関係を形成しているのかを探求している。

特にトランスジェンダー研究においては、こうしたジェンダーとセクシュアリ

ティの区別がトランスジェンダーの間でしばしば曖昧になる傾向にあることが指摘されている (Bettcher, 2014)。それゆえ両者の相互作用を理解する上では、身体化 (embodiment) の様相が重要であるという (Cuthbert, 2019, pp. 843-844)。例えばトランスジェンダーの中には、あるジェンダー化された身体性の維持や変化が、性的指向やセクシュアリティをめぐる自己を規定したり揺るがしたりすることがある (Schilt & Windsor, 2014; Doorduyn & van Berlo, 2014)。こうしたトランスジェンダーの身体性は、特にその性別違和に関して、「その人自身がどのように自らの身体を感じているか」という一人称的な「身体イメージ」の問題として理解される必要があるだろう (藤高, 2020)。

特に恋愛／性愛の場面では、こうしたジェンダー、セクシュアリティ、身体の複雑な絡まり合いは自己と特別な他者の関係性をめぐって形成されていく。トランスジェンダーの性別違和がときに自身の身体イメージをめぐってもたらされ、さらにそれが恋愛／性愛を契機とする場合、ジェンダーとセクシュアリティの絡まり合いは「特別な他者の身体をどのようなものとして私を感じるか (感じることを望むか)」「私の身体を特別な他者はどのように感じるか (感じることを望むか)」といった他者との関係を通じた身体イメージをも織り込んだものとなる。

本稿はこうしたトランスジェンダーの多層的な性の経験をめぐる諸研究を踏まえた上で、出生時に割り当てられたジェンダーとは異なるジェンダーを生きる者のうち、特に二元的でない性自認を有するXジェンダー¹の語りに着目する。これらの恋愛／性愛を契機とした違和の発現と、その後の性に対する認識や感覚の変化に着目することで、性別二元制を基盤としたジェンダー、セクシュアリティ、身体の構造的連関を明らかにし、二元制に回収されないそれらの多様な結びつきの実践を描き出す²。

¹ Xジェンダーとは、「女」／「男」という性別二元論に当てはまらない性自認を指す言葉として、1990年代後半から関西のクィア・コミュニティで用いられるようになったのが始まりだと言われている (Dale 2013)。この言葉で表現される当事者の性の感覚はさまざまであり、「中性」、「両性」、「不定性」、「無性」などの下位分類で表されることもある。

² Xジェンダーの恋愛／性愛や、そこにおけるジェンダーとセクシュアリティの多層的な結びつきについては、Dale (2013) や武内 (2021) でも考察されており、本稿にとっても重要な先行研究である。本稿ではこれらの研究を引き継ぎつつ、恋愛／性愛におけ

2 調査と方法

本稿で使用するデータは、2016年6月～2017年7月に21名のXジェンダーを自認する者への半構造化インタビューから得られたものの一部である。詳細は表に示した。性別違和を感じ始めたきっかけに恋愛や性愛における出来事を挙げていた4名の語りを対象に分析を行った。Tさん以外の3名には2021～2022年にかけて当時のスクリプトを参照しながら再度インタビューを行っている。基本的には1回目のインタビューデータを分析対象としているが、必要に応じて2回目のインタビューデータも部分的に参照している。その際には、文中で2回目のインタビューにおける語りであることを明示的に記載している。

表 調査協力者概要（1回目のインタビュー時点）

仮名	年齢	出生時性別付与	性自認/ ジェンダー・アイデンティティ	性的指向/ セクシュアリティ ³
U	20代	女性	「中性」、「Xジェンダー」	「男の人が好きなんじゃないかな」
D	10代	女性	「Xジェンダー」	「10人いたら7人ぐらい女性」
I	20代	男性	「[[男女] どちらの感覚もありそう]」、「Xジェンダー」	「どちらかと言えば女性」
T	20代	男性	「女性」、「Xジェンダー」、「ジェンダークィア」	「パンセクシュアル」

インタビュー場所は大学構内の貸会議室やカフェ、ファミリーレストランなど、その都度調査対象者と相談しながら決め、1回1～2時間程度かけて話を伺った。

調査にあたっては、メールで事前に調査依頼書と参加同意書／同意撤回書を送付し、調査の概要について説明した。またインタビュー当日は口頭でも依頼書の内容を説明し、インタビューはいつでも中断できること、中断や辞退によって不利益を被ることはないこと、インタビューデータは個人が特定されないよう十分に匿名化した上で使用することなどを説明し、同意書に署名をもらった上でインタビューを行った。また本稿の執筆にあたっては、原稿内で引用している語り

る性別違和の「発現」に着目することで、ジェンダー、セクシュアリティ、身体が結びついていく個別具体的な過程とそのつながりの様相をより詳細かつ具体的に描き出すことを試みる。

³ ここでは関連すると思われる当人の発言の一部をそのまま表にまとめている。

やその解釈に問題がないかを事前に確認してもらい、了承を得た上で使用している。

3 分析

本稿の分析対象となる4名は、出生時に割り当てられた性別に対する違和を感じ始めたきっかけの一つに恋愛や性愛に関わる事柄を挙げている人たちである。まずUさんの事例から、他者からのまなごしを通して、ある人が「性的な存在」として立ち現れる過程や要因を考察する(3-1)。次にDさんの事例から、他者を性的な存在としてまなごすことによって、自己の中に新たな性的主体が立ち上がっていく様子を考察する(3-2)。そして、性的にまなごす／まなごされることが自己や他者を性的な存在にしてしまうものだとすれば、他者を性的に「まなごさない」ことが、性的な存在であることとどのような関係にあるのかをIさんの事例から考察する(3-3)。さらに、恋愛／性愛が性的な存在である者同士によって成立する関係だとすると、望みの性としてまなごされる／まなごされないことが親密な関係を構築する上でどのような意味をもつのかをTさんの事例から明らかにする(3-4)。

ここで「性的」に「まなごす／まなごされる」とは、単に性的欲望のある人に向ける／向けられるということに留まらない意味が込められている。第一に、ここでの「性的なまなごし」とは、性的欲望や恋愛感情に関わるさまざまな「惹かれ」を自己／他者に対して有し、それによって自己／他者にさまざまな形で働きかけることを指す⁴。しかし第二に、そうした「性的なまなごし」は、自己／他者に特定のジェンダーを付与した上で、そのようなジェンダー化された自己／他者に性的欲望や恋愛感情を向ける／向けられるということでもある。このように「性的なまなごし」とは、性的欲望や恋愛感情を自己／他者に対して向ける／向けられることと、それに伴って自己／他者をジェンダー化しようとするのが複雑に絡まり合うことをもたらすものである。こうしたセクシュアリティやジェン

⁴ 「恋愛的惹かれ」と「性的惹かれ」を区別することは、アセクシュアル・コミュニティにおいて重要である(池田2019)。ただし4名の事例では、両者は明確に分けられない形で登場している。そのことから本稿では性別違和が現れる場面として「恋愛／性愛」という本来は区別される必要のある領域をあえて併記して用い、区別されるべき時には片方のみを用いた。

ダーをめぐる相互作用を通じて現れる自己や他者のことを、本稿では「性的な存在」と呼んでいる。

3-1 「そういう目で見てくる」——Uさんの語り

FiX⁵のUさんは20代の会社員で、Xジェンダーとして自認したのは1年ほど前だという。セクシュアリティについて尋ねると、「もともと恋愛に興味がない。ほぼない、くらい」といい、これまでに「好きになった人」が「男の人」だったため、「男の人が好きなんじゃないかな」と話していた。インタビュー後半では、「あんまり性別は関係なく好きになって気はしています」とも話しており、Uさんの性的指向ははっきりと自覚されているようなものではない。

Uさんが性別違和を感じるようになったのは大学進学後である。中学・高校と友人は男性が多く、彼らから「同性のように扱われてきた」ため「自分の性別を意識することもな」かった。大学進学のために上京し新しい環境での生活が始まるものの、「女の子らしい格好とかに嫌悪感、自分ができないな」と思い、自分と周囲の女子学生との間に差を感じ始めたという。以下はそれに続く会話である。

筆者：じゃあ本格的に性別違和を感じるようになったのは大学に入ってから？

U：うん。大学入ってからですね。まあでもあと一番その、一番しんどいなと思ったのが、男の人から女扱いをされるようになったっていうのが一番しんどくて。なんかこう、うん。要はそういう目で見てくるわけじゃないですか。それがすごい不快で不快でしょうがないっていう。その、本当に女の子として扱われるのがもう嫌で嫌で嫌でしょうがないっていうのが、きっかけですかね。

大学に入って、Uさんが「一番しんどいなと思った」こととして挙げているのが、「男の人から女扱いをされるようになった」ことである。「要はそういう目で

⁵ Female to X-jendāの略。出生時に割り当てられた性別が「女性」であるXジェンダーのことを指して使われる。

見てくる」という言葉が続くように、そこには性的な目で見られることが含意されている。Uさんの性別違和に関する語りの中では、性的な対象としてまなざされることと、女性として接されることが強く結びついた形で現れる。つまりUさんにとって「そういう目で見てくる」ことは同時に「女の子として扱われる」ことも意味しているのである。それはUさんの性別違和を引き起こした「決定的」な出来事として語られる「好きな人」との「関係」においてもよく表れている。

U：あとまあ、決定的だったのは、好きな人とこう、好きな人と付き合うまではいかなかったんですけど、恋人未満くらいの関係になってしまったんですよ。で、その時に、「あー、これまじ無理だろ。わたしやっていけない」ってちょっと思ったのが。

筆者：その方のことは好きなんだけどってことですよ？

U：いやすごい好きですけど、全然好きなんですけど、ただなんかこう、あーと思って。やっぱ、本当にそういう女性としてみられることに対してなんかすごい、それが一番爆発したって感じですね。あ、無理無理と思って。

「好きな人」と「恋人未満くらいの関係」になった際に、Uさんは「まじ無理」「わたしやっていけない」と感じてしまう。相手に好意をもっている「けど」、相手から好意を向けられることは同時に「女性としてみられる」ことを意味してしまうため、強い嫌悪感が生じてしまう。

好きな相手との関係構築を望みつつ、それを拒否する（せざるを得ない）というアンビバレントな感情について、Uさんは自分のことを「すげー我儘だなと思う」と話している。またこの後の箇所でも「相手に対して申し訳なさしかない」とし、こうした感情によって相手を振り回してしまうことに後ろめたさを感じている。また、「別にキスしたりそういうのって嫌じゃない」、「生理的に嫌じゃなかったらやれる」とし、こうした感情は身体的な接触それ自体に向けられた嫌悪ではないことが説明される。しかし、「好きな人」との性行為については以下のように語っている。

筆者：でも別に、恋愛対象として好きな人が生理的に無理なわけではないん

ですよ？

U：無理なわけではない、けど、何だろうな。なんか、やってしまった次の日とか、うわー、死にてーって思うっていう。

筆者：そうなんですね。

U：そう。なんか、自分が、すごい世の中の女、女になってしまうじゃないですか、なんか立場的には。それがすごく、耐えられないっていう。絶対無理とか、本当に。

「好きな人」との性行為の翌日に、Uさんは強い自己嫌悪に苛まれてしまう。なぜなら「立場的に」、「世の中の女」になってしまうからである。ここでは第三者的な視点が出てきており、自己と他者との関係や相互行為が異性愛的な枠組みで理解できてしまうがゆえに、自身が否応なく「女」という「立場」に置かれてしまうとUさんはみなし、それを強く拒絶しているのである。

さまざまな視点が重なり合って生み出される「女である」ことに対する違和感、Uさんの恋愛／性愛に関する認識にも影響を与えている。「何でもないものとして見てもら」えれば良いというのが、それはそんなに簡単なことではない。今後付き合う人は、Xジェンダーであることを理解してくれる人でなければ難しいかという筆者の問いかけに対し、Uさんは以下のように回答する。

U：んー！うん。やーやっぱそうですね。[…]友だちみたいな感じで、付き合えたら一番楽だろうと思うけど、それ友だち以上、ん？友だちと何が違うんだ？とかって思って。もともと男の子友だちすごく多くて、別に雑魚寝とかもよくするから。じゃあ、ね。それ以上の関係になるかならないかの話かなと思うけどそれもそれでちょっと違うんじゃないかと思って。だから今すごい付き合うって何、何ぞ？っていう感じです。いやでも、なんか本当に、だからすごく、「じゃあ、彼氏になりたい」とか「付き合っ」て言われると、すごい嫌になっちゃうんですよ。なんかもうその瞬間、はーと思って、嫌だと思って、相手に対して申し訳なさしかない（笑）

ここでは友だちと恋人を区別することの難しさが語られている。「友だちみた

いな感じで付き合えたら一番楽」だが、それは「友だちと何が違うんだ？」という疑問に繋がっていく。そして「それ以上の関係」(=性行為を伴う関係)になるかどうかの違いをおくのも「ちょっと違くないか」と感じ、こうした疑問の連鎖は、「付き合うって何ぞ？」という、恋人同士になるとはどういうことなのかという疑問を生み出している。その後には「いやでも」「だからすごく」など少し混乱した様子で、はっきりとした原因は自分でも分からないが、交際を申し込まれた瞬間に否応なく嫌悪感が発生してしまうこと、そしてそれに対して「申し訳なさ」があることが語られている。

Uさんのこのような性別違和の経験は、「女である」ことや、「女として存在する／させられる」ことが、自己と他者のさまざまな視点をとおして成立していることを示している。そこではジェンダー化された社会に生きるUさんの視点もまた、Uさんが「女として存在させられる」ことを成立させる機制の一部となっているように思われる。つまりUさんの語りは、恋愛／性愛という現象において、特別な他者から向けられる愛情や性的な欲望が、Uさんに特定の身体イメージを付与し、自己をジェンダー化された存在として、いわば「性的な存在」として立ち上がらせてしまうことを表しているのである。

3-2 「男の振る舞いがしなくなった」—— Dさんの語り

恋愛／性愛を通じて性的主体が立ち上がってくる仕方には、相手のまなざしだけでなく、自分が相手をどのような「性的な存在」——恋愛／性愛にまつわる欲望や感情と結びつきながらジェンダー化される存在——としてまなざすかという点も関係している。なぜなら、他者をまなざすことを通じて、自分自身も新たに性的主体となるからである。FtXのDさんの事例からは、「女性」を性的にまなざすことを通じて、——「女性」ではなく——「Xジェンダー」としての性自認が現れ、それが行為と結びつきながら自己の身体のあり様を変えていく様子が描かれる。

Dさんは10代の学生である。女性的な服装に対する嫌悪や身体違和があるが、社会的に「女性」とみなされることに違和感はないという。Dさんにセクシュアリティについて尋ねると、「うーん、どうなんですかね」と少し悩んだ様子で、「一応今、は女の人のパートナーがいる」と答えている。好きになるのは女性の

方が多いといい、「10人いたら7人ぐらい女性」の割合で、男性に「興味をもたないわけではない」とも話していた。Xジェンダーとして自認したのは1年半ほど前で、大学のサークルでこの言葉を知ったという。DさんにXジェンダーとして自認したきっかけについて尋ねると、「今思い返すと」と、Xジェンダーとして自認した現在から過去を振り返り、幼稚園のころから女性の服装を嫌がっていたことや、男の子とばかり遊んでいた経験が語られる。中学校に入ると、そうした自分が「なんか周りと違うなって思い始めた」といい、当時の意識と重ね合わせられるように性別違和の経験が語られるようになる。高校生になると「あなんか本当に違うんだって確信した」と、周囲と自分との間に明確なズレを感じるようになったという。以下はそれに続く会話である。

筆者：でもそのときは特に、言葉とかも分からないし

D：んーもともとバイだと思ってました。高校生のときに、どっちとも付き合ったんですよ。男の人と女の人と付き合って、あ、どっちも全然いけるわってなって。「バイセクシュアル」っていう言葉は知ってたので。最初はまあレズビアンかと思ったんですけど、男の人も好きになれるなーと思って。バイセクシュアルだなんてずっと、高校、3年間ぐらいずーっといて。で、女の子とその付き合ったときに、男の振る舞いをしたくなった⁶んですよ。それはなんか違う。バイセクシャルなのかなー？ってなって。

大学に入って「Xジェンダー」という言葉を知る以前のDさんは、自身をレズビアンやバイセクシュアルとして認識していた。小学校や中学校では「全然、男の子好きになれなかった」といい、恋愛感情が女性にのみ向いていたため「最初はまあレズビアンかと思った」という。そして高校に進学し、そこで男性の恋人ができたことから、その認識はバイセクシュアルに変わる。しかし、女性と付き合った際に「男の振る舞いをしたくなった」ことをきっかけに、バイセクシュアルとは「なんか違う」と感じ、バイセクシュアルという認識に疑問を持ち始め

⁶ 2回目のインタビューでこの出来事を振り返っていたときには、「男」というよりも「頼りたいみたいなの、かっこいい、と言われたみたいなの、そんなイメージ」と説明している。

る。相手の性別に応じて特定の振る舞いをしたいという欲求は、レズビアンやバイセクシュアルといった性的指向に基づく組み合わせだけでは説明できないと感じたのである。こうして、周囲の人たちとは「違う」という感覚の理由は当初性的指向によるものだと考えられていたが、その意識は性自認へと向けられるようになる。そこから、「性同一性障害」や「トランスジェンダー」などの概念を参照しながら自身の性について考えていく中で、大学のサークルで「Xジェンダー」という性のあり方に会い、自認するに至ったという。

Xジェンダーとして自認したのと同じ頃、Dさんはネット上の掲示板で知り合った女性と仲良くなり、付き合うようになる。相手は当初バイセクシュアルとして自認していたが、「バイって言われると、[Dさん自身が] 男女でくられる」と感じたためそれを伝え、パンセクシュアルに認識を改めてもらったという。そのことをDさんは「セクの強要をしました」と笑いながら話していた。しかし交際が始まりしばらく経った頃から、その相手との性行為の際にDさんは強い身体違和を感じるようになり、性的な関係をもつことが難しくなってしまう。以降は2回目のインタビューにおける語りである。

D：なんか自分とその身体のズレがあるから、楽しくないんですね。[…]
 なんかずーっと付き合っていると、[…] やっぱりその、愛を確かめ合うみたいな意味が強くなってくると、[…] そうなってくると、なんか自分、はこんなことをしたいわけじゃないみたいな。こうやって喜ばせてあげたいわけじゃないみたいな、認識のズレが本当に激しくなっちゃって。X年目ぐらいから、なんか、もういいかもってなっちゃったんですね。そういう夜の関係を持つのが。…だし、なんか毎回虚しくなっちゃうし。なんか、うん。納得できないなーみたいな、虚しさをずっと抱えて、あの回数を重ねていってしまったので。

Dさんは「自分とその身体とのズレ」があるため、パートナーとの性行為を「楽しむ」ことができない。この「ズレ」について別の箇所では、「自分がしたいこと、は、女性の身体であるものではないなっていうのをすごく思っていて」と話している。それについて筆者がまた別の箇所でも、そこでは男性的な身体がイ

メージされているのかと尋ねると、「いや、なんか、単純に男性器が欲しいんですよ。そういう行為においては」と答えている。Dさんにとって「男性器」は必ずしも男性的な身体を意味するものではない。Dさんはあくまで「男性器」を使った性行為をしたいと考えているのであり、それは男性として性行為を行いたいということではなく、Dさんがしたい行為において必要なものとして説明されている。しかし自分の身体には「男性器」がなく、そうした行為ができないため、自分の欲望と現実の行為、またそこにおいてイメージされる身体と自身の身体との間に「ズレ」を感じているのである。その「ズレ」の感覚は性行為の回数を経るごとにどんどん強くなっていった。

性愛におけるDさんの身体違和の経験は、このように常に行為との関係のもとで語られる。Dさんはその際の感情を「納得できない」や「虚しさ」と表現している。また別の箇所では「物足りない」、「もどかしい」とも表現していた。そうして、あるときからパートナーと性行為を行うことを止める。自分の身体では本当にしたい行為ができないために生まれるこうした感情は、相手の「想い」に「応えられてあげてな」という「苦し」さや性行為をすることに対する「プレッシャー」にも繋がっていた。

まなざす行為と結びつきながら変化するDさんの身体イメージは、個別に完結したものとして存在するのではない。それはむしろ、パートナーに対して行いたい振る舞いできない「もどかしさ」からも分かる通り、ある種の葛藤をも生み出している。つまりDさんの困難として立ち現れている身体イメージは、パートナーも含めた2人の相互行為——とりわけ性行為——によってはじめて生み出されたイメージなのである。パートナーとの関係がなければDさんの「男性器が欲しい」という欲求やそれによる身体違和もなかったかもしれない。ここにおいて、身体は常に一貫した不変のものとして存在するのではない。それは他者との関係の中で、その意味付けや感じられ方、輪郭が変わっていくものである。

3-3 「恋愛感情もあんまり分かんない」——Iさんの語り

UさんとDさんの性別違和の経験からは、まなざし／まなざされることを通じて、人が性的な存在になる様子が示されていた。恋愛／性愛に基づく親密な関係性が、人が性的な存在であることによって成立する関係だとすれば、他者を「ま

なごさない」ことが、性的主体であることといかなる関係にあるのかを考えることも必要である。MtX⁷のIさんの事例からは、恋愛的／性的惹かれを経験しないことが、周囲の男性と自分との間に「ズレ」の感覚を生じさせていく様子が示される。

Iさんは20代の学生で、大学で運動部に所属している。幼少期から何となく女性的な服装に対する憧れがあり、「[男女] どちらの感覚もありそう」と思っていたという。女性的な服装に対する憧れは今でも変わらないが、一方で男性的な服装に対する嫌悪感があるわけではないため、中学・高校は性自認が揺らぐことはなかった。Xジェンダーとして自認したのは2年ほど前で、インターネットで「男でも女でもない」というキーワードを検索していた際、Xジェンダーという性のあり方に会ったという。そうしたワードで検索したきっかけを、Iさんは以下のように語っている。

I: 検索してたきっかけは、うーんと、まあ、端的に言うと、なんか、まあ、自分の自認が、男かと言いつれいなあとと思うところがあるて、調べたんですけど。多分なんか、いろいろあるんですけど、多分、友だちとかといると、なんとなくこう、感覚が違うんですね。うーんと、なんつったらいいんだろう。恋愛とか、うーん、女性に対する、なんだろう、[...] こう一緒に、なんだろう合宿とか、いろいろしてると、たまになんか、そういう、話 [= 異性愛男性向けアダルトコンテンツに関する話] になって。サイトの名前とか女優の名前とか出るんですけど、全く見ないので分かんないんですよ。だから、それ、は、なんだろうそういうそうじゃない人はあんまり分かんない、なんつったらいいんだろう。自分の周りに見てなさそうな人がいない? というか。なんか大多数の人が見てるのかなっていうのを、思って。うん。っていうのは、あります。いろいろあります。順番に(笑) 順番に話しますけど。多分、ここ最近で起こった出来事で何かって言われたら多分一番はそれ。だから、ズレてるなっていうか。

⁷ Male to X-jendā の略。出生時に割り当てられた性別が「男性」であるXジェンダーのことを指して使われる。

「男でも女でもない」というワードで検索していた理由を、「自分の自認が、男かと言いつれられないなあと思うところがある」ったからだというのが、そうした認識は、友人たちとの比較の中で出てきている。「恋愛」や「女性」というものに対して、周囲の男友だちとは「感覚が違う」と感じており、そうした感覚が生じた場面の一つとして挙げられているのが、運動部の合宿である。「そういう話」(=異性愛男性向けアダルトコンテンツに関する話)が出てきたが、Iさんはそれらを見ないので話についていくことができない。さらに、そうしたコンテンツに関心をもたない人が自分以外に存在しないように感じられたため、周囲と自分との間に「ズレ」を感じている。

では、Iさんは「恋愛」や「女性」に対してどのような感覚をもっているのか。以下は筆者がセクシュアリティについて尋ねた場面である。

筆者：セクシュアリティについてお伺いしてもいいですか？

[…]

I：うーん、男性が好きではない。でも、うーんそう、恋愛感情もあんまり分かんない。でも、どちらかと言えば女性。

筆者：今まで何かお付き合いの経験っていうのは

I：は、1回して、1回だけあるんですけど。

筆者：それは女性の方で

I：で。なんか、すごい、アプローチだったので。うーん、なんかだから、好きかどうかよく分かんないけど、「じゃあお願いします」ってなって。でもなんか、うーん、なんて言ったらいいのかな…、なんか向こうが、求めてくる、愛情というか、彼氏らしさとかそういうものに、明確に言われたわけじゃないんですけど、なんか応えられないなと思って。何回か、出掛けて、全然楽しかったんですけど、友だちとそんなに区別、感覚がそんな区別ないので。で、なんか「ごめんなさい」って言って。

「男性が好きではない」ことは明確であるが、しかし「どちらかと言えば女性」というぐらいIさんの性的指向は曖昧なものであり、そもそも「恋愛感情もあまり分らない」という。過去に女性と交際した経験が語られるが、それも相手か

らの一方的なアプローチから始まったものであり、相手のことが「好きかどうかよく分かんない」が、相手の熱意に押されて付き合うことになる。しかし、相手がIさんに要求する「愛情」や「彼氏らしさ」などにIさんは「応えられない」と感じる。また、Iさんにとって恋人と友人とは「感覚がそんなに区別ない」ため、これ以上恋人関係でいる意味を見出せず、Iさんのほうから別れを告げたという。

さらにこの後の会話では、高校時代に女性に告白した経験が語られる。しかしIさんにとっては「人間として好きなのと、そこらへんの区別が」なく、「友だちとして気に入ったからなのかもしれない」としつつ、それらを恋愛感情として位置づけられるかは本人にも「分からない」という。また、そうした行動の理由として、当時は自分を「男だと思っていた」からだとしている。すなわち、自身を「男」だと思っていた頃は、他者に対して恋愛感情や性的欲求を周囲と同じようには抱かないということを自覚するのが難しくなっていたとも言える。以下で語られるように、「男」という自認から離れることによって、すなわちXジェンダーとして自認することによって、自身のセクシュアリティについて考えられるようになっているのである。以下は2回目のインタビュー時に、Iさんに現在のパートナーの有無を尋ねた場面である。

筆者：Iさんは、今お付き合いされてる人とか、いらっしゃいますか？

I：えーっと、その話、はなんかいろいろ多分喋れることはある気は、する。今はいないですけど。えーっと、Xジェンダー、を、自覚した後に、なんか、えーっと、あ、なんかその話は多分、前のインタビューでしたかもしれないけどとりあえず、えーっと、恋愛感情がないのかなと思っていて自分には。「アセクシュアル」って呼ばれたりもするんですけど。

1回目のインタビューでは、先に語られていたようにIさんの性的指向は、「どちらかと言えば女性」というほど曖昧なものであり、恋愛感情は「分からない」と答えていたが、それから4年ほど経った2回目のインタビューでは、恋愛感情は「ないのかな」という言い方に変わっている。「Xジェンダーを自覚した後」に、Iさんは自身が恋愛的／性的惹かれを経験しないことに対して自覚的になり、

その結果アセクシュアルとして自認するようになったのである。

他者を恋愛的／性的にまなざさないことで発生した男性自認の揺らぎは、言い換えれば、女性と異性愛的な関係をもったり、女性に性的欲望を抱いたりすることがIさんにとって「男」であることの大きな構成要素となっていたことを意味している。それゆえに、「男」ではなくなること——「Xジェンダー」として自認すること——が、自身のセクシュアリティに対する新しい認識をもたらしているのである。

3-4 「身体が受け付けない」——Tさんの語り

これまでの事例が示唆しているのは、恋愛／性愛という現象は自己と特別な他者を、そのまなざしを通じてジェンダー化し、それによって両者を性的な存在として位置づけるものであるということである。それゆえに、恋愛的／性的惹かれを経験しないことは逆に自己の性自認を曖昧にする契機を内在させていた。このことは一方で、恋愛／性愛において他者と親密な関係を構築しようとする際には、自己がその特別な他者をどのような性的な存在とみなし、また相手が自分をどのような性的な存在とみなすかが、とりわけ重要な事項であることを示している。

さらにいえば、こうした相互の惹かれやその不在は身体ジェンダー化とも不可分である。なぜなら性愛の場面では自己と他者の身体は、自分のものでありながら同時に他者のものでもあるようなものとして現れるからである。MtXのTさんの事例からは、パートナーの性的なまなざしが自己の身体やジェンダーを顕在化させ、それによって身体違和および性別違和が生じていく経験を見ていく。こうした経験は、他者との親密な関係の構築の仕方に変化をもたらしていた。さらにこの変化を経て、自分を自分が望むジェンダーとしてみてくれるパートナーの存在が再び身体の可能性を開いていく。

Tさんは20代の学生である。インタビューの半年ほど前に以下で語られるような性別違和を経験し、現在は女性あるいはXジェンダーで、パンセクシュアルとして自認している。インタビュー前半では、「週及的なところがあって」と前置きした上で、Xジェンダーとして自認した現在から過去を振り返るように、母との関係や不登校の経験、環境の変化によるストレスで起こったパニック障害や鬱

病といった性別違和に至るまでの人生のさまざまな出来事が時系列で語られていく。そうした流れの中で「だんだん僕のカミングアウトの話と近づいてくる」として、半年ほど前に発生したという性別違和のきっかけとなる出来事が語られる。

その出来事とは、初めてできた恋人との「性的交渉の場面」である。性別違和を認識する以前のTさんは「付き合いたいなあとか、この人がいいなと思ったのは基本男性」だったが、「かといって女性に別に魅力を感じないわけではなかった」ため、バイセクシュアルの男性として自認していた。初めての恋人はTwitter上の「オフ会」で仲良くなった「シスジェンダーの女性」だった。以下はそれに続く会話である。

T：で、ただその、お付き合いをしていく過程の中で、その、なんて言うのかな。やっぱり、相手は普通のシスジェンダーの女性なので、やっぱり僕に対して男性的な態度を求めてくる。特にこう性的交渉の場面で、そういうふうな振る舞いが自然と求められてきたときにとっても、[...] 本当に、その初めてホテルに行って、そういう関係になったとき、本当に僕、駄目、駄目で。あの一本当そのあと1人になったときずっと戻し、嘔吐しちゃうほど、身体 [からだ] が受け付けない。だから、そこで初めて、いわゆる、身体違和、ディスフォリアが出て。

交際当初から、相手はTさんに「男性的な態度⁸を求めて」きており、その理由をTさんは、相手が「普通のシスジェンダーの女性」だったからだとしている。そうした異性愛的な関係の中で感じられていた曖昧な違和感は、その相手と初めて性的交渉をもとうとした際に、吐き気を伴う強烈な嫌悪感に変わった。その原因となっているのが、相手から「自然と」求められる「そういう振る舞い」、すなわち男性ジェンダーと規範的に結びつけられた行為を、当たり前のように要求されたことである。しかしそうした要求をTさんの身体は「受け付けなかった」。

⁸ これを別の箇所では「自分が能動的であることを一義、とするような行為」と説明している。

Tさんのこのような身体違和の発現は、相手から求められる「態度」や「振る舞い」といった役割行為と密接に関係している。相手との関係の中で違和感を抱えながらも、それまである程度維持されていたTさんの身体の統一性は、「性的交渉の場面」で男性として振舞おうとしたときに失われている。なぜなら、そのように振る舞うことを文字通り「身体が受け付けられない」からである。そしてそれはTさんの性自認や身体を感じられ方に強烈な変化を引き起こす。Tさんを男性としてみなす相手のまなざしやその触れ方、そしてそれらが要請する男性的な行為の企図を通じて、Tさんがそれまでもっていた自己の身体イメージに、相手のもつ身体イメージが入り込んでいく。しかしそこで描き出される身体イメージをTさんは受け入れることができない。それゆえに、身体違和が発生しているのである。

性的交渉の場面における身体違和の経験は、以下で語られるように、性愛においてTさんが求める他者との関係にも変化をもたらす。

T：あ、でそこで初めて、あ、自分は、いわゆるその、とりあえず女性になりたいか云々は別として、あの、まあ確かに子どもの頃からそういう格好したいとかっていうのもあったんですけど、とりあえず男性、であることで、男性として、いわゆるシスジェンダーの男性としてとりあえず、誰かとお付き合いをすることは無理なんだなってということが分かって。

男性的な行為を求められることによって発生した身体違和によって、Tさんは「シスジェンダーの男性として」、今後他者と性愛関係をもつことは不可能だという認識に至る。その後Tさんは、自分の意志やセクシュアリティを「相手に伝える目的」で「異性装」を始める。結局それによってパートナーとは別れることになってしまうが、Tさんのこうした服装による視覚的な実践は、他者がもつ自己の身体イメージを主体的に変更し、それを通じてコミュニケーションのあり方を変更することを相手に要請するものである。

こうした認識の変化とそれに伴う実践は、その後の性愛関係にも変化をもたらしている。その際、過去のパートナーとは対照的な存在として語られるのが現在のパートナーの存在である。相手はパンセクシュアルの女性で、「洋服もいろいろ

る貸してくれたり」するなど、Tさんのことを「女の子として見てくれてる」といい、そうした二人の関係をTさんは「レズビアン関係」と説明する。そしてそれは以下で語られるように、Tさんの服装にも変化をもたらしている。

T：だから今なんかは結構その今のパートナーになってから、どっちかっていうとその、まあ僕の女の子の部分をよく見てくれてるので。僕も今ファッションをいろいろ考えるようになって（笑）結構テンプレ的に女装だからスカートっていう感じだったんですけど、なんか自分の中でもうちょっと変えようかなって彼女と話してて。その、あの、レディースに見えるけれども例えばパンツルックとか、昨日とかパンツルックしてたんですけど。そういうのとかもあり、今日の服装もなるべくちょっと中性、寄りっていうか、なんか、いわゆる女の子の子してるファッションじゃないものの方が自分はいいのかなあとか。

「シスジェンダーの男性」ではないことを「相手に伝える目的」で始まったTさんの服装実践は、現在のパートナーとの出会いを通じて、Tさんがより自分らしい身体を生きるための実践に変わっている。それまでは「テンプレ的に女装」としてスカートなど、「女の子の子してるファッション」をすることが多かったが、「パンツルック」や「中性寄り」な服装など、より幅広い服装を楽しめるようになっていく。それは、現在のパートナーがTさんの望むようにTさんの性を見てくれる、すなわちTさんに対して女性の身体イメージを有しているからであり、だからこそ、パートナー関係においては「女性でありたい」というTさんが性同一性をもって自己の身体を生きることが可能になっているのである。

4 考察

ここまで、恋愛／性愛に関する場面で性別違和を経験した4名のXジェンダーの語りを分析してきた。本節では、本稿の目的と照らしながら4名の分析を整理し、本稿の意義と今後の課題を述べる。本稿の目的は、ジェンダー、セクシュアリティ、身体の構造的な連関とその多様な結びつきを非二元的な性を生きるXジェンダーの恋愛／性愛における性別違和の語りから経験的に析出していくこと

であった。

事例から明らかとなったのは次の二点である。

第一に、恋愛／性愛がもたらす性的指向と性自認の不可分な結びつきである。3-1および3-2のUさんとDさんの事例は、恋愛／性愛という現象がまなざし／まなざされることを通じて人を「性的な存在」にすることを示唆していた。性的「指向」という概念が示している通り、しばしば恋愛／性愛に関わる事柄を条件づけるのはその方向づけ（Orientation）であり、それは指向する自身のジェンダーや指向される他者のジェンダーをその都度特定しようとするものでもあるといえる（千葉, 2020）。それゆえに、3-3のIさんの事例では他者を性的に「まなざさない」ことが、自己のジェンダーを不明確にする契機を孕んでいた。以上のように、恋愛／性愛という現象が、まなざし／まなざされることを通じてジェンダー化された主体となることで成立する磁場であるからこそ、お互いのジェンダーの認識が一致していることは親密な関係を構築する上でとりわけ重要な要素になっている。3-4のTさんの事例では、相手が自分に望まない性役割を求めてきたり、逆に望みの性として接してくれることが、Tさんの身体や性の感覚に変化をもたらしていた。

第二に、まなざす／まなざされることを通じて人がジェンダー化された存在となることは、それに基づいて自己や他者に特定の身体イメージを付与する／されることでもある。特に恋愛／性愛において、それは重要な他者との間で行われ、自己と他者の身体イメージが重なり合ったり、その関係の中で新たな身体イメージが形成されていったりする。そしてそのイメージはときに行うことを通じてはっきりとした輪郭をもったものとして立ち現れてくることがある。男性的な行為を求められたことを通じて発生した3-4のTさんの身体違和は、男性的な行為を身体化できないこと、すなわち行為を通じて立ち現れてきた相手のもつ身体イメージを受け入れることができないことによって発生していた。また、性行為における「男性器」の使用欲求と結びついた3-2のDさんの身体イメージは、パートナーとの関係のなかで形成されたイメージであった。

以上のような経験的知見は、先行研究に対して2つの意義を有している。

まず本稿の知見は、Xジェンダーの性別違和の発現プロセスを明らかにすることで、性的指向と性自認の経験的な関与の仕方をより具体的に考察することの

重要性を指摘したCuthbert (2019) やBettcher (2014) らの研究結果を引き継ぎつつ、両者を同一構造上の問題に措定し直したものであると言える。Cuthbert (2019) によれば、アセクシュアルの人びとはしばしばジェンダーをセクシュアリティに関するものとして理解し性的な行為や性的魅力を拒否するがゆえに、ジェンダーそのものからの疎外感を感じているという。それゆえアセクシュアルの人びとの中には、A ジェンダー⁹と自認する人も多くいるとされる。本稿の事例においては、性的対象となることで性別違和が発生した3-1のUさんや他者に恋愛的／性的に惹かれないことによって性別違和が発生したIさんの事例にもCuthbert (2019) の研究結果との構造的な類似が見られる。またBettcher (2014) は、トランスジェンダーのセクシュアリティは性的指向のみに着目するのではなく、性的自己と性的他者の相互関係を踏まえたくて理解することの重要性を指摘する。3-2のDさんや、3-4のTさんの違和の経験でも、親密な関係において、自己と他者がどのような性的な存在としてどのように振舞うかがまさに問題になっている。

既存の研究では、一方では恋愛的／性的に他者に惹かれないことがもたらす性的指向と性自認の關係に (Cuthbert)、他方では他者に惹かれることでもたらされる相互關係に (Bettcher) それぞれ分析の着眼点が絞られており、両者がどのような構造的連関をもつものなのかが分からない状況にあった。それに対して本稿では、Xジェンダーの性別違和を「まなざし」という観点から分析することで、「惹かれること」と「惹かれないこと」の相互排他的ではない關係を描き出すと同時に、両者がシスノーマティブでセクシュアルノーマティブ¹⁰な社会構造のもとで、性的な主体やそれに基づく身体イメージの形成、強化あるいはその再編に別様に、しかし非異性愛的であるという点では「逸脱」として同様に作用していることを示した。

さらに、ここまで見てきた4名の事例における性自認や身体イメージの關係論的な構築性は、二元制に回収されないようなジェンダー、セクシュアリティ、身体の多様な結びつきをも示している。3-2のIさんは、Xジェンダーとして自認す

⁹ 特定のジェンダー・アイデンティティを持たない人を意味するアイデンティティ・カテゴリー。

¹⁰ 「セクシュアルノーマティヴィティ」概念の詳しい説明やこの概念が射程とする問題群については松浦 (2020) を参照。

ることで、「アセクシュアル」という自身のセクシュアリティに対する新しい認識を得ていた。また、3-3のDさんの「男性器」を伴う身体イメージは「男性」であることと結びついたものではない。それは、性愛関係を通じて新たに形成された性的主体——Xジェンダー——と結びついたものである。つまりこうした事例は、恋愛／性愛における性別違和の発現においてもしばしば二元的かつ一貫したものとしてみなされる（「男性器」を伴う身体イメージは「男性」自認に結び付く）等）傾向にあるジェンダー、セクシュアリティ、身体の結びつきは、実際には非一貫的かつ非二元的でもありうることを示しているのである。これはトランスジェンダー研究が着目してきた論点でもあるが（Salamon, 2019）、本稿はその具体的な実相を経験的に明らかにした。

5 おわりに

本稿では特定のセクシュアリティではなく、恋愛／性愛における性別違和の発現に着目することで、ジェンダー、セクシュアリティ、身体の意味形成プロセスと相互のつながりの具体的な様相を明らかにした。4名の性別違和の経験においては、この3つが相互に影響し合い、それぞれがはっきりとは分けられない形で経験されていた。

一方でこうした知見は、異性愛の枠組みのもとでまなざし／まなざされるという男女の非対称的な関係性や、性的欲望をもつ主体であることが男性に紐づけられるといった、社会における二元的なジェンダー規範とも関連している。本報告で扱った4名という少ない事例の中でも、生活環境や社会的文脈などにおけるこうした規範の働き方の違いが示唆されている。今後は、出自や階級、障害の有無などを踏まえたより詳細かつインターセクショナルな視点に基づく検討が求められる。

さらに、本稿で見てきた4名の恋愛／性愛の様態とは異なり、自己／他者をジェンダー化しないような恋愛／性愛実践（Aジェンダーの恋愛／性愛など）や、まなざし／まなざされる「性的な存在」のあり方がパートナー関係の中で絶えず切り替わっていくような実践もありうる。こうした恋愛／性愛の実践の多様性についてはさらなる経験的な研究が求められるだろう。これも今後の課題としたい。

Acknowledgments

調査にご協力くださった方々に心より感謝申し上げます。また、森山至貴氏からは拙稿の理解を広げるための貴重なご進言をいただきました。深くお礼申し上げます。

なお、本稿はJSPS科研費（特別研究員奨励費・課題番号22J21053）の助成による研究成果の一部です。

References

- Bettcher, T. M. (2014). When selves have sex: When the phenomenology of trans sexuality can teach about sexual orientation. *Journal of Homosexuality*, 61(5), 605-620.
- Butler, J. (2021). 『問題=物質となる身体——「セックス」の言説的境界について』(佐藤嘉幸, 竹村和子, 越智博美ほか, Trans.). 東京: 以文社. (Original work published 1993).
- Cuthbert, K. (2019). "When we talk about gender we talk about sex": (A)sexuality and (a) genderd subjectivities. *Gender and Society*, 33(6), 841-864.
- Dale, S.P.F. (2013). Mapping "X" —— The micropolitics of gender and identity in a Japanese context. Ph.D. thesis, Sophia University Department of Global Studies.
- Decker, J. S. (2019). 『見えない性的指向 アセクシュアルのすべて——誰にも性的魅力を感じない私たちについて』(上田勢子, Trans.). 東京: 明石書店. (Original work published 2014).
- Doorduyn, T., & Van Berlo, W., (2014). Trans people's experiences of sexuality in the Netherlands: A pilot study. *Journal of Homosexuality*, 61(5), 654-72.
- Rubin, G. (1997). 「性を考える—セクシュアリティの政治に関するラディカルな理論のための覚書」(河川和也, Trans.). In 『現代思想』25(6), 94-144. 東京: 青土社. (Original work published 1984).
- Salamon, G. (2019). 『身体を引き受ける——トランスジェンダーと物質性のレトリック』(藤高和輝訳, Trans.). 東京: 以文社. (Original work published 2010).
- Schilt, K., & Elroi, W. (2014). The sexual habitus of transgender men: Negotiating sexuality through gender. *Journal of Homosexuality*, 61(5), 732-748.
- Sedgwick, E. K. (2018). 『クローゼットの認識論——セクシュアリティの20世紀 新装版』(外岡尚美, Trans.). 東京: 青土社. (Original work published 1990).
- Valentine, D. (2007). *Imagining transgender: An ethnography of a category*. Durham: Duke University Press.
- 池田弘乃. (2019). 「ケーキがあるのになんでセックスなんかするの? ——『アセクシュアルと法』を考えるために」『クィアと法——性規範の解放/開放のために』東京: 日本評論社.
- 武内今日子. (2021). 「恋愛的/性的惹かれをめぐる語りにくさの多層性——「男」「女」を自認しない人々の語りを中心に」. 『現代思想』, 49(10), 39-49.
- 千葉雅也. (2019). 「カテゴリー的性愛と特異的性愛——対立しつつ共存する」『世界思想』, 46, 12-16.
- 松浦優. (2020). 「アセクシュアル研究におけるセクシュアルノーマティヴィティ (Sexualnormativity) 概念の理論的意義と日本社会への適用可能性」. 『西日本社会学会年報』, 18, 89-101.
- 藤高和輝. (2020). 「性別違和」とは何か——トランスジェンダー現象学の導入に向けて」. 『フェミニスト現象学入門——経験から「普通」を問い直す』京都: ナカニシヤ出版.

Abstract**Relational Formations of “Sexualized-Gendered Subject”:
The Experiences of Gender Dysphoria in Romantic/Sexual Relationships**

Misato SAGAWA

The conceptualization of gender and sexuality and their relationship have been argued in feminism and queer studies. Empirical sociological research has also explored how gender works through sexuality, and sexuality works through gender, and how the two shape identities and relationships with others. In transgender studies, researchers have focused on the aspect of “embodiment” and showed the indivisible relationship between gender identity and sexual orientation. Based on the above point, this paper focuses on the manifestation of gender dysphoria in the romantic/sexual relationships of four people who identified as X-jendā, and seeks how gender, sexuality, and the body have been structurally interrelated. “X-jendā” is a term denoting or relating to a person who does not subscribe to conventional gender distinctions but identifies with neither, both, or a combination of male and female genders. It is a uniquely Japanese term that came into use at the end of the 1990s. In depicting these experiences, this paper focuses on the concept of “sexualized-gendered subject,” which refers to one person being gendered through the sexual “gaze” of the self and others in romantic/sexual relationships. The case analyses of the four X-jendā participants reveal how “gazing/being gazed at” and “not gazing” are related to being sexualized-gendered subjects. Their experiences of non-polarized or non-binary sexuality illustrate how the structural relation between gender, sexuality, and the body is entangled in various practices that are in contact with, but not contained by, the gender binary system.

Keywords:

X-jendā, transgender, sexuality, body image, gaze

研究論文

ベルサーニの暴力的ケア／ サエボーグの横滑りする身体

長尾優希

自己と他者とが偶然に、するりと入れ替わってしまうこと。いくらか奇妙に響くにせよ、この反転可能性がレオ・ベルサーニという理論家を、そしてサエボーグという美術家を特徴づけている。私はのちにこの動きを存在論的「横滑り」(Bersani, 1995, p. 125; Bersani & Dutoit, 1985, p. 14; Bersani & Dutoit, 1993, p. 158)¹と呼ぶことになるだろう。これが前提するのは、①個同士が同じであること、そして②その個がそれぞれに切り離されていること、この2つである。バラバラにしか存在しない個は、まさにそのバラバラさの徹底ゆえに、逆説的にもある特異なかたちのケアを立ち上げてはしまわないだろうか。

セクシュアリティは「共同体に反し、平等に反し、慈しみに反し、愛に反する」(Bersani, 2010, p. 22)。往々にして「無関係性」の語で形容されるこうしたベルサーニの議論は、クィア理論の「反社会的転回」に火をつけた²。私がこれからサエボーグの作品を論じつつ企図するのは、しかし、そのようなベルサーニの思想をケアの倫理に開くことだ。無関係性・反社会性は「それ自体が魅力なのではなく、何か別なものへの必要条件」(Tuhkanen, 2013, p. 282)である。私はベルサーニに伏在するケアや非暴力のテーマを、関係性の切断と矛盾しない仕方であらうか。

¹ 本論が「横滑り」と訳すのはベルサーニの著作に何度か登場する「sliding」あるいは「gliding」の語である。視覚芸術を専門とするユリス・デュトロワとの共著『暴力の形式』と『貧困化の芸術』では前者が、『ホモズ』では後者が使用される。

² この「反社会的転回」の代表的存在であるリー・エーデルマンとともに、ベルサーニの射程は白人ゲイ男性——マイノリティのうち最もマジョリティ的な恩恵に浴する者——に限られているという批判が寄せられてきた。その典型として、反社会性が彼らにのみ許された贅沢だとする Muñoz (2009) と、むしろ女性をはじめとするマイノリティに反社会性を開いた Halberstam (2011)、およびそれぞれの基となった MLA パネル Caserio, Edelman, Halberstam, Muñoz, & Dean (2006) を参照。本論はベルサーニをサエボーグと並べて論じる点で後者に近いが、註5でも触れるようにハルバースタムとはベルサーニのマゾヒズムをめぐる解釈が異なる。

本論は3つの断片に分かれている。最初のセクションは、サエボーグの作品《Slaughterhouse》と《Pigpen》のシリーズを、ケアを手掛かりにマルクス主義フェミニズムと生政治論の交点として見ることで、その暴力的な表象に絞った分析の限界を指摘する。その限界を補填するかたちで、次のセクションはベルサーニの理論に目を移すことになるだろう。ここでは「同じさ」という語が思想と作品とを継ぎ合わせるはずだ。最後に私が示すのは、ケアが暴力と切り結んでいる不即不離の関係、そして同じさに基づく「横滑り」するようなケアによって、不可避の暴力を何とかいなすベルサーニとサエボーグの姿である。

*

サエボーグはラテックスを用いたインスタレーションとパフォーマンスを展開する美術家である。その作品では、女性のパフォーマーがラテックス製の着ぐるみを装着することで、人間以外のものに姿を変える。たとえばサエボーグのキャリア初期からのシリーズである《Slaughterhouse》が上演するのは「家畜たちのロールプレイング」(PCAF, 2022, p. 66)だ。豚、羊、牛、鶏といった——それぞれ「サエポーク」「サエシープ」「サエビーフ」「サエチキン」と名前がついている——家畜たちは、充てられた役割を全うさせられる。搾乳され、毛刈りされ、卵を産まされ、そして最後には屠られる家畜たち。パフォーマンスのなかで、サエポークは肉を削がれ、内臓を抉られ、逆さ吊りにされる (fig. 1)。《Slaughterhouse》でサエボーグがフィーチャーするのは、まずもって牧場におけるそうした暴力の現場なのだ³。そのグロテスクな光景はしかし、食肉を消費し資本主義を生きる人間が否認してきたものにほかならない。

³ サエボーグ作品のうち、光るラバースーツ「火ぐるみ」によるパフォーマンス《HISS》(2015)やフンコロガシが家畜の糞を分解する《Pootopia》(2021)においては、《Slaughterhouse》と《Pigpen》に比して暴力の主題は後景に退く(あるいはより隠微なものに変化する)。本論があつかうケアが最も明瞭なかたちで現れるのは、あいちトリエンナーレ2019で披露された《House of L》である。屠殺場からケア労働の場である家庭へと舞台を移し、家畜のみならず犬などの愛玩動物まで射程に収めたこの作品では、「観客たちと相互関係的なケアを通じたコミュニケーション」(サエボーグ, 2022)が展開される。Halberstam (2020) がペットを生政治のなかで無力化された動物の形象として描きつつ、アニメーション映画『ペット』(クリス・ルノー&ヤーロー・チーニー, 2016)などの読解を通じてなおも抵抗の可能性を見ていたことを考えると《House of L》についての考察は不可欠な作業だが、紙幅の都合で別稿に譲る。

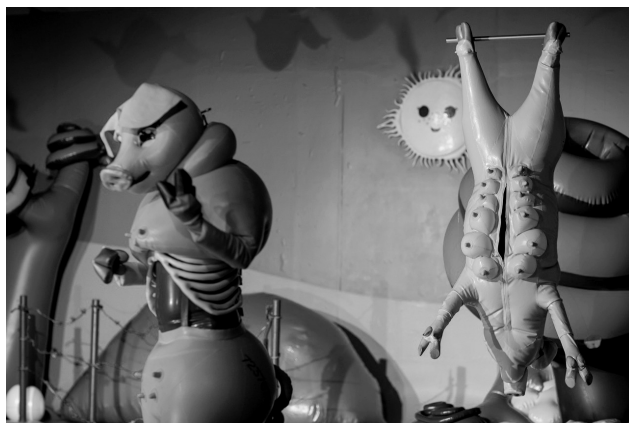


fig. 1 《Slaughterhouse-15》DARK MOFO 2019 Mona Museum 主催 / Avalon Theatre、ホバート、オーストラリア D20m × W10m × H4m / ラテックス、ステンレス、ビニール 写真：DARK MOFO 2019

女性のパフォーマーがラバースーツを着用して家畜を演じるというこうしたサイボーグのインスタレーション／パフォーマンスをひとまず、本人の語るように「マルクス主義フェミニズム」（成相, 2017a, p. 50）の立場から解釈することは容易だろう。その一般的な理解では、マルクス主義フェミニズムが問題視するのは家父長制と資本主義の複合体である。マルクス主義が「市場」が社会そのものとして想定したのに対し、マルクス主義フェミニズムはその下部構造として「家族」の領域を発見した。この図式において女性（そして子どもや老人など「労働市場」に関与しないあらゆる者）は市場の外に捨て置かれ、「ヒトでないヒト」（上野, 2009, p.10, 傍点は原文）として市場を下支えする。市場の外にあって、女性是对価なしに「産育、そして看護や介護など、広い意味の再生産労働」（上野, 2009, p. 431）に従事させられる。《Slaughterhouse》における家畜——「ヒトでないヒト」——に目を向けよう。ここでは家畜のありようが、マルクス主義フェミニズムにおける女性の経験と重ね合わせられているのだ。単独で自立しているかに見えた市場は、実のところその外部の家畜的な女性の生に依存してはじめて成立する。こうした「マッピングされない不可視な構造」（プロイ, 2019, p. 7）が、「ケアに関する政治性」（プロイ, p. 6）である。家事などといったケア労働

は、無償で、市場の外の家畜たる女性に押しつけられるのだ。

ケア労働の偏在とともに、生殖の管理という問題も浮上する。上野千鶴子は家父長制の根幹を、男性による「子宮という再生産手段の支配とコントロール」(上野, 2009, p. 113) だとしていた。再生産に直接かかわる女性の生殖器を管理下に置くことで、男性の支配的な体制が再生産されてゆく。そうした生殖の管理——すでに《Slaughterhouse》においてサエボークは交尾させられ、凍結精子を流し込まれてもいた——これに迫ったのが《Pigpen》である (fig. 2, 3)。《Slaughterhouse》シリーズと同一の世界であるというこの作品がクローズアップするのは、豚の出産の光景である。動物農場の檻の奥に巨大な母豚が横たわっており、その中から鈍い速度で、1匹また1匹と子豚が生まれて這い出てくる。不穏な音楽も作用して、ここには「幸せな誕生のイメージはな」(サエボーク, 2016) い。サエボークたちが生まれてきたのは、ひとえに食肉用に殺されるためなのだ——豚には搾乳も毛刈りも望めない。この意味で《Slaughterhouse》と同様、《Pigpen》もまた女性が「生まれた時から役割が決まっていて、管理、搾取される運命という現実のカリカチュア」(サエボーク, 2016) である。

この生殖の管理をサエボークは「家畜の定義」(プロイ, 2019, p. 5) であると言った。家畜の生殖が管理されるという表象は、同時にミシェル・フーコーの「司牧的権力」の語を思い出させもする。フーコーが「生政治」として描き出した権力の様態は、「人口」という全体を管理するものとして定義された。「規律権力」がそれぞれの人間の身体にアプローチしたのに対して、「生権力」は人間を個々の主体としてではなく統治可能な集合と見る。「生かし、死ぬに任せる権力」(フーコー, 2007b, p.241) と呼ばれるこのような「統治」を、フーコーは『安全・領土・人口』で「司牧的権力」の名前で記述した。この理解にあって、「人間は牧者に対する群れである」(フーコー, 2007a, p. 153) る。生権力は羊飼い=統治者が、羊の群れ=人口を1匹残らず飼いならすようなシステムとして説明されるというわけだ。司牧的権力は人間の集合を家畜として捉えかえす。この意味で、「統治性は人間による動物支配の形態を人間自身に拡張したことの表れである」(ワディウエル, 2019, p. 161)。

では、そのような「動物化された人間性」(Chrulaw, 2012, p. 55) を扱う政治形態である生政治は何を目標むのか。それは「多数の人間を生命に固有のプロセ



fig. 2 《Pigpen》 DARK MOFO 2019 Mona Museum 主催 / Avalon Theatre、ホバート、オーストラリア D4.5m × W5.5m × H3m/ラテックス、ステンレス、ビニール 写真：DARK MOFO 2019



fig. 3 《Pigpen》 Department-H/東京キネマ倶楽部、2016 写真：都築響一

スの全体、つまり誕生とか死とか生産とか病気などのプロセスを備えた大きなマッス塊^{マッス}（フーコー, 2007b, p. 242）の管理である。人口全体の統治は、出生率や平均寿命などを把握し、再生産を管理することでなされるのだ。ここで注意が必要なのは、マルクス主義フェミニズムにおいてケア労働の担い手はつねに市場の外の家畜=女性であったのに対し、生政治は統治者のケアによってこそ成り立っているという点である。フーコーは家畜たちを統治する「牧者のケア」を「他の者たちへと向けられるケア」として語っていたのだった（フーコー, 2007a, p. 158）。牧者は家畜を1頭ごとに把握し、それぞれの性質に応じた細やかなケアを差し向けるだろう。ここでサエボーグの家畜にはすべて焼き印が押され、番号が振られていたことを思い出してよい——おのおのの個体に応じて管理の方法は変わるのだ。生政治は人口という全体に働きかけながらも、そのために「個人化をおこなう権力」（フーコー, p. 158）である。

《Slaughterhouse》・《Pigpen》は家父長制／資本主義と生政治におけるケアの問題を整理しなおしている。ここで家畜はケア労働という割り当てられた役割をこなしつつ、その家畜の管理もまた統治者のケアによってなされているのだ。しかし、女性の性役割を家畜に見立てたこの解釈において、ラテックスのスーツを着用し家畜になることで「自らの女性性を否定するために、人工的で解体可能な新しい「性」を作品化している」（黒瀬, 2014, p. 188）というサエボーグ自身の発言は、どのように考えればよいだろうか。サエボーグはラバースーツによって、別な身体への変身を、「固定された性差 [の] 乗り越え」（成相, 2017b, p. 41）を、たしかに実現するのである。確認しよう。一方で家畜のラバースーツを身にまとい、女性パフォーマーは家畜になる。ラバースーツこそがディストピアを再現する。しかし他方では、まさに同じラバースーツをもって、サエボーグは身体の自己決定を肯定的に語る。ここにおいて、ラバースーツは暴力的な畜殺の表象に対する態度を宙づりにしてしまう。ラバースーツは女性の性役割を体現すると同時に、社会的に構築された女性の身体から逃れる手段でもある、そのような両義性をもつのだ。したがって、サエボーグの提示する表象の分析だけでは、畜殺という物語的な内容の分析だけでは、「身体の自己決定」の問題に踏み込むことができない。実際、すべてラテックスで作られた屠殺場という舞台と家畜の着ぐるみはポップでどこか朗らかな雰囲気すら漂わせ、その暴力を中和して

しまうかのようなのである。

ラバースーツの効果について考察するとき、それが含みもつエロティシズムの問題を避けては通れない。フェティシズムの1種に「ラバーフェティシズム」と呼ばれるものがある。ラバーのスーツなどに身を包むことで、ラバーの光沢や皮膚に密着する拘束感を楽しむものだ。とりわけサエボグが作品で採用するラバースーツはインフレータブルな構造をもつ。これはラバーが二重になっている種類を指し、着用者はまず内側のラバーを着たあと、外側のラバーとの空間に空気を送り込む。そうすることで膨らんだ外見を演出できるとともに、身体と内側のラバーとの密着を高めるのである。実際、サエボグのパフォーマンスはすべて、デパートメントHと呼ばれる性的マイノリティのパーティにおいて初演されてきた。大学時代からこのパーティに通い今ではこれを共同でホストしている(成相, 2017a, p. 48; PCAF, 2022, p. 66) というサエボグは、この文脈に非常に深く関わっている。畜殺の表象がラバーの着ぐるみを通して上演される以上、こうしたフェティシズムの要素は無視できないだろう。私はこれからベルサーニに目を転じ、ラバースーツのもたらす官能性に迫ってみたい。サエボグにとって統治という近代的な機制を脱するには、「エロティシズムが […] 有効な回路のひとつ」(南畝, 2017, p. 458)なのである。

*

知られるように、ベルサーニにとってセクシュアリティは「マゾヒズムの同語反復」(Bersani, 1986, p. 39)であった。これは人間の発達における必然である。幼児にとって一定の程度を超える感覚刺激は苦痛であり我慢がならない。この感覚刺激を耐えぬくためにそれを快へ変換するのがマゾヒズムであり、その意味において「マゾヒズムは生存に役立つ」(Bersani, p. 39)のだ。セクシュアリティはこの時期に典拠をもつため、主体は暴力的な「自己破碎」⁴へ方向づけら

⁴ 本論はベルサーニの鍵語の1つである「self-shattering」を「自己破碎」と訳すが、この語は日本語でのベルサーニの精緻な読解である江永(2020)、および村山(2022)から借りた。「shattering」はのちに言及する精神分析家ジャン・ラブランシュの「ébranlement」をベルサーニが英訳したもののだが、日本語では「(動)揺」(ラブランシュ, 2018)という訳語が充てられているので注意されたい。なお、英語文献からの引用は基本的に拙訳だが、参考文献で邦訳を併記している場合は適宜それを参照し、邦訳の文献を引用する際も、英語原文・英訳を参照しながら訳文を断りなく改変している箇所がある。

れるのである。強迫的に反復され、やがては主体を自壊に至らしめる自己破碎的なマゾヒズム。これは「直腸は墓場か？」において倫理的な理想にまで高められることになる。ベルサーニの著作のなかでおそらくクィア理論に対して最も影響力をもったこのエッセイは、自己破砕を「非暴力の […] 実践」(Bersani, 2010, p. 30) と見た。なぜか。主体がつねに暴力的だからだ。ベルサーニ+デュトワはフロイトを引きながら次のように書く。「幼児の自我は、自らを攻撃する外的な刺激から身を守る必要がある。憎悪は原初の自己保存的な反応なのだ。しかし、世界——それは自我の安定を揺るがすあらゆる差異のことであり、実のところ自他を区別するアイデンティティの構成そのものにかかわる——その排除は、まったくもって幼児期に限ったものではない」(Bersani & Dutoit, 1993, p. 147)。自我は生来的に、他者あるいは世界そのものを差異として排除しようとする。そうした「誇り高き主体性」(Bersani, 2010, p. 29) が瓦解するマゾヒスティックな経験を、死の欲動に身を委ねて自我がバラバラに散じてゆくような脱主体化の可能性を、ベルサーニはたしかに言祝いでみせた。

暴力は享樂しうる。それによる主体の破壊は倫理である。このことを考えると、サエボーグについていったん次のように言うことができるかもしれない。つまり、サエボーグは家畜に身をやつし、あえてマゾヒスティックに社会的な暴力を受け容れているのだ、と。似た試みとして、オノ・ヨーコの《カット・ピース》(1965) やマリーナ・アブラモヴィッチの《リズム0》(1974) といった自分の身体を暴力に晒すパフォーマンス・アートを見てみよう。机にナイフや拳銃なども含む72個の物を置いて観客がそれを好きに使えるようにしたアブラモヴィッチ。観客に缺で一太刀ずつ自分の着ている服を切らせたオノ・ヨーコ。そのあいだ彼女らはじっと抵抗せず、自ら社会における非主体の位置を引き受けるのである⁵。サエボーグを以上のようなボディ・アートの文脈に連ねるとき、鍵となるのはラバースーツにはかならない。顔の部分に視界を確保する穴はかろうじて開い

⁵ この議論についてはHalberstam (2011) の「ラディカルな受動性」「シャドウ・フェミニズム」の概念を参照。ここでハルバースタムが念頭に置くのは、「ベルサーニが「自己破砕」と呼んだもの、ほとんどの人間が否認あるいは昇華したいと考える仄暗い性の衝動」(Halberstam, 2011, p. 136) であり、ベルサーニが自己破砕と同じマゾヒズムの語をもって論じる「同じさ」には言及しない。後述のとおり、私が強調したいのは「同じさ」のほうである。

ているものの、ラバーの締め付けによってパフォーマーの挙動は制限されるうえ、通気性の悪さによって長時間の暑さを強いられる。ラバーフェティシズムがこうした不快に快を見いだすある種のマゾヒズムであるとするれば、ラバースーツはマルクス主義フェミニズム的／生政治的な暴力表象を、パフォーマーの身体の上にマゾヒスティックな享樂として再現していると捉えることができるだろう。

だが、美術史的にこのような解釈が正当であるにしても、家畜に変身する快樂が充分あり得るにしても、ボディ・アートとサエボグのパフォーマンスとのあいだには、やはりいくつか顕著な隔たりが認められる。何か。ひとつには、前者では女性的な身体が強調されていたのに対して、サエボグではラバースーツに包まれることでジェンダーが不可視化されているという点である。かたやアブラモヴィッチやオノ・ヨーコの服が裂かれるとき、乳房や女性用の下着が露わになった。結果として彼女たちのパフォーマンスでは、非主体として暴力に晒されるのが女性であるという側面が突出することになる。しかしサエボグのラバースーツは、個人を特定し人間性を図るはずの顔を隠す。前述したインフレーター構造のために、体型すらも識別不能になる。ひとたびラバースーツを身にまとうと、パフォーマーはそれぞれを判別できない匿名性へと沈むことになる。ラバーの一樣な膨らみのなかに、身体のジェンダー的な差異は没し去ってしまう。

ラバースーツは差異をなくす。パフォーマーを「同じ」にする。それは次のことにも明らかだ。つまり、使用されるラバースーツはすべてサエボグ本人で型取りをしており、彼女に似た身体をもつ者でなければそもそも着用できない（卯城 & 黒瀬, 2015, p. 20）。このことはパフォーマーであればどのラバースーツを着用してもよいことと相即である。加えて言えば、サエボグのラバースーツは頭・胴体・手・足などと身体の部位に分かれているが、その胴体・手・足・頭が1つのセットになっているわけではない。それぞれのパーツは、別のパーツと差し替えることができる。誰がどのラバースーツを着用しても構わない。サエボグの身体は物理的なレベルで交換可能なのだ。

身体の「同じさ」、交換可能性は、アブラモヴィッチ／オノ・ヨーコとサエボグとを隔てる次の点にも通じている。前者のパフォーマンスには拳銃で撃ちぬかれていたら、あるいは身体を切りつけられていたら、終始そのような可能性が付きまとう。彼女らの身体は実際に死のリスクを冒しているという点で、絶対



fig. 4 《Slaughterhouse-15》DARK MOFO 2019 Mona Museum 主催 / Avalon Theatre、ホバート、オーストラリア D20m × W10m × H4m / ラテックス、ステンレス、ビニール 写真：DARK MOFO 2019

的な一回性に貫かれている。しかしサエボグの場合、長時間ラバースーツを着用することで酸欠になるなどといった危険こそあれ、再現される暴力はあくまで表象に過ぎない。そのうえその表象のなかですら、家畜は必ずしも死なない。例えば事実《Slaughterhouse》では、パフォーマンスで屠殺される家畜はしばらく経ってからむっくりと身を起こし、農婦——サエボクなどと同様にサエノーフと呼ばれる——とともにダンスに興じるのだった (fig. 4)。以上のような家畜の「同じさ」のせいで、サエボグのパフォーマンスを単純にボディ・アートに並べることは困難なのである。

ベルサーニもまた、マゾヒスティックな自己破碎に終わる理論家ではなかった。おそらく最も丹念なベルサーニの読み手の1人であるミッコ・トゥカネンは次のように言う。「[[「直腸は墓場か?」の] 成功は、このエッセイが押し出した力学をめぐるベルサーニの一貫した両義性を見えにくくした。いまだ触れられることは少ないが、ベルサーニは独我論とマゾヒズムの——「反社会性」の——倫理的可能性を考える思想家にとどまらず、つねに、自己破壊的でないかたちで世界に存在する方途を探るよう私たちに訓練を促す思弁的な存在論者でもあったのだ」(Tuhkanen, 2018, pp. 163-64, 傍点は原文)。サエボグと同様に、ベルサー

ニも自己破碎から「同じさ」⁶へと関心をシフトさせるだろう。主著『ホモズ』で構想されたのは「差異の喜ばしい無価値化」(Bersani, 1995, p. 7)であり、既存の社会性とは別の「反共同体主義的なつながりの様式」(Bersani, p. 10, 傍点は引用者)であった。ここにおいて、主体はハルバースタムが描いたようには破壊されない。それは特権的な存在であることをやめるものの、それは他者や世界のうちに散らばった自己が今一度見いだされることによってである。差異は等閑視され、同じさのみが際立つ。他者や世界への愛は、もはや自己愛と区別がつかなくなる。

ベルサーニが後年になって展開したこのような自他の同じさは、自己破碎と別物ではない。それは「主体の自殺的ならざる消失、あるいはマゾヒズムを死の欲動から切り離すこと」(Bersani, 1995, p. 99)⁷なのであり、それ以前からの関心とむしろ地続きである。この「ベルサーニの思想的転回と考えられるものを橋渡しする」(Benedicto, 2019, p. 292n8)とボビー・ベネディクトが註釈するのが、『貧困化の芸術』のなかでベルサーニ+デュトワが異性愛のポルノグラフィにつ

⁶ 「同じさ」の概念はとりわけ「クローン」と呼ばれる1970年代のゲイ男性の文化に着想を得て発展してきた。その成立や政治性についてはNichols (2020) が詳しい。同じさはベルサーニの著作において、「ホモネス」「社交性」「(形式の) 照応／コミュニケーション」「不正確な自己複製」などとさまざまに変奏されるが、精神分析家アダム・フィリップスとの共著『親密性』における「非人称のナルシズム」の語でもっとも簡潔に説明される。Bersani & Phillips (2008) を、こと pp. 57-87 を参照。本論は主にマゾヒズムに注目しナルシズムについてほとんど言及しないが、ベルサーニは非暴力的な関係性の糸口として、この2つをほとんど同一視している。「フロイトの体系にあって世界に対する自我の根深い不信は、憎らしい対象へのナルシシスティックな同一化によってのみ、その対象のマゾヒスティックな取り入れによってのみ、「克服」される。このマゾヒスティックなナルシズムは世界との関係を性化すると同時に、世界と自我の差異を取り除くのだ」(Bersani & Dutoit, 1998, p. 41, 傍点は引用者)。こうしたアイデンティティ的な差異の無視は、私のがちに「横滑り」という言葉で語ろうとするものの1つである。

⁷ 註2でも触れたが、クア理論においてベルサーニの思想はエーデルマンのそれとほとんど同一視されてきた。しかし「マゾヒズムを死の欲動から切り離す」とするベルサーニと、異性愛中心的な象徴界を掘り崩す構成的外部としてクアを死の欲動に配置するEdelman (2004) の差は見過ごせない。この違いは、エーデルマンのほうが「否定性に余念がない」(Tuhkanen, 2013, p. 280) というベルサーニ自身の発言にも明らかだ。この点についてTuhkanen (2020) が1章を割いて論じている。なお言い添えておけば、エーデルマンすら完全に無関係性に閉じるわけではない。実際にエーデルマンはベルサーニの追悼として寄せた文章において、関係性に開かれたベルサーニ像を自著と同列に論じている。Edelman (2022) を参照。こうしたベルサーニとエーデルマンの異同についてはより詳細に検討される必要がある。

いて書いた「横滑り」のイメージに違いない。

異性愛男性はどのようにして女性の享楽の光景を「得る」のだろうか？ 女性を得る（女性を享楽の地点まで連れてきた行為者に同一化する）という男性の快楽を保証するのは——しかし恐らく秘密のうちに強めもするのは——唯一その享楽を自分で得たいという誘惑なのである。女性の身体の中に入りたいという望みは、女性に挿入したいという望みは、女性の身体の中に入ることによって他のものになりたい（自分が挿入されることとはどういうことなのか知りたい）という望みへ横滑りしてしまうことを防げるのか？（Bersani & Dutoit, 1993, p.158, as cited in Benedicto, 2019, p. 282; French, 2013, p. 1024, 傍点は引用者）

「挿入」されることを望むマゾヒスティックな欲望は、異性愛男性が同一化する対象を、享楽を与える「男性」からその享楽を自ら引き受ける「女性」へすり替えてしまう。この欲望レベルの「横滑り」は、男性が女性へ入れ替わりうるという身体レベルの「横滑り」とも対応するだろう。そしてここにおいて、アイデンティティ的な差異が——サエボーグにおいてもそうであったように、男女というジェンダーが——無視されるのだ⁸。貪欲なマゾヒズムは自他の同じさのみ関心を寄せる。

自己はマゾヒスティックに散り散りになったあと、他者のうちに再発見される。自己と他者とは同じになる。これは「いちど失われた自己が不精確に複製され、どこにでも発見されるような快楽」（Bersani, 2010, p. 174）である。ベル

⁸ こうしたジェンダー的差異の抹消は、ベルサーニの非人間への関心にも紐づいている。それは人間／非人間という差異をもぼかしてしまうのだ。あるインタビューのなかでベルサーニは「実際のところ『暴力の形式』がすでに、本質的には人間ならざるものがいかに照応によって構成されているかについてのものだった」（Tuhkanen, 2013, p. 292）とし、自らが大きく負ってきた精神分析の限界——それは結局のところ人間中心主義的にならざるを得ない——について語っていた。ここで「照応」と呼ばれるのは本論が自他の「同じさ」として取り上げてきたものに対応するが、ベルサーニはそうにして人間的な「心理にかかわりすぎない」（Bersani, 2010, p. 174）マゾヒズムを主題に据えることになる。「[ベルサーニ]の語るもっともラディカルな関係性は、性差どころか人間とそれ以外との境界線すら越えていくものだ」（村山, 2022, p. 286）。これはサエボーグの扱う家畜の形象に同じさを見いだす本論の方向ともびたりと合致する。

サーニは同じさに注目することによって、社会的に構築された自他の境界を無化しているようだ。ところがベルサーニが思い描くのは、そうした境界が消え去り、同じさゆえに個が1つの全体に収斂してしまうような状態ではない。むしろいま述べた「横滑り」の動きは、「横滑り」しうる個がそれぞれ切り離されていることを前提してはいないだろうか。ここではアイデンティティをもって主体化するとは別なかたちの「一般的で普遍的な個別化」(Bersani & Phillips, 2008, p. 82) が働いているのである。パトリック・フレンチはベルサーニにおける「自己に閉じるマゾヒスティックな享楽」(Bersani & Dutoit 1993, p. 91, as cited in ffrench, 2013, p. 1016) という撞着語法にも見える言い回しに目をつけ、「自己のうちに絶対的に閉じこもることで破碎的な経験をする自己というパラドクス」(ffrench, p. 1016) を指摘していた。ベルサーニは既存の自他の関係をラディカルに解体するだろう。しかし幾度となく「個別性」や「単独性」を言挙げするベルサーニは、必ずしもその境界を抹消しきることに与しない。ここにベルサーニの両義性が立ち現れるはずだ。すなわち、一方でベルサーニ的な主体はマゾヒスティックに世界と同化しつつ、にもかかわらず他方では、あくまでも徹底した個への閉鎖を言い立てるのである。「ベルサーニの存在論では、差異は存在そのものに根源的で内在している」(Roach, 2021, p. 59) のだ。

サエボーグのラバースーツはこの二重性を体現している。その身体の交換可能性についてはすでに述べた⁹。それは相互に横滑りが可能だということである。それは与えられたアイデンティティをマゾヒスティックに捨て去ることである。だがラバースーツの役割はそれだけではない。それはともすればひとつの全体に回収されかねない同じさを、アイデンティティならざる個に切り分けもするのだ。女性パフォーマーをそれぞれに包み込むことで、ラバースーツは外部を遮断する。同じではあるがバラバラな個が出来する。そのような効果をもったラバースーツを、サエボーグはそこかしこで「皮膚の延長」(成相, 2017a, p.49; PCAF, 2022, p. 66) と呼ぶだろう。そしてベルサーニはまさに「皮膚」の形象に、エロティシズムが無視しうる差異を託していたのだった。『ホモズ』において、アンドレ・ジッド『背徳者』の主人公ミシェルの少年愛は「欲望する皮膚」

⁹ ベルサーニ的な同じさを交換可能性と結びつける議論についてはRoach (2021) を参照。

(Bersani, 1995, p. 120; 125) と名指される。ミシェルは北アフリカへ赴くと、「差異に邪魔されも関心を払いもせず、美しく健康なアラビアの少年のなかの、自分の不精確な複製に、自分の不精確な延長に、触れようとする。それだけである」(Bersani, p. 124)。アラビアの少年の褐色の肌を、ミシェルは何ら気に留めない。「皮膚の事実性を無視」(Benedicto, 2019, p. 284) し、白い肌をもつ自分の分身¹⁰を見る。ベルサーニはジッドの次の一節を引いていた。「私は足元に硬い土を感じた。草がそよいで身体をそっと撫でた。風から守られつつも、私は一息ごとに震えた。すぐに甘美な光輝が私を包んだ。私の全存在が皮膚の表面に満ちた」(Gide, 1970, p. 56, as cited in Bersani, p. 120, 傍点は引用者)。ここには開放と閉鎖のイメージが同時に現れている。ミシェルは皮膚全体で世界と接触しながらも「風から守られ」、その存在は皮膚へ溶けながらも「表面に満ち」るのみで溢れはしない。それはまるでラバースーツで身体を「包む」ことで、匿名の個になるかのようなのである。「非人称的な同じさへ横滑り」(Bersani, p. 125, 傍点は引用者) するかのようである。

*

主体にとって差異はトラウマ的である。抹消されるべき何物かである。このホップズ的な主体像は、サエボーグが次のように語る制作の出発点でもあった。

「どうして家畜をつくるの？」って、よく聞かれるんですけど、「弱いから」としか答えようがないですよ。最弱のものをつくりたい。私は『ウルトラマン』が好きだけど、興味があるのは、ウルトラマンじゃなくて、殺されちゃう怪獣の方なんです。たとえばガバドンというキャラクターは、悪いことは何もしない。ただ、いびきがめっちゃめっちゃうるさいんです。だから退治しなきゃ、っていう話になるのですが……やっぱり退治以外の別の付き合い

¹⁰ トッカネンはベルサーニの「同じさ」を「分身」と捉えるが、「不気味なもの」として現われるフロイトのそれとは区別し、ライブニッツのモナドに準えている (Tuhkanen, 2018, p. 161)。この点について千葉 (2018) の「不気味でないもの」の概念も併せて参照。なお、ここでの「分身」の語はサエボーグをめぐる黒瀬陽平の発言に触発されたものだ。「彼女がラバーでつくった豚の人形って、全部自分の模型に肉づけしたもので、構造的に自分の分身なんです。自分の分身としてのブタをつくり、それをパフォーマンスとして解体して、殺す」(卯城 & 黒瀬, 2015, p. 39, 傍点は引用者)。

方を考えられないのかな。戦隊モノだと、みんなで力を合わせて一匹の怪獣をフルボッコにしたりするけど、それって、正義のヒーローとしてどうなんでしょう？と。怪獣は「異質なもの」であって、必ずしも悪いわけじゃない。それを排除しようとするのは、悲しいですね。(プロイ, 2019, p. 5)

「異質なもの」を「排除しようとする」ことが当たり前だとして、そうではない「別の付き合い方」を模索すること。ベルサーニとサエボグに通底するのは、いかに他者を排除しないかたちで共存を図るかという問いである。私がこれまで示してきたのは、両者にとって共存の方法とは自他が存在論的に横滑りしうる同じさを見いだすことである、ということだ。「私たちが他者や外の世界を愛しうる唯一の方法は、どうかその中に自分自身を発見することのようである。そうしてはじめて、差異を根絶やしにしないような非暴力的な関係が世界とのあいだに築けるかもしれないのだ」(Bersani, 2010, p. 43)。

「非暴力的な関係」。それはケアの倫理が目指すところでもある。岡野八代はケアの倫理を論じるにあたり、幼児のころ他者から受けたケアの重要性を挙げていた。「わたしが、〈わたし〉であるという意識を持つようになるのは、本当にあったのかどうかさえ定かではない、他者から受けたケア、つまり、注視、気遣い、労苦、葛藤、そして愛情があったからこそ、なのだ」(岡野, 2012, p. 151)。ケアは「他者と別個の人格として [...] 自らを意識する」(岡野, p. 151) ことに——精神分析的に言えば主体化に——欠かせない要素だ。私たちはこの世界で意識をもって生きている時点で、つねにすでに、相互に労わりあうケアの営みのなかに含まれているというのである。しかしそのような非暴力は果たして本当にあり得るのか。「想像的なものであれ現実のものであれ、私たちが暴力の根源からすばりと手を切ることは不可能」(Bersani & Dutoit, 1998, p. 98) ではないのか。後期のベルサーニはマゾヒスティックな「自己破碎を新しい文脈に置く」(Bersani, 2010, p. 176) ものとして、ジャン・ラランシュの「謎めいたシニフィアン」の概念を持ち出した。ラランシュによれば親は幼児をケアするとき、親自身の幻想や欲望をメッセージとして送っている。彼ら自身気づいていないこうしたメッセージを、幼児もやはり解読不能なものとして受け取ることになる。ラランシュはこれを「謎めいたシニフィアン」と呼び、ここに親から子へ

と一方向に向かう「サドマゾヒスティックな」(Laplanche, 1999, p. 212) 非対称性を見た。幼児は謎めいたシニフィアンの理解不可能な他者性に圧倒されるが、この不快を自分のうちに、自己破碎にも似たマゾヒスティックな仕方に取り込む。このようにして他者によるケアは幼児に無意識——自我のなかの他者——をインストールするのである。

したがって、岡野の主張するような「意識が宿る以前に他者から働きかけられた実践」(岡野, 2012, p. 152) による主体化を、ベルサーニは半ば支持するだろう。原初のケアは主体化に第一義的だ。だがこれは大いなる逆説である。なぜなら、ラブランシュ＝ベルサーニによれば他でもないケアを通じた主体化が、まさにケアの倫理が否認しようとする主体と他者との、あるいは世界との、敵対的な関係性を準備してしまうからだ。ベルサーニ+デュトワは言う。「もし […] 他者が私たちの安定性を脅かすように感じるのだとしたら、自我は生存のために防衛しなければならない。しかしそれにとどまらずもっと危険なことに、もしそうした脅威に私たちが誘惑されうると感じるのだとしたら、[...] 不信感をもって世界と対峙することは理にかなっている」(Bersani & Dutoit, 1998, p. 41)。これを踏まえると、非暴力の主題を追求するにあたってベルサーニが自己破碎の倫理から同じさへと理論的な変遷を辿ったことが首肯できるだろう。たしかに両者はともに構築されたアイデンティティを脱ぎ捨てる試みだが、自己破碎が謎めいたシニフィアンに根拠をもつ以上、自他の差異を、そのあいだの敵対を、前提するからだ。自己破碎とはマゾヒスティックに主客未分化の状態へ還ることで、自己のうちに他者を取り込むことである。それはしかし他者を自己のうちに併合してしまうことだとは言えないか。「要するに、無制限のマゾヒズムとはたんに無制限の暴力のことではないのか」(村山, 2022, p. 271)。

ベルサーニにとってケアと暴力という二項対立は自明ではない。主体としての差異に根を下ろす点で、むしろケアは暴力と不可分である。両者は「権力の行使と同じ関係性のシステムに、同じ関係性の想像力に属している」(Bersani, 2010, p. 110) のだ。ケアの倫理を立ち上げたキャロル・ギリガンは万人に対して一律に適用される正義論に異を唱え、目の前の他者一人ひとりに具体的に向けられる個別のケアを構想した(ギリガン, 1986)。ここで言う「他者」は人間に限らない。動物倫理においても引き合いに出されるケアは、動物を「伝記的生」(井上,

2022, p. 308) をもつ者として尊重することを促した。ここで思い出されるのは、ケアの倫理が重んじられるこうした主体としてのアイデンティティや人格こそが、生政治の中心的な装置だったことだろう。フーコーが「主体化＝従属化」と語ったのは、個人にアイデンティティ的な真理が結びつけられ、そのことによって統治可能な主体になることではなかったか（フーコー, 1986）。かけがえのない他者をいたわることにおいて、ケアは生政治的な暴力と共犯してしまう。ならば非暴力は、人間的な固有性を見ずにすませることにあるはずだ¹¹。「非人間化によって対象の価値を消 [し]、逆説的に他者とのサディスティックでない倫理的な関係の端緒を開く」（Tuhkanen, 2020, p. 161）、それは自他の同じさ、アイデンティティへの無関心、つまりは先に取り出した横滑りの動きである。

しかしこの横滑りも、決して自己破碎と生政治的ケアの暴力性と無関係ではない。『貧困化の芸術』のポルノグラフィにおける横滑りの例は、むしろ他者の自己破碎へマゾヒスティックに同一化する主体の姿を指している¹²。マゾヒズムが他者の領有の危険性を秘めているとして、この動きもまた暴力を免れない。しかしこの横滑りは、自他の差異を抹消しようとする自己破碎から自他の同じさへの移行をも指しているのだった。享楽する女性に同一化する男性は、図らずも、ジェンダーの差異という構築されたアイデンティティを無視している。自他の差異はもはやトラウマ的ではない。ベルサーニが複数の著作にわたって繰り返す言葉を使えば、それは「脅威なしに同じさを補填するもの」（Bersani, 1995, p. 7; 2010, p. 33, 55, 183; Bersani & Phillips, 2008, p. 86）に過ぎなくなる。ここにこそ非暴力の契機がある。同じさは「謎めいたシニフィアンの専制から解放された関

¹¹ この点で、「非人称のナルシズム」概念の「非人称 impersonal」という語のうちに、「人格をもたない」という響きを聴き取ることもまた肝要だ。アイデンティティや人格を生政治の核としたうえで、ベルサーニを引きつつ「非人称性」に生政治から脱出する契機を見た文献として Roach (2012) がある。

¹² この「同一化」の作用はベルサーニ+デュトワに言わせれば、ケアの倫理がしばしば主張する「共感」に通じているはずだ。共感、つまり「他者の現実を気遣い、他者の考えに可能なかぎり思いを巡らせることは、ケアの行為に本質的」（Noddings, 1984, p. 16）とされる。他者を——動物も、サエボーグの家畜ももちろん含むだろう——人間として気遣い、苦境にある他者を労わること。しかし、このような「共感はつねに性的な快楽の残滓を含む。そして避けがたく、その快楽はマゾヒスティックなものだ」（Bersani & Dutoit, 1985, p. 38）。ベルサーニ+デュトワにとって、共感とは暴力の渦中にある他者への自己破碎な同一化としか説明のしようがなく、他者に対するリベラルな応答としては「本質的にいくらか機能不全」（Bersani & Dutoit, p. 38）なのである。

係性のかたち」(Dean, 2001, p. 135)なのだ。サエボーグはラバースーツに身を包むことで、同じさへ横滑りするのだった。サエボーグはケアの基盤である「代替不可能な価値をもった」(岡野, 2012, p. 338)主体の位置から横滑りし、「人間を超えたもっと自由な身体」(成相, 2017a, p. 50)を得る。女性というアイデンティティから離れ、生政治的な統治からの脱出を図るのである。

同じさへ横滑りするというイメージは、「直腸は墓場か?」以前の1985年に出版されたデュトワとはじめての共著『暴力の形式』においてすでに現われていた。この書がつぶさに分析するアッシリアのレリーフは戦争や動物の狩りなどといった暴力を描き出し、それを賛美するものだ(Bersani & Dutoit, 1985, p. 7)。実際にそのような非難を浴びてきたというレリーフのうちに、しかしベルサーニ+デュトワは「物語的なモードと非物語的なモードの間のある種の横滑り」(Bersani & Dutoit, p. 14, 傍点は引用者)を看取する。アッシリアの芸術家は、レリーフの主題である暴力的な物語のただ中に、反復する幾何学的な形式を忍ばせていた。鑑賞者は、一方で強さを誇示するような——例えばライオンを槍でぐさりと貫くといった——暴力の主題に惹かれる。これは暴力のスペクタクルへマゾヒスティックに同一化することだ。しかし他方で鑑賞者の注意は、レリーフを構成する同じ形式の反復へと間断なく逸らされる——横滑りさせられる。同じさは自己破碎に留まることを許さない。そのようにしてアッシリアのレリーフは「物語的な暴力のまさに中心が、その暴力を脱中心化している」(Bersani & Dutoit, p. 39)のだ。

同書の別な箇所では、ベルサーニ+デュトワはちらりと、「息を呑むほどに優しい暴力」(Bersani & Dutoit, 1985, p. 80)という奇妙にも思える表現を用いていた。そこで彼らが目を向けているのは、狩りや戦争の暴力に晒され傷ついた身体である。俯いて地に伏したライオンには首に2本、胸に1本の矢が刺さっており、兵士はもはや闘う意志もなく倒れ込んでいる。レリーフが活写するのは、そうした身体の上をそれぞれ1頭の馬が飛び越える様子だ。そして、ここではライオンと兵士という「敗れ去った身体はその上を駆ける動物に踏みつけられるのではなく、むしろ包まれている」(Bersani & Dutoit, p. 80, 傍点は引用者)のである。ライオン・兵士の上を馬が通過するとき、その四肢は接地している。そのことによって肢は馬の腹部とつながって弧を形成し、その弧は直接的な地面を弦に閉じ

られる。ここで完成する弓形は、あたかもライオンと兵士を包んでいるかのようなのだ。ベルサーニ+デュトワがここに「柔らかな官能性——長くしなやかに曲がる身体がほかの身体を覆いながらも触れることはしない、そうしたほとんど保護するような官能性」(Bersani & Dutoit, p. 80)を垣間見るとき、「包む」というイメージが含みもつ「官能性」を伴ったケアについて語っているのである。

この議論をサエボーグと並べると、ある相似が浮かぶはずだ。サエボーグは身体をラバースーツで「官能的」に「包む」ことで、横滑り可能な身体を手にする。それは暴力への惹かれを否定しない。ラバーに「包まれる」ことは、一方で畜殺という暴力の光景に同一化することである。身体が締め付けられるようなフェティシズムとともに、家畜になることを通じてマゾヒスティックな自己破砕を経験することである。しかし他方で、サエボーグはそのような暴力の自己破砕的な享樂とは別な道筋もまた用意している——再三言うように、横滑りとは自己破砕から同じさへの転回の名でもあるのだ。ラバースーツの家畜は互いに同じなのだ。アッシリアのレリーフが戦争の光景から同じ幾何学的抽象へ横滑りしたように、サエボーグも屠殺からラバーの同じさへ横滑りしもするのである。ベルサーニにとってこの同じさもまたある種のマゾヒズムである。それは「快樂をもって自我の境界線を放棄し、自己を消し去るような快樂を意味する」(Bersani, 2010, p. 175)。この同じさにあつて、差異はもはやどうでもよくなる。暴力的に掻き消すべきものではなくなる。同じさは逆説的にも差異を保存するのである。こうした差異の保存をよく表しているのが、「包む」というイメージにほかならない。アッシリアのレリーフで走る馬がつくる曲線——サエボーグのラバースーツの膨らみを思わせる——に包まれていたのは、戦争の暴力で傷を負った身体である。同様にサエボーグの家畜たちも、やはり暴力に晒された者たちであった。ラバーに包まれることは自他が同じであるような身体を手にするのである。そのことによって暴力を、かろうじて致死的でない何物かに、享樂しうる何物かに、変えることである。

ベルサーニの思想はサエボーグを介して、一見かけ離れたケアの倫理に接続する。生政治における「牧者のケアは […] 決して自分に向けられるケアではない」(フーコー, 2007a, p. 158)。ところで、サエボーグのケアは必ずしも他者にのみ向くのではなかった。ラバーは「劣化防止のためのお手入れ」が必要な脆い

素材である。そして、そうした手入れは「ペットの世話をすると似てい」（成相, 2017a, p. 49）る、とサエボーグは続けるのだ。自分の「皮膚の延長」としてのラバーを、家畜のように^{ペット}世話すること。ラバーの皮膚は、アイデンティティとは別なかたちで自他の分割線を引きなおし、そのうえで自己を他者と同じにする。アイデンティティを捨てた単独者は、他者とは無関係に——ベルサーニ的に——自己へのケアに専念するだろう。しかしそのケアは「存在の交換可能性」（Bersani & Dutoit, 1999, p. 88）に根ざすゆえに、他者を愛おしむようなケアが隠蔽している暴力から同じさの非暴力へ、不意にすり替わってしまうはずである。「自分が誰かをケアすることによって、逆に自分がケアされていることがある」（サエボーグ, 2021）。そのようにサエボーグは書いていたのだった。その作品にはしかし、これと逆向きの回路もまた発見できる。すなわち、サエボーグ=ベルサーニ的な自己へのケアは、思いがけず「他なる同じさ」（Bersani & Dutoit, 1999, p. 88）へのケアに横滑りしてしまうのである。

References

- Benedicto, B. (2019). "Agents and Objects of Death: Gay Murder, Boyfriend Twins, and Queer of Color Negativity," *GLQ*, 25(2), 273–296.
- Bersani, L. (1986). *The Freudian Body: Psychoanalysis and Art*. Columbia University Press. (=レオ・ベルサーニ (1999). 『フロイトの身体 精神分析と美学』長原豊訳. 青土社).
- Bersani, L. (1995). *Homos*. Harvard University Press.
- Bersani, L. (2010). *Is the Rectum a Grave? and Other Essays*. University of Chicago Press.
- Bersani, L., & Dutoit, U. (1985). *The Forms of Violence: Narrative in Assyrian Art and Modern Culture*. Schocken Books.
- Bersani, L., & Dutoit, U. (1993). *Arts of Impoverishment: Beckett, Rothko, Resnais*. Harvard University Press.
- Bersani, L., & Dutoit, U. (1998). *Caravaggio's Secrets*. MIT Press.
- Bersani, L., & Dutoit, U. (1999). *Caravaggio*. British Film Institute.
- Bersani, L., & Phillips, A. (2008). *Intimacies*. University of Chicago Press. (=レオ・ベルサーニ & アダム・フィリップス (2012). 『親密性』檜垣立哉 & 宮澤由歌訳. 洛北出版).
- Casero, R. L., Edelman, L., Halberstam, J., & Muñoz, J. E. (2006). "The Antisocial Thesis in Queer Theory". *PMLA*, 121(3), 819–828.
- Chrulew, M. (2012). "Animals in Biopolitical Theory: Between Agamben and Negri." *New Formations*, 76, 53–67.
- Dean, T. (2001). "Homosexuality and the Problem of Otherness," *Homosexuality and Psychoanalysis*. (T. Dean & C. Lane, Ed., pp. 120-43). University of Chicago Press.
- Edelman, L. (2004). *No Future: Queer Theory and the Death Drive*. Duke University Press.
- Edelman, L. (2022, March 15). "Speechless: On Leo Bersani." In the Moment. <https://criting.wordpress.com/2022/03/15/speechless-on-leo-bersani/>.
- ffrench, P. (2013). "On Being Another: Bersani with Antonioni." *Textual Practice*, 27(6), 1013–1030.
- Gide, A. (1970). *The Immoralist*. (R. Howard. Tr.) Vintage.
- Halberstam, J. (2011). *The Queer Art of Failure*. Duke University Press.
- Halberstam, J. (2020). *Wild Things: The Disorder of Desire*. Duke University Press.
- Laplanche, J. (1999). *Essays on Otherness*. (A, Benjamin. Eds.), Routledge.
- Muñoz, J. E. (2009). *Cruising Utopia: The Then and There of Queer Futurity*. Duke University Press.
- Nichols, B. (2020). *Same Old: Queer Theory, Literature and the Politics of Sameness*. Manchester University Press.
- Noddings, N. (1984). *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*. University of California Press.
- Roach, T. (2012). *Friendship as a Way of Life: Foucault, AIDS, and the Politics of Shared Estrangement*. State University of New York Press.
- Roach, T. (2021). *Screen Love: Queer Intimacies in the Grindr Era*. State University of New York Press.
- Tuhkanen, M. (2013). "Rigorously Speculating: An Interview with Leo Bersani," in *Leo*

- Bersani: *Queer Theory and Beyond*. (M. Tuhkanen, Ed., pp. 279-96). State University of New York Press.
- Tuhkanen, M. (2018). *The Essentialist Villain: On Leo Bersani*. State University of New York Press.
- Tuhkanen, M. (2020). *Leo Bersani: A Speculative Introduction*. Bloomsbury.
- 井上太一 (2022). 『動物倫理の最前線 批判的動物研究とは何か』人文書院.
- 上野千鶴子 (2009). 『家父長制と資本制 マルクス主義フェミニズムの地平』(岩波現代文庫版). 岩波書店.
- 卯城竜太 & 黒瀬陽平 (2015). 「新世代作家キュレーション対決!!」, 『美術手帖』67 (1021), p. 20. 美術出版社.
- 江永泉 (2020年9月21日). 「レオ・ベルサーニ『ホモズ』(1995) 読書ノート: 「プロローグ: "We"」 [1-10 頁]」, note. <https://note.com/imuziagane/n/n3f66cb6f0d1e>.
- 岡野八代 (2012). 『フェミニズムの政治学 ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房.
- キャロル・ギリガン (1986). 『もうひとつの声 男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ』岩男寿美子訳, 川島書店.
- 黒瀬陽平 (2014). 「震災以後」の太郎賞 「第17回岡本太郎現代美術賞」展『美術手帖』, p. 188. 美術出版社.
- サエボーグ (2016年6月12日). 「「サエボーグの豚小屋」多摩美術大学ジェンダー文化論特別講義レポート」, *Numero TOKYO*, <https://numero.jp/saeborg/archives/12180>.
- サエボーグ (2021年7月19日). 「病とケアと生をめぐる複数の現実。サエボーグ評 中村佑子《サスペンデッド》」. 美術手帖. <https://bijutsutecho.com/magazine/review/24324>.
- サエボーグ (2022). 「Artists Interview 創作する表現者 アーティスト4人の肖像 Portraits of Four Artists」, *PAVONE: The Spirit of Elegance*. https://www.pavone-style.com/artists_20220420.php.
- 千葉雅也 (2018). 「不気味でない建築のために」, 『意味がない無意味』(pp. 76-85). 筑摩書房.
- 成相肇 (2017a). 「Interview 4: サエボーグ」, 『美術手帖』69 (1061), pp. 46-51. 美術出版社.
- 成相肇 (2017b). 「21世紀のセックスと現代美術」, 『サイゾー』2018年1月号, pp. 38-41, サイゾー.
- ミシェル・フーコー (1986). 『性の歴史I 知への意志』渡辺守章訳, 新潮社. (= Foucault, M. (1978). *The History of Sexuality Volume 1: An Introduction*. (R. Hurley, Trans.). Pantheon Books.)
- ミシェル・フーコー (2007a). 『ミシェル・フーコー講義集成1 コレージュ・ド・フランス講義 1977-78年度 安全・領土・人口』高桑和巳訳, 筑摩書房. (= Foucault, M. (2009). *Security, Territory, Population: Lectures at the Collège de France 1977-1978*. (M. Senellart, Eds., G. Burchell, Trans.). MacMillan Publishers.)
- ミシェル・フーコー (2007b). 『ミシェル・フーコー講義集成6 コレージュ・ド・フランス講義 1975-76年度 社会は防衛しなければならない』石田英敬 & 小野正嗣訳, 筑摩書房.
- セバスチャン・ブロイ (2019). 「サエボーグ 情動資本主義モンスターと愛の戦士」, 『情の時代 あいちトリエンナーレ 公演パンフレット』, https://aichitriennale2010-2019.jp/2019/artwork/item/saeborg_booklet.pdf
- PCAF (ポストコロナ・アーツ基金) (2022). 『ポストコロナと現代アート16組のアーティスト

トが提起するビジョン』, 左右社.

南島宏 (2017). 『最後の場所 現代美術、真に歓喜に値するもの』 南島宏美術評論集』 月曜社.

村山敏勝 (2022). 「孤独なマゾヒズム——レオ・ベルサーニへの斜線」, 『(見えない) 欲望へ
向けて クィア批評との対話』 (ちくま学芸文庫版, pp. 259-291). 筑摩書房.

ジャン・ラプランシュ (2018). 『精神分析における生と死』 十川幸司, 堀川聡司 & 佐藤朋子訳,
金剛出版.

ディネシュ・W・ワディウエル (2019). 『現代思想からの動物論』 井上太一訳, 人文書院.

Abstract

Bersani's Violent Care/Saeborg's Sliding Bodies

Yuki NAGAO

This essay aims to extend Leo Bersani's thought over the ethics of care by analyzing a series of works by a Japanese installation and performance artist Saeborg. Through outlining a juxtaposition of the artist and theorist, I will demonstrate how both seek a nonviolent relationality with others, contrary to the general assumption of Bersani as a thinker of solipsistic and masochistic self-shattering.

In the first section, I deal with the violent representations of Saeborg from the vantage point of Marxist feminism and also of biopolitics, with particular attention to the animal figure. In her performance of slaughter, it is with rubber suits that female performers disguise themselves, before rendering visible the brew of violence of capitalism/patriarchy/biopolitics befallen on women equated with livestock. It is, nonetheless, impossible to go unmarked that from the very latex suits, Saeborg draws out the affirmative implication of a self-determined body as well. This ostensible incongruity should define the theoretical limit of violent representation, which calls upon the eroticism that rubber arouses.

In order to settle the aforementioned contradiction, in the second section I turn my eyes to a shift in Leo Bersani's thought towards what is called sameness: a concept Bersani develops from his self-shattering with which a subject experiences violence with masochistic jouissance. While Bersanian sameness radically demolishes socially constructed self-other boundaries, his consistent emphasis on individuality appears not to obliterate them altogether; on the one hand, the Bersanian subject is masochistically assimilated into the world, and yet, on the other hand, he insists on a thoroughgoing enclosure of the individual. Regarding the movement between these scattered

homogeneities as “sliding,” this paper connects the Bersanian concept of sameness to Saeborg’s fungible bodies of rubber suits, which bring about the masochistic eroticism of unbecoming human and submerging under anonymity whilst shutting out the performers to evacuate them from the fascist-like ontological wholeness that sameness at times leads to.

In the third section, I detail the latent complicity between the ethics of care and biopolitics to sketch another form of care Bersani and Saeborg both deliver, by referring to a prerequisite of the ethics of care: subjectification. Bersani’s view on Jean Laplanche’s concept of the enigmatic signifier demonstrates that subjectification prepares the self-other difference, from which, according to Bersanian and Saeborg, violence derives. This paper, then, sets Saeborg against the “sliding,” which designates a perpetual oscillation between two formations of Bersanian masochism: violent self-shattering and non-violent sameness, with Bersani and Saeborg suggesting the latter one as an alternative form of care through the image of “envelopment.” By relinquishing the attributed identity, an essential dispositif for biopolitics, to achieve sameness where each singularity cares for themselves that is no more distinct than the other singularity, I conclude that Saeborg, in union with Bersani, dreams of an exit out of the complex of capitalism, patriarchy and biopolitics, though this care does not defy the necessary link to pleasurable violence.

Keywords:

Leo Bersani, Saeborg, biopolitics, masochism, the ethics of care

Research Paper

Racism and Sexism against Serena Williams in Australian Media: Understanding Celebrity Feminism and Black Women in Cross-Cultural Contexts

Katsuhiko SUGANUMA

Introduction

Serena Williams is a sport icon being the “most dominant player in the history of women’s tennis” (Tredway, 2018, p. 63). Serena has also long performed “blackness like no other person in the history of tennis” (Tredway, 2020a, p. 1564). Drawing on black feminists’ theorization of an “intersectionality” of gender and race, which attests to the need of understanding how the combination of sexism and racism oppresses black women more than it does white women (Collins, 2000; also see Crenshaw, 1989; Crenshaw, 1991), Kristi Tredway (2020a) discusses how Serena has been treated differently from other professional white female players. To be precise, Tredway argues that Serena “has been differently racialized than white women within women’s tennis, and differently gendered than men, white and Black, within tennis” (p. 1568). Despite being subjected to such intersectional oppressions, Tredway (2020b) furthermore suggests that Serena’s blackness is an “unapologetic” one that challenges the white hegemony of women’s tennis (p. 109).

The women’s final match at the 2018 U.S. Open Tennis Championships drew much media attention. Some of the Australian media’s responses to the on-court behavior of Serena served only to expose what Tredway (2018) critically identifies as the “color-blind racism” against the tennis player.

Drawing on the critical works by Tredway (2018; 2020a; and 2020b), this paper unpacks the cross-cultural racism against Serena revealed by the media discourse of the U.S. Open final, with reference to the relevant contemporary, as well as historical, contexts from Australia. By focusing on the interconnection of gender and race, I argue that Serena continues to be the target of policing, suspicion, and eroticization in a transnational media landscape. Furthermore, by adding a transnational dimension to Janell Hobson's understanding of black celebrity feminists who "are articulating" and "*theorizing* critical issues pertaining to gender and its intersections with race and class for a mass audience" (emphasis in original: 2017, p. 1000), this paper also discusses the ways in which the global celebrity feminism presented by Serena would provide a critical optic through which to expose ongoing prejudices and discriminations against black women in Australia.

Notes on Serena Williams at the 2018 U.S. Open

What attracted most attention was not the excellence of the performance by the two finalists, but how Serena reacted to the code violations that she received during the women's final match at the 2018 U.S. Open. Serena was on a quest to claim the twenty-fourth Grand Slam title of her impressively long and decorated career, equal only to the unbeaten record of one of Australia's tennis legends, Margaret Court. During the final match, Serena had a dispute with a male umpire, Carlos Ramos, who gave her a warning for allegedly receiving instructions from her coach. Serena denied the allegation, and the verbal sparring between her and Ramos intensified over the course of the game, escalating to the point where Ramos decided to issue a game penalty for Serena's verbal abuse. Serena became emotional and spoke to the referees, claiming that such a harsh penalty would never be handed down if she were a man. In response to the comments made by the referees who were explaining to Serena that she was penalized for calling an umpire "thief," Serena lamented:

This has happened to me too many times. This is not fair. ... You know how many other men do things that are ... much worse than that. ... There are a lot of men out here that have said a lot of things and because they were men, that doesn't happen to them. ... I get the rules, but I'm just saying it's not right. And it happened to me at this tournament every single year that I played. That's not fair. That's all I have to say. (Healy, 2018)

With tears in her eyes, Serena conceded the penalty and continued to play the match against her opponent, Naomi Osaka, who went on to claim her first Grand Slam title.

The dramatic finish of the U.S. Open championships quickly became the polemical subject of the week in international media circuits. Among others, a cartoon by Mark Knight, published in the Australian tabloid newspaper the *Herald Sun*, caused a significant uproar. On countless media platforms, including major newspapers and SNS sites, the cartoon was criticized for depicting Serena with large lips and other bodily features that were recognizably racist stereotypes. The proximity between Knight's publication and racist depictions of black people during the U.S. Jim Crow period or in so called "sambo" cartoons was pointed out by many prominent figures, including British popular author, J. K. Rowling, and American civil rights leader, Jesse Jackson (Davison, 2018).

In the midst of media uproar, both Mark Knight himself and the *Herald Sun* newspaper, which was owned by Rupert Murdoch's News Corp Australia, were quick to defend their publication. Within just two days after the initial publication of the controversial cartoon, the *Herald Sun* published the same cartoon, together with another online feature article about Knight's artwork. The article started with Knight's explanation that he had to suspend his Twitter account out of concern for the wellbeing of his family members, after having received numerous personal threats from the public. The newspaper presented a defensive narrative of its own publication by claiming that "veteran cartoonist

says his [Knight's] portrayal was never about race or gender – rather the sporting superstar's bad behavior" (*Herald Sun Backs Mark Knight's Cartoon*, 2018). Knight himself was also quoted in the same article, saying that:

I drew this cartoon Sunday night after seeing the US Open final, and seeing the world's best tennis player have a tantrum ... The cartoon about Serena is about her poor behavior on the day, not about race. The world has just gone crazy. (*Herald Sun Backs Mark Knight's Cartoon*, 2018)

Whether Knight's cartoon is racist despite his own claim of being otherwise, or whether the criticism towards his artwork challenges the fundamental right of freedom of expression might constitute a debate of its own. What is interesting, however, are the ways in which there have been persistent attempts, as most literally exemplified in the above quote, of disassociating the topic from its intersection with questions of gender and race. In other words, the "color-blind" criticism of Serena would not only let sexism go unnoticed, but, most importantly, undermine a multitude of oppressions imposed upon black female tennis players today (Tredway, 2018).

Controlling Serena through Color-Blind Criticism

De-racializing and de-gendering the discourses of successful black women is an effective media tactic employed in the new millennium. Examining the enormous popularity of a super model-turned-TV personality Tyra Banks in the U.S. and elsewhere, Ralina L. Joseph (2009) argues that her exceptional success has been possible precisely because of Bank's embodiment of "(post-) racism" and "(post-) feminism" narratives. Being somewhat part of that which Catherine Rottenberg (2014) calls "the rise of neoliberal feminism," Tyra Banks functions as a symbol of a black celebrity woman whose success is supposed to be attributable entirely to her own individual talent and effort. In this context, Joseph (2009) suggests that neither her gender nor racial status can

ostensibly affect her outcomes. Moreover, her visual presence as a black woman, in turn, legitimizes the validity of “(post-)racism” and “(post-)feminism” narratives.¹ As such, her popularity is well containable within the pre-existing white-dominant racial hierarchy. Drawing on the work of Eduardo Bonilla-Silva (2003), Joseph (2009) reminds us that such a color-does-not-matter discourse “create[s] an illusion that the contemporary United States is a racially level playing field where race-based measures are not only unnecessary for people of color, but actually disempower whites” (p. 240).

Mark Knight’s self-defence of his cartoon of Serena presents this (post-) race and gender discourse par excellence. It was not about her race or gender. It simply had to do with her individual personality and behavior. Moreover, the ultimate victim of the media uproar, to Knight’s mind at least, is the white cartoonist himself and his family. The cartoonist embodies the narrative of cultural amnesia which suggests that he lives in the world where race and gender no longer matter. According to the Oxford dictionary, the word “tantrum,” which was used by Knight to describe Serena’s behavior, means “an uncontrolled outburst of anger and frustration, typically in a young child” (Oxford University Press, n.d.). The effect of an infantilizing trope associated with this particular term is to portray and problematize Serena as someone who is immature, undisciplined, and disobedient in the world of tennis, while the critical discussions of race and gender remain untouched.

Nearly a decade earlier, Serena was subject to similar criticism and ridicule when Peter Nicholson’s satirical cartoon was published in the Australian daily,

¹ With the use of terms such as “(post-)racism,” and “(post-)feminism,” Joseph (2009) certainly does not undermine the importance of their critical insights into the limitations that identity-based civil rights movements and second-wave feminism entailed (pp. 239-240). Joseph’s concern is that those deconstructive critiques of identity politics have been appropriated for the purpose of denying the existence of racism and sexism in the contemporary mainstream media. As such, Joseph (2009) argues that black female celebrities still exist in “a new millennium representational landscape overdetermined by race and gender at the same time in denial of its overdetermined nature” (p. 238).

The Australian. Nicholson's cartoon was in response to Serena's on-court behavior in the semi-final match against Kim Clijsters at the 2009 U.S. Open. It was alleged that Serena verbally intimidated a line judge who called her foot-fault at a crucial moment of the match. Serena's aggression against the line judge was deemed a code violation, resulting in her eventual loss to Clijsters. Though a much less caricatured racial depiction of Serena compared to that of Knight, Nicholson's cartoon draws Serena with a pacifier in her mouth, sitting next to a toddler who is supposed to be a daughter of Clijsters. Standing in front of these two infantilized figures is Clijsters asking "Now, who's been a good girl today?" under a sign that says "Crèche," meaning a nursery for infants (Nicholson, 2009).

Although Nicholson's cartoon did not provoke as much public reaction as Knight's, the former resonated with the drawing of the latter in terms of portraying Serena as too unorthodox to be contained in the white-dominant world of tennis. Kim Clijsters, on the other hand, who, as a white Belgian woman, made a comeback when she won the Grand Slam title at the U.S. Open in 2009 after giving birth to her daughter, embodied a role model of female tennis champion in her maturity.

At the U.S. Open in 2018, Serena was attempting the same achievement as Clijsters' – to win the Grand Slam title as a mother of a daughter and earn the respect from the global audience – but to no avail. An Australian tennis legend, Margaret Court, who holds the record of winning more Grand Slam titles than any other woman in history, did not endorse Mark Knight's cartoon, and yet did, in broader terms, participate in constructing the recurring discourse which suggests the behaviors demonstrated by Serena on the final match were not a reflection of the rules of tennis and its moral code. Court opined:

We always had to go by the rules. ... It's sad for the sport when a player tries to become bigger than the rules. (Taylor, 2018)

However, what if existing tennis rules and associated cultures are not inclusive enough for players of diverse gender and race? The events of the 2018 U.S. Open also expose the persistent problem of intersectional marginalization placed upon women in the world of tennis. Earlier in the tournament, a French player Alizé Cornet was given a code violation for quickly removing her top shirt and putting it back on during a match because she realized that she was wearing it backwards (Kelner & Lutz, 2018). This penalty against Cornet stirred much public debate and was critiqued as a form of sexism, since male players rarely receive such penalty when changing their shirt between games. The uproar later led the tournament officials to issue an apology for their decision. In the post-final match media conference, Serena, referring both to her dispute with Carlos Ramos as well as to Alizé Cornet, reflected as follows:

But I am going to continue to fight for women and to fight for us to have (equality). Like, (Alizé) Cornet should be able to take off her shirt off without getting a fine. This is outrageous. ... I just feel like the fact that I had to go through this is an example for the next person that has emotions and that want to express themselves, and they want to be a strong woman. And they're going to be allowed to do that because of today. Maybe it didn't work out for me. But it's going to work out for the next person. (Martinelli, 2018)

Serena only uses the word “strong woman” in this statement. But if we read this quote replacing the word with “strong black woman,” it would more precisely address the multiple double standards that Serena has confronted during her long career in a white-dominated tennis world. Even one year before this incident, Serena stated, in her published essay commemorating Black Women Equal Pay Day, that she felt the need to make use of her “perspective and experiences as an athlete, an entrepreneur and a black woman to the boardroom and help create a more inclusive environment in this white,

male-dominated industry” (Williams, 2017).

She does precisely so in the world of tennis. Even considering the successful career of her own sister Venus, there has been no other black woman whose accomplishment matches that of Serena. With the exception of the Williams sisters, only a handful of women of color have ever won a Grand Slam title throughout its history. Evonne Goolagong Cawley, an Australian Aboriginal female player, won more than a few Grand Slam titles during the 1970s and the early 1980s, achieving an impressive overall career (Passa, 2008, p. 23); however, her success was overshadowed by the even more successful track record of her white contemporary rival, Chris Evert. This is not to diminish the significance of Goolagong’s achievement, especially as her success and subsequent establishment of the Evonne Goolagong Foundation were instrumental in raising the profile of young Aboriginal tennis players in Australia (Pearce, 2015, p. 42). However, it is debatable as to what extent Goolagong’s legacy had helped to deconstruct the white hegemony that characterized the tennis world, which her black female successors, like Serena, would have to confront two decades later.

Despite Mark Knight’s suggestion otherwise, the world of tennis has been structured strongly around class, nationality, gender, and race (Spencer, 2004). As a result, Serena has always been marked or put under “surveillance” not only for her gender, but also her race (Douglas, 2012, p. 130). Time after time, Serena has been subjected to racist and sexist remarks by users of online social media sites, whereby her body type, combined with anti-black racism, has been a primary source of scorn associated with animality and savagery (Litchfield et al., 2018, p. 163, 165). One particular body part which has been subjected to such scorn is Serena’s buttocks.² When Serena won the 2002 U.S. Open wearing

² The use of black women’s bodies as a way to construct orientalist and racist discourses about white race and its superiority does not, of course, happen in a vacuum. The unfortunate history of Saartie Baartman, otherwise known as “Hottentot Venus,” provides a bleak contextual backdrop (Hobson, 2018, p. 107). Taken from South Africa, Baartman was exhibited at so called “freak shows” on tour in Europe in the early 1800s.

a tight outfit called a “cat-suit,” the discussion of her buttocks was a media obsession (Schultz, 2005). Schultz (2005) rightly points out that media discourses of Serena’s backside are “inconsistent with discussions of the white women on the professional tennis circuit, constructing and highlighting a racialized corporeal difference between females” (p. 350). Schultz further contrasts the ubiquity of Serena’s backside with the equally media-exposed rear image of Anna Kournikova. In the early 2000s, Kournikova, a white Russian woman, became one of the most lucratively sponsored female tennis players without winning a single Grand Slam title (Schultz, 2005, p. 346). Schultz (2005) notes that the sight of Kournikova’s rear functioned as “a pleasurable spectator sport for many people, particularly men, rather than a freakish or grotesque curiosity” (p. 350). We see a clear discursive split between the two women’s bodies of contrasting races: one is disobedient, another obedient to the corporeal aesthetic standard of white beauty.

Leading up to the controversial U.S. Open tournament in 2018, Serena also competed in the French Open in the same year. In the tournament, she wore a black “catsuit,” this time tightly covering her entire waist below, partly in order to deal with her existing medical condition of blood clots. As a result, her postnatal rear was in full display on the reputed clay court. The French Tennis Federation, however, found Serena’s suit “went too far” and deemed it disrespectful for their prestigious tennis tournament, resulting in a ban on its use in the future (Clemente, 2018). As discussed thus far, the discourse of disobedience recurs every time tennis authorities – white male organizations – attempt to control Serena. The French Tennis Federation which, since its inauguration, has never had a woman as its president, let alone a black woman

Her elongated buttocks were the object of both fascination and disgust in the eyes of European audiences – a metonym of otherness in terms of race and sexuality. Janell Hobson (2003) theorizes this sexist and racist gaze upon black women’s body as that of “sexual grotesquerie” (p. 88). Serena’s rear side has equally been subjected to the contemporary gaze of “sexual grotesquerie” (McKay & Johnson, 2008), perhaps more so than that of her sister Venus, due to the former’s fuller physique (especially in her mid and later careers).

(Baudu, 2020), is not an exception. What is it that “went too far” in the minds of those authorities? Her challenge of white superiority? Her deconstruction of gender stereotypes? Perhaps Serena represents both. Defiant against all these color-blind criticisms, Serena competed at the 2018 U.S. Open wearing “an asymmetrical black-and-brown dress with a tulle tutu-esque skirt” that we have never seen on the tennis court before (Messina, 2018). As such, for any critics, including Mark Knight, to argue that their criticism of Serena does not have anything to do with race would be to ignore the ongoing intersectional oppressions with which she has had to face, on and off the court, as one of the most well-known black female tennis players in the world.

Speaking Against Color-Blind Racism

Sara Ahmed’s discussion of “willful” resistance of social norms is useful for understanding how Serena speaks against color-blind racism. Ahmed (2014) postulates that, instead of perceiving being rebellious and willful as a sign of “the failure to comply with” certain social norms, we could reconsider willfulness as a critical optic through which to challenge and deconstruct those very norms (p. 1). Thus, the aforementioned criticism of Serena’s on-court behaviors made by the two Australian cartoonists and the other former white athlete alike, which are dismissive and infantilizing, suggests a lack of critical perspective through which to understand the potentials of her “willful” voices.

In July 2019, Serena published her first-person account of her reflections on the U.S. Open final in the previous year. In the article, featured in the magazine *Harper’s BAZAAR*, Serena reflects on how she was mistreated as a female player in the world of tennis and suggests that all of her past unpleasant experiences and her will to challenge them culminated in her particular dispute with the umpire in the U.S. Open final (Williams, 2019). Serena states:

This incident – though excruciating for us to endure – exemplified how thousands of women in every area of the workforce are treated every day.

We are not allowed to have emotions, we are not allowed to be passionate. We are told to sit down and be quiet, which frankly is just not something I'm okay with. It's shameful that our society penalizes women just for being themselves. (Williams, 2019)

As expected, this statement by Serena was quickly met with harsh criticism. Kate Halfpenny (2019) from the Australian newspaper *The New Daily* regards Serena's self-account as a "hypocritical stunt" to turn the tennis superstar herself into a victim. Halfpenny takes issue with Serena for discussing the structural gender discrimination and treating herself as a representative of victimized women. Halfpenny states:

Using the trope of women as downtrodden and powerless doesn't make you a flag bearer to revere. Instead, it undermines all our achievement and fabulousness. ... Serena, stop pretending you have the weight of the world on your shoulders, instead of at your feet. (Halfpenny, 2019)

Serena may not be a representative of all the women with diverse backgrounds. As Kristi Tredway (2020b) points out, however, Serena Williams is the symbol of one of a few black female tennis players who have struggled with and nonetheless challenged the white male dominated world of professional tennis. It is obvious that Serena's piece discusses some structural problems in sports and society using her first-person narrative. However, Halfpenny sees Serena's will as being wrongly directed when compared to other women who endeavor to counter sexism. Here, Serena as an individual, not structural sexism itself, is held responsible. Ahmed (2014) states that "[w]hen a structural problem becomes diagnosed in terms of the will, ... individuals become the cause of problems deemed their own" (p. 7). This way of handling a problem only once again endorses the discourse of "(post-) racism" and "(post-) feminism" narratives, while undermining the intersection of racism and sexism.

Serena wrote the essay in *Harper's BAZAAR* to address the structural problems that she has experienced. However, her story cannot be discerned without taking into consideration the intermingling of gender and race. It is clear to some of us that Serena penned the article to address the ongoing problem of color-blind feminism and white dominated world of tennis. Her concerns for other black women in tennis can be observed when she says, in her apology to Naomi Osaka, that "I am, was, and will always be happy for you and supportive of you. I would never, ever want the light to shine away from another female, specifically another black female athlete" (Williams, 2019). In fact, Naomi Osaka has subsequently become another black female tennis player with global influence. During the 2020 U.S. Open, Osaka expressed her compassion and support for the "Black Lives Matter" movement by wearing masks upon which the names of black victims of police or racist violence were printed in order "to make people start talking" (Bergeron, 2020).

For someone like Halfpenny, Serena's essay is self-serving and too personalized, hence appearing hypocritical. But I would argue that Serena's piece is private, and yet consequential to numerous circumstances of others. Some feminist writers such as Roxane Gay (2014) caution us that celebrity feminism will only function as a "gateway" to real feminist concerns. It is true that what a certain celebrity can say and do comes with its own limitations. The interpretation of their actions is ultimately up to the audience from all walks of life. For instance, some black feminists (*A Black Feminist Roundtable*, 2016) found Beyoncé's visual album *Lemonade* reassuring and reclaiming the agency of black women in the world of what Moya Bailey (2010) called "misogynoir." Janell Hobson (2018) also considers Beyoncé's performance of twerking in *Lemonade* as something that challenges the objectification of particular aspects of black women's bodies and reclaims their agency (p. 114). Serena made a cameo appearance in "Sorry," one of the songs from *Lemonade*, and twerked her much publicly objectified buttocks. In "Sorry," the two black female stars collaborated for the cause of celebrity feminism. At the same time,

others, such as bell hooks (2016), perceived *Lemonade* as falling short of challenging the commercialization and victimization of black womanhood. Although those debates are important in and of themselves, what I find most useful for our discussion of Serena is how her personal actions and words can be translated into relevant feminist critical issues in the context of cross-cultural communication. Janell Hobson (2017) expands this possibility and suggests that black celebrity feminism could speak to intersectional oppressions of gender and race which relates to the masses (p. 1000). The last section of this paper discusses the ways in which Serena's actions as a celebrity and the criticism against them in turn illustrate the ongoing oppression of black women in Australia.

Relevance of Serena Williams to the Politics of Black Women in Australia

Mark Knight defended himself by stating that "people are seeing things that are just not there" in response to an overwhelming accusation that his cartoon depiction of Serena was reminiscent of the so called "coon" caricature during the Jim-Crow era in the United States (Kwan, 2018). Knight may be ignorant of the racist history of the United States, but the color-blind criticism against Serena by the Australian cartoonist not only undermines the multiple oppressions facing Serena as a black woman athlete, but also perpetuates the existing racist assumptions towards black women in Australia. It should not be forgotten that Aboriginal women were consistently dehumanized and caricatured with various labelling by the colonial settlers in Australia. As Liz Conor (2016) points out, the settlers' "skin deep" understanding of Aboriginal women with name calling such as "gin," "lubra," and "black velvet," only perpetuated the subordinate status of colonized people, especially women (pp. 2-3). Furthermore, surviving aboriginal women in Australia have often been portrayed, as Cassandra Pybus (1991) points out, as the "Antipodean Pocahontas" (p. 170) – a metonym of good-mannered women of color for white

men in Australia.³

Even if Mark Knight may not be racist as he self-proclaims, his cartoon of Serena speaks volumes about the continuing legacy of white Australia's colonial distaste for a black woman who refuses to fit the persona of "Antipodean Pocahontas." In the cartoon, Naomi Osaka, Serena's opponent, is depicted with a long, straight-haired blonde pony-tail (which she did not have at the time of the U.S. Open) and slender stature. Despite Osaka being half black Haitian and half Japanese, Knight did not draw her with any archetypes of black or Asian people. In the background to Serena stamping on her broken racket out of anger, the male umpire asks Osaka to allow Serena to beat her. Standing straight, Osaka looks up at the face of an umpire without showing any sign of resistance. In a stark contrast to incorrigible Serena, Osaka is portrayed as a good-mannered woman of (de-)color who collaborates with the dominant narrative of the man in charge.

"People are seeing things that are just not there," Knight says in his

³ Pybus conceptualizes the term 'Antipodean Pocahontas' (1991) in reference to the historical legacy of Truganini who was born in Recherche Bay, a part of the current state of Tasmania in Australia (Pybus, 2020, p. 281). The discourse around Truganini as a black female figure who lived in the 1800s has had profound implications and significance in terms of understanding the containment of blackness within white-dominant society. Around the turn of the nineteenth century, Tasmanian Aborigines were subjected to British colonialism which entailed numerous forms of oppression including massacre and land thefts.

Reminiscent of Saartjie Baartman, whose body was posthumously exhibited in a museum for the gaze of white Europeans (Hobson, 2018, p. 115), the remains of Truganini were excavated and her skeletons were on display at the Tasmanian Museum and Art Gallery in Hobart between 1904 through 1947 (Kühnast, 2012, p. 3). In the popular imagination, Truganini has been perceived as the last fully-indigenous person of Tasmania, and her death in 1876 was presented to the colonial settlers and global communities as the end of the local Aboriginal culture, while the Aboriginal people continued to live in the state (Onsman, 2014, p. 20). Truganini was portrayed as a local interpreter-turned-assistant for the project led by colonialist missionary George Augustus Robinson to "relocate" Tasmanian Aboriginal people to resettlement camps (Pybus, 2000, pp. 12–13). She was perceived as a peaceful mediator who played a vital role in the "conciliation" between colonizer and colonized, hence functioning as an antidote to a further invocation of cruelty and violence involved in the colonial settlement.

defence (Kwan, 2018). Ironically enough, this statement can backfire and constitute a criticism of the continuing colonial legacy of white Australia. It is difficult to deny that white Australia still anachronistically sees black women as “Antipodean Pocahontas,” whereas such women of color “are just not there” anymore. Released in 1987, Tracey Moffatt’s now classic feminist film *Nice Coloured Girls*, and the critical reactions brought about by the film, have called into question the cultural amnesia around the perception of black women which white Australia dares to uphold. As a multilayered text, *Nice Coloured Girls* makes a critical commentary on the white Australian male continuing to uphold the images of Aboriginal women constructed from its colonial legacy. Juxtaposed to the male voiceover reading the historical diary of Lieutenant William Bradley that romanticizes white man’s encounter with black woman, the three contemporary Aboriginal women in urban settings “pick up” and take advantage of what they called “Captain” – white man – to serve their financial needs. *Nice Coloured Girls* sheds light on the agency that black women possess in their relationship to white men, while it also highlights the continuing socio-economic vulnerability and marginality of the world they inhabit (French, 2000).

Moffatt’s *Nice Coloured Girls* was provocative in that the female Aboriginal artist wanted to address the reality of black women in urban Australia which the country was not ready to see. Back in the late 1980s, Australia was still looking through a colonialist lens at black women as “nice colored girls,” but such women were “just not there” anymore. Fast-forward about three decades and some of mainstream Australian media, as represented by the case of Mark Knight’s depiction of Serena, still struggle to deal with black women who are incongruent with the persona of “nice colored girls.” Not only defiant of white man’s rules, Serena, unlike those urban Aboriginal women in *Nice Coloured Girls*, is a woman of commodity power. Arguably Serena is one of the most commercially successful black female athletes. All in all, Serena represents the realm of uniqueness against all the standards set within the white-male

dominant world of tennis (Tredway, 2020b). Serena is not a “nice colored girl” by any means. She is Serena Williams without having any precursor. She is the one who sets a new standard. This difficulty of categorizing her persona is in fact a threat to the white hegemony, precisely because the undefinable feature of identity is the power normally assigned to whiteness (Dyer, 1997). In order to eliminate the elusive quality of Serena, the tennis world and Australian media alike employ an array of means to stylize her identity, whether it be her gender, race, personality, body-type, or athletic ability. It is an attempt on the part of whiteness to identify itself as being “unmarked,” thereby regaining the elusive power of the white race.

Conclusions: Towards Connective Understandings

As we have discussed, the media discourses surrounding the tennis superstar Serena do not represent a rags-to-riches story as might be found in a number of Disney versions of fairy tales. If anything, Serena’s ascendance to her stardom often functions as a cautionary tale within the white-male dominated world of professional tennis. As the Australian media reactions to Serena’s on-court behavior in the 2018 U.S. Open final match expose, despite all of her incomparable achievements, she is still perceived as a black sheep against which the ideal model of (white-)tennis female player is defined. However, Serena continues to be othered not always through overt racist and sexist remarks but through color-blind criticisms.

Serena has been looked at and policed. If anything, she is often relegated to the realm of excess (McKay & Johnson, 2008). And yet, she has refused to be ashamed of her excess. She has, in turn, embraced and owned it with confidence. Serena’s story is too loud and too richly layered to be told within the pre-existing vernacular of female professional tennis player. When Serena voiced her dissent of the judgement by Carlos Ramos at the U.S. Open final, she might not necessarily have dreamed of her action to be implicated in the discussion topics covered in this paper, ranging from contemporary politics of

black women in tennis, to persistent racism and sexism in the mainstream Australian media. Similar to the idea of, what Minoru Hokari (2007) calls, “connective studies,” which draws critical connection among diverse subject matters, histories, and nations, this paper has detailed the ways in which Serena’s struggles and courage as a top black female player inform us of the color-blind racism that contemporary Australia needs to face. Such dynamic connections could not be made if it were not for Serena’s status as a superstar and celebrity athlete.

This, of course, does not mean that the connective analysis presented in this paper undermines the specificities of the intersectional oppressions of gender and race in the context of Australia or elsewhere. As an academic who lectures at a regional university in Australia, however, I find it useful for me and my students to critically examine both the global and local implications of racial injustice presented by an enormously influential black woman such as Serena. It is then rather counterintuitive to suggest that Serena’s celebrity black feminism is inconsequential to many of us. She has been, and will be, a black woman of influence so long as she continues to be one of the greatest female tennis players to step on a tennis court. The social discourses about and against her can be pedagogical for us if we as her audience could apply and translate them to our own contexts for the purpose of critically examining the relations between racism and sexism.

The final chapter of her career as a professional tennis player remains to be written, despite her announcement of career hiatus at the end of 2022. Perhaps a life story such as hers may not have any conventional ending. In the meantime, Serena continues to smash a multifaceted glass ceiling imposed upon black female tennis players and help us understand their struggles and challenges from a cross-cultural perspective.

References

- A black feminist roundtable on bell hooks, Beyoncé, and "Moving beyond Pain." (2016, May 11). Feministing. <http://feministing.com/2016/05/11/a-feminist-roundtable-on-bell-hooks-beyonce-and-moving-beyond-pain/>
- Ahmed, S. (2014). *Willful subjects*. Duke University Press.
- Bailey, M. (2010, March 14). *They aren't talking about me*. Crunk Feminist Collective. <http://www.crunkfeministcollective.com/2010/03/14/>
- Baudu, J. (2020, March 5). *FFT: Role, history, president, all you need to know about the FFT*. Tennis Majors. <https://www.tennismajors.com/news/roland-garros-news/role-history-president-all-you-need-to-know-about-the-fft-tennis-majors-80942.html>
- Bergeron, E. (2020, December 16). *How putting on a mask raised Naomi Osaka's voice*. The New York Times. <https://www.nytimes.com/2020/12/16/sports/tennis/naomi-osaka-protests-open.html>
- Bonilla-Silva, E. (2003). *Racism without racists: Color-blind racism and the persistence of racial inequality in the United States*. Rowman & Littlefield.
- Clemente, D. (2018, September 5). *Serena Williams' catsuit controversy evokes the battle over women wearing shorts*. The Conversation. <http://theconversation.com/serena-williams-catsuit-controversy-evokes-the-battle-over-women-wearing-shorts-102537>
- Collins, P. H. (2000). *Black feminist thought: Knowledge, consciousness, and the politics of empowerment*. Routledge.
- Conor, L. (2016). *Skin deep: Settler impressions of aboriginal women*. The University of Western Australia Publishing.
- Crenshaw, K. (1989). Demarginalizing the intersection of race and sex: A black feminist critique of antidiscrimination doctrine, feminist theory and antiracist politics. *University of Chicago Legal Forum*, 139, 139–168.
- Crenshaw, K. (1991). Mapping the margins: Intersectionality, identity politics, and violence against women of color. *Stanford Law Review*, 43(6), 1241–1299.
- Davison, H. (2018, September 11). "Repugnant, racist": News corp cartoon on Serena Williams condemned. The Guardian. <https://www.theguardian.com/media/2018/sep/11/repugnant-racist-news-corp-cartoon-serena-williams-mark-knight>
- Douglas, D. D. (2012). Venus, Serena, and the inconspicuous consumption of blackness: A commentary on surveillance, race talk, and new racism(s). *Journal of Black Studies*, 43(2), 127–145.
- Dyer, R. (1997). *White*. Routledge.
- French, L. (2000). An analysis of *Nice Coloured Girls*. *Sense of Cinema*, 5, <http://sensesofcinema.com/2000/australian-cinema-5/nice/>
- Gay, R. (2014, October 10). *Emma Watson? Jennifer Lawrence? These aren't the feminists you're looking for*. The Guardian. <https://www.theguardian.com/commentisfree/2014/oct/10/sp-jennifer-lawrence-emma-watson-feminists-celebrity>
- Halfpenny, K. (2019, July 10). *Serena Williams, your Harper's Bazaar stunt is a double fault*. The New Daily. <https://thenewdaily.com.au/entertainment/celebrity/2019/07/10/serena->

- williams-harpers-bazaar/
- Healy, J. (2018, September 9). *Serena Williams's US Open final breakdown blow-by-blow*. ABC News. <https://www.abc.net.au/news/2018-09-09/serena-williams-us-open-breakdown-blow-by-blow/10218962>
- Herald Sun backs Mark Knight's cartoon on Serena Williams*. (2018, September 12). Herald Sun. <https://www.heraldsun.com.au/news/victoria/herald-sun-backs-mark-knights-cartoon-on-serena-williams/news-story/30c877e3937a510d64609d89ac521d9f>
- Hobson, J. (2003). The 'batty' politic: Toward an aesthetic of the black female body. *Hypatia* 18(4), 85–105.
- Hobson, J. (2017). Celebrity feminism: More than a gateway. *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 42(4), 999–1007.
- Hobson, J. (2018). Remnants of Venus: Signifying black beauty and sexuality. *WSQ: Women's Studies Quarterly*, 46(1–2), 105–120.
- Hokari, M. (2007). Mediating on connective studies: Indigenous histories of Australia and Japan in the era of globalisation. In Tada, M. & Dale, L. (Eds.), *On the western edge: Comparisons of Japan and Australia* (pp. 15–22). Networks Books.
- hooks, b. (2016, May 9). *Moving beyond pain*. The bell hooks Institute. <http://www.bellhooksinstitute.com/blog/2016/5/9/moving-beyond-pain>
- Joseph, R. L. (2009). "Tyra Banks is fat": Reading (post-)racism and (post-)feminism in the new millennium. *Critical Studies in Media Communication*, 26(3), 237–254.
- Kelner, M. & Lutz, T. (2018, August 30). *US Open apologises after Alizé Cornet penalised for briefly removing shirt*. The Guardian. <https://www.theguardian.com/sport/2018/aug/29/alize-cornet-penalty-shirt-removal-us-open-tennis-heat>
- Kühnast A. (2012). The utilization of Truganini's human remains in colonial Tasmania. *History of Anthropology Newsletter*, 39(1), 3–11.
- Kwan, B. (2018, September 12). *Serena Williams cartoon criticised for exploiting "angry black woman" stereotype*. SBS News. <https://www.sbs.com.au/news/serena-williams-cartoon-criticised-for-exploiting-angry-black-woman-stereotype>
- Litchfield, C., Kavanagh, E., Osborne, J., Jones, I. (2018). Social media and the politics of gender, race and identity: The case of Serena Williams. *European Journal for Sport and Society*, 15(2), 154–170.
- Martinelli, M. R. (2018, September 8). *Serena Williams explains why she felt U.S. Open umpire made "sexist remark" during final*. For The Win. <https://ftw.usatoday.com/2018/09/serena-williams-naomi-osaka-us-open-final-sexist-remark-umpire-argument-press-conference-video>
- McKay, J. & Johnson, H. (2008). Pornographic eroticism and sexual grotesquerie in representations of African American sportswomen. *Social Identities*, 14(4), 491–504.
- Messina, V. (2018, August 28). *Serena Williams hit back at her bodysuit ban by wearing – what else? – a badass tutu*. Popsugar. Fitness.. <https://www.popsugar.com/fitness/Serena-Williams-Tennis-Tutu-Outfit-2018-US-Open-45207784>
- Nicholson, P. (2009, September 15). Untitled cartoon (in the section under 'Commentary').

- The Australian*, p. 12.
- Onsman, A. (2014). *How Tasmanian aboriginals have been portrayed by white Australians: A history of racial and cultural delegitimization and the case of Truganini's necklace*. The Edwin Mellen Press.
- Oxford University Press. (n. d.). Tantrum. In *English Oxford Living Dictionaries*. Retrieved December 10, 2018, from <https://en.oxforddictionaries.com/definition/tantrum>
- Passa, D. (2008). What happened to?: Evonne Goolagong Cawley – The elegant lady from down under. *Tennis Life*. March/April, 22–23.
- Pearce, L. (2015). Wimbledon champ sets up foundations for life. *The Age*. July 17.
- Pybus, C. (1991). *Community of thieves*. Minerva.
- Pybus, C. (2020). *Truganini: Journey through the apocalypse*. Allen & Unwin.
- Rottenberg, C. (2014). The rise of neoliberal feminism. *Cultural Studies*, 28(3), 418–437.
- Schultz, J. (2005). Reading the catsuit: Serena Williams and the production of blackness at the 2002 U.S. Open. *Journal of Sport & Social Issues*, 29(3), 338–357.
- Spencer, N. E. (2004). Sister act VI: Venus and Serena Williams at Indian Wells: “Sincere fictions” and white racism. *Journal of Sports & Social Issues*, 28(2), 115–135.
- Taylor, P. (2018, September 9). *Margaret Court backs US Open umpire amid Serena Williams charting drama*. The Australian. <https://www.theaustralian.com.au/sport/tennis/margaret-court-backs-us-open-umpire-amid-serena-williams-cheating-drama/news-story/4bd46f2a375924170c6d1376d9c84fac>
- Tredway, K. (2018). The performance of blackness and femininity in postfeminist times: Visualising Serena Williams within the context of corporate globalisation. In Toffoletti, K. & Thorpe, H. & Francombe-Webb, J. (Eds.), *New sporting femininities: Embodied politics in postfeminist times* (pp. 63–85). Springer.
- Tredway, K. (2020a). Serena Williams and (the perception of) violence: Intersectionality, the performance of blackness, and women’s professional tennis. *Ethnic and Racial Studies*, 43(9), 1563–1580.
- Tredway, K. (2020b). *Social activism in women’s tennis: Generations of politics and culture change*. Routledge.
- Williams, S. (2017, July 31). *Serena Williams: How black women can close the pay gap*. Fortune. <http://fortune.com/2017/07/31/serena-williams-black-women-equal-pay/>
- Williams, S. (2019, July 9). untitled, *Harper's Bazaar*. <https://www.harpersbazaar.com/culture/features/a28209579/serena-williams-us-open-2018-essay/>

Abstract

オーストラリアのメディアにおけるセリーナ・ウィリアムズへの人種差別と性差別：セレブリティ・フェミニズムと黒人女性の関係性を異文化間の文脈から理解するために

菅沼勝彦

2018年全米オープンテニス選手権の決勝に出場したセリーナ・ウィリアムズはコート上での自身による言動が不適切とみなされ多くの議論を呼んだ。一部オーストラリアのメディアによる関連報道は同国における人種差別問題を浮き彫りにした形となった。本稿は、人種とは無関係として展開されたセリーナに対する当時の批判言説を、オーストラリアにおける歴史的な文脈と現状の双方を鑑みながら分析する。ジェンダーと人種の交差性に注目し、プロテニス界とそれに関するトランス・ナショナルなメディア空間において、尚も黒人女性であるセリーナの身体が監視と性的な他者化の対象とされることを論じる。また、セレブリティ・フェミニズムの視座を異文化間の文脈に応用することで、セリーナに関する言説分析がオーストラリアにおいて現在も続く黒人女性に対する偏見と差別の諸問題に交差しながら可能となる様についても論じる。

キーワード：

ジェンダー、人種、セレブリティ、テニス、セリーナ・ウィリアムズ

Research Paper

Reframing Sexual Minority Issues in China: Analysis from a Discrimination Theory Perspective

ZHAO Yingying

Prior studies have used terminologies such as *tongzhi* (同志)¹ (Chou, 2001; Coleman & Chou, 2013; Guo, 2018a, 2018b; Kong, 2020), LGBT (Hildebrandt, 2012; Parkin, 2018; Wei & Yan, 2021), LGBTI (United Nations Development Programme, 2016), LGBTQ (Chia, 2019), queer (Engebretsen, 2015; Huang & Brouwer, 2018a, 2018b; Liu, 2010; Schroeder, 2015), and LGB (Hu & Wang, 2013) to refer to people whose sexual orientation and gender identity (SOGI) are at odds with what is perceived to be the gender norm in China. *Tongzhi* largely refers to homosexuality, whereas the terms LGB, LGBT, and LGBTQ exclude some minority groups, and “queer” is not widely used in Chinese society. Given the inconsistencies in these terms, this study adopted the term “sexual minority people” to refer to this group, and the terms used in previous studies are retained when quoted here.

China appears friendly to sexual minority people, for instance, as implied in the removal of homosexuality in the Chinese Classification of Mental Disorders (CCMD-3, third edition) in 2001. Moreover, China has accepted the

¹ *Tongzhi* refers to contemporary Chinese lesbians, bisexuals, and gay people. It used to mean “comrade” in China, referring to the revolutionaries who shared a comradeship. The term was first adopted by Chinese people in Republican China and then adopted by both Communist/nationalist revolutions. After 1949, *tongzhi* (comrade) became a friendly and politically correct term by which to address everyone in China. Then, after 1978, the term lost its popularity and was replaced by personal names or titles. The term was first appropriated by an activist for the first Lesbian and Gay Film Festival in Hong Kong in 1989 for employing an indigenous representation of same-sex eroticism (Coleman & Chou, 2013).

United Nations Human Rights Council's recommendation to "Establish anti-discrimination laws and regulations to ensure that lesbian, gay, bisexual and transgender persons enjoy equal treatment, including at schools and in the workplace" (United Nations General Assembly, 2013). Furthermore, various support organizations for sexual minority people have been established in society to assist this group, conduct social surveys (United Nations Development Program, 2016; Beijing LGBT Center, 2017), and offer medical courses. Thus, sexual minority issues should have gradually entered the realm of public discourse and gained more attention.

However, they are still discussed virtually underground in society, and sexual minority-related words and objects remain "taboo." For example, on July 6, 2021, the WeChat accounts of sexual minority organizations in many universities in China were instantaneously blocked without a plausible reason.² Another example is that of two female students from the famous Tsinghua University in China, who were disciplined on July 11, 2022 for distributing rainbow flags on campus.³ In other words, there remains an "invisible oppression" for sexual minority people in China. Where does this "invisible oppression" come from? Why does it persist?

Prior studies have examined the challenges sexual minority individuals face in the Chinese context, the tactics they have taken to address such challenges, and how they have challenged and affected the Western model.⁴ One thing these individuals have in common is that they view traditional

² "Chinese gay group WeChat account was blocked, sparking protest: We are all 'unnamed public accounts' -BBC News," <https://www.breakinglatest.news/news/chinese-gay-group-wechat-account-was-blocked-sparking-protest-we-are-all-unnamed-public-accounts-bbc-news/> (Accessed on 1 July 2022)

³ "Chinese students vow to fight penalty for distributing rainbow flags at Tsinghua University," <https://www.scmp.com/news/china/politics/article/3185842/chinese-students-vow-fight-penalty-distributing-rainbow-flags> (Accessed on 1 July 2022)

⁴ The "Western model" refers to the transnational, hegemonic ideology on queerness that is centered on specific articulations of sexual rights and liberation rhetoric. This ideology promotes a particular form of identity politics based on individualism and coming-out narratives and features public rituals such as Pride celebrations in urban space (Engelbreten, 2015, p. 90).

culture and legal policies, people who are prejudiced against sexual minorities, and the Western model as factors that significantly impact sexual minority people. These appear to be essential sources of oppression, but are these the only ones? How do these static forms of repressions manage to have a lasting effect? Is there a solution to this? How does the West regard sexual minority issues as “everyone’s problem?” Can China do the same?

To answer these questions, previous research on sexual minority people in China was first compiled to illustrate the characteristics of earlier studies. Next, sexual minority human rights-related papers were examined, and the difficulties of identifying sexual minority issues in China were clarified from a human rights perspective. Finally, Sato’s (2005) theory of discrimination was applied to analyze the official discourse in China and shed light on how this “invisible oppression” is created and perpetuated.

By reframing sexual minority concerns in China, we may develop new and more acceptable methods to raise sexual minority issues in the context of a culture in which human rights rhetoric plays little to no positive role. In addition, the public will be able to realize their crucial role in sexual minority concerns, thus contributing to the development of a more inclusive society. This research also aimed to remind the general public that there has always been an alternative to unwittingly enabling the establishment of environments that exclude sexual minorities. Whether the notion of homosexuality and gender transition originated in the West or has been in China since antiquity, respect for human variety has no bounds.

Prior Studies on Sexual Minority Issues in China

Prior studies can be classified according to two main viewpoints. One is the idea of “A different China from the West,” which highlights that the Chinese social background and culture are distinct from that of the Western⁵ world and

⁵ The term “Western” refers to the dominating English-language discourse and research from Western Europe and North America.

sexual minority problems should be examined within China's context (Chia, 2019; Chou, 2001; Guo, 2018a, 2018b; Parkin, 2018; Wei & Yan, 2021). Another viewpoint is "China in global discourse," which argues that sexual minority people do not develop independently of the world, nor do they represent the wholesale assimilation of Western theories and models. The purpose is therefore to examine the interaction between the dominant queer studies and Chinese subjects (Engelbrechtsen, 2015; Huang, 2015; Huang & Brouwer, 2018a, 2018b; Kong, 2020; Liu, 2010; Schroeder & Schroeder, 2015). In addition, prior studies have analyzed sexual minority issues in China mainly from three perspectives as discussed below.

From a Sociocultural Perspective

According to Chou (2001, p. 34), the family kinship system and filial piety are the lenses through which tongzhi should be viewed in China. The traditional Chinese view of tongzhi is that all people should be placed first in the family and the community, rather than be treated as independent and freedom-seeking individuals. Hence, the primary concern of tongzhi is these individuals' parents—not state oppression, religious fundamentalism, or employment discrimination. Moreover, aside from accepting that their child is tongzhi, parents are also concerned about the shame of having a deviant child who does not marry. The case of tongzhi offending their parents in a society where filial piety is highly prized is terrible. Thus, the ideal approach for tongzhi to tell their parents about their sexual orientation, without hurting their relationships or explicitly addressing homosexuality, is not to "come out" but to "come home." Coming home means a negotiated process of incorporating one's sexuality into the family-kin network, through establishing a same-sex relationship in terms of family-kin categories as opposed to conceptually distinguishing same-sex eroticism (Chou, 2001, p. 36).

However, Huang and Brouwer (2018b) highlight the limitations of both the coming-out and coming-home models. Specifically, the cultural principles

of *pulu* (“path-paving”) and *suzhi* (“quality”) are preconditions in China, which means that a queer individual should be a “successful” member of society and an “outstanding” daughter/son before coming out. In addition, the coming-home model leaves both the family and national culture under-investigated as a means of oppression. Thus, besides coming out and coming home, Chinese queer people prefer a coming-with approach, such as *xinghun*,⁶ to blend family affiliation and sexual identity. This third route is neither complete rejection nor complete submission to the family (Huang and Brouwer, 2018b). This study questioned the meaning of queerness and challenged the binary between family and sexuality in dominant queer discourse from the viewpoint of “China in global discourse.”

In summary, Chinese society, culture, and parents have a major influence on the lives of sexual minority people. However, they actively seek alternatives that do not conflict with this societal tradition.

From a Social Movement Perspective

Observing sexual minority issues in China through the lens of social movements is a typical perspective. Researchers have examined the obstacles that stand in the way of sexual minority movements, and the tactics used by sexual minorities from the perspective of “A different China from the West,” and evaluated such tactics from the “China in global discourse” perspective.

Factors hindering sexual minority social movements have been considered mainly from three directions. First, on the legal and political front, the tongzhi movement’s desperate desire for community space was stifled by the Communist Party of China’s (CPC) implementation of a repressive authoritarian structure (Guo, 2018a). In addition, the China Charity Law (2016)

⁶ Xinghun refers to a formal marriage in which lesbians and gays marry to meet the expectations of their families and society but continue to date the same-sex partner of their choice (Chia, 2019). Xinghun provides evidence of a minimum commitment to the public performance of a hetero-marriage while simultaneously allowing a queer family structure with a same-sex partner (Huang and Brouwer, 2018a).

and Foreign NGO Administrative Law (2016) have tightened regulations on domestic and foreign nongovernmental organizations (NGOs), as well as the general operating environment. The Chinese Charity Law (2016), which controls domestic civil society groups, does not include LGBTQ-related activities within the scope of “public interest” activities. Hence, it is difficult for LGBTQ rights organizations to achieve official status through registration (Chia, 2019). Moreover, the Foreign NGO Administrative Law (2016) does not allow LGBTQ rights activities, restricting the possibility of relationships between foreign NGOs and Chinese LGBTQ groups. As such, LGBTQ organizations are restricted by these laws from operating openly, raising funds, hiring qualified personnel, and providing critical services on LGBTQ issues. The invisibility of the LGBTQ experience in the legal and regulatory environment, the absence of LGBTQ-inclusive anti-discrimination statutes, and the constraints on equality rights in the Chinese Constitution make it difficult for LGBTQ rights attorneys and activists to bring legal claims (Chia, 2019). Hildebrandt (2012) also contends that the form of international funding—from foreign sources but channeled via the Chinese government—and local political constraints, eventually prevent the development of optimal transnational links of LGBT movements.

Second, on the ideological front, there has been a long-standing misconception that homo/bisexuality is imported from the West, and traditional Chinese culture is homophobic and anti-sexual (Coleman & Chou, 2013). As Western ideas and values have become increasingly suspect in recent years, the operating environment has become more challenging for Chinese NGOs and universities with extensive international connections (Chia, 2019). Furthermore, Guo (2018b) argues that the Chinese government utilizes the discourses of “moral ethics,” which refer to “traditional heteronormative” culture and patriotism, to eliminate tongzhi organizations institutionally. Guo (2018a) also describes that neighbors of sexual minority organizations view the existence of the organization as harmful to their children and thus want to

drive the organization away.

Third, in terms of social movement strategies, when publicly advocating for sexual minority rights, according to Wei and Yan (2021), parents of sexual minority people produce a familial model of LGBT activism in China, focusing on family bonds rather than sexuality and transitioning from oppositional identity politics among the queer community to cooperative civic engagement with the larger society.

Speaking of activists' strategies, Chia (2019) notes that activists in China not only evoke messages of love, equality, and inclusion among individuals and within communities, but also demonstrate loyalty to family and country while engaging in LGBTQ visibility activities in China. This contrasts with the Western world, where the notion that "love is love" is promoted, and that loyalty and consecration are never questioned. They must also learn how to navigate the ever-changing social, media, and political conditions to promote visibility and organize communities without violating censorship or public safety (Chia, 2019). Guo (2018b) argues that the assimilation strategy that the tongzhi movement used as a survival strategy has unintentionally reinforced the CPC's hegemonic regime and social governance.

By contrast, researchers have also examined how these strategies affect the Western model. Engebretsen (2015, p. 106) affirms the political nature of the Chinese queer movement. Even though Chinese queer activism does not make aggressive political statements, it is clearly political in terms of their public visibility and forms of participation in activities (Engebretsen (2015, p. 106); neither should the "nomadic" and "guerrilla" strategies of Chinese queer activists be read simply as a necessary response to the local political situation or as an act of assimilation in a country that demonstrates a lack of agency, initiative, and power. The grassroots queer activists show how they challenge rigid models that assume how queer justice movements should act to bring about systemic change toward equality, freedom, and inclusion (Engebretsen 2015, p. 107). Furthermore, Schroeder (2015) recognizes the value of the

Chinese queer movements from a global perspective, stating that it challenges, not only the rigid notion that queer resistance anywhere must be open, antagonistic, and purposeful, but also the perspective that only resistance is worthy of documentation.

Although China has few legal policies that directly restrict or ban sexual minority movements, the preceding section demonstrates that the requirements and restrictions on social movements, organizations, and patriotism impact and determine the sexual minority movements in China. Under such conditions, activists, and their parents vigorously investigate viable tactics. An analysis of how these techniques challenge the authority of the Western paradigm is also provided.

From the Perspective of Gender Identity

Factors that influence the emergence and development of sexual minority identity in China are discussed as follows: Strong beliefs in filial piety make it harder for individuals to recognize and accept their sexual orientation. Perceived parental attitudes toward marriage and individual endorsement of filial piety ideals affect LGBs' negative sentiments and thoughts (Hu & Wang, 2013). For collective identities, tongzhi identities and communities were formed in the 1990s because of China's opening-up policy and the transnational tongzhi culture that came from Hong Kong and Taiwan. However, the public health paradigm still limits them (Kong, 2020).

In addition, the uniqueness of the identity category "T" in China is noticed. T, short for "tomboy," represents the more masculine partner in a female same-sex couple. T blurs the distinction between butch and transgender identities and occupies a social position that accommodates both same-sex desire and gender variance (Huang, 2015, p. 114). Huang (2015) argues that by linking T with queer and transgender scholarship, we can take a step toward de-centering the Western dominance in queer studies, and this might help inject new ways of imagining into transgender scholarship. Meanwhile, the ongoing

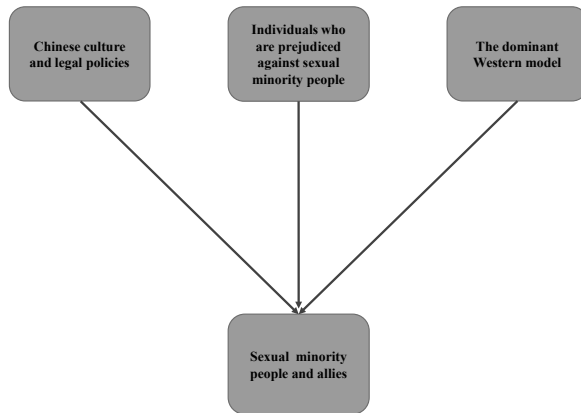


Figure 1 Elements that Impact Sexual Minority People and Allies in China

local practices of gender variance are threatened by the West, as Chinese lesbian culture becomes more structured and increasingly informed by Western discourse (Huang, 2015).

In summary, the previous studies demonstrate that an investigation of sexual minority problems in China cannot be divorced from the specific Chinese context or the worldwide queer studies' discourse. The struggle for survival and the strategies used by sexual minority people and allies within Chinese content are revealed. Their struggles are mainly impacted by Chinese culture and legal policies, prejudiced people, and the dominant Western model (see Figure 1).

However, two points have been overlooked in previous studies. One is that the public has mostly been ignored, especially those who do not belong to these categories (e.g., those who are not interested in sexual minority issues, and those who are not involved in the development and implementation of laws and policies). Hence, members of the public become mere "bystanders," and sexual minority issues are positioned as "other people's issues" that do not concern them. This might perpetuate oppression in society.

Meanwhile, the reasons for the oppression in society have not been

thoughtfully considered. Neglecting to question the causes of persistent oppression and focusing on their situations and strategies objectify sexual minority people. In other words, such neglect risks making the issues of sexual minorities appear to stem from their own “exceptionalism,” and this might lead to their further marginalization.

As such, there is still a lack of attention on the ways to transform sexual minority issues from being “other people’s issues” to “everyone’s issues” and the reasons for the continued oppression that sexual minorities face in contemporary China. Moreover, as noted above, the development of sexual minority issues in China cannot be separated from the influence of Western discourse. Therefore, it is necessary to examine how sexual minority issues are positioned in the Western context and whether China can draw on this way of thinking.

Sexual Minority Issues in Human Rights Discourses in the West

As the vulnerability of the LGBTIQ became more apparent, the movement to safeguard their rights intensified through the inclusion of sexual orientation and gender identity in the debate on human rights (Sauer & Podhora, 2013). Previous studies in the West have examined the need to discuss sexual minority concerns in human rights. Endsjø (2005) argues for the universality of human rights. The rights of sexual minority people not being treated as human rights suggests a relativism in the concept of human rights, because after it is established that certain groups do not deserve human rights protection owing to religious or cultural biases, the rights of other groups might be excluded based on the discrimination of certain faiths and cultures.

In addition, Tirado Chase (2016) argues for the importance of human rights and optimum development. Chase (2016) identifies that the incorporation of sexual orientation and gender identity-related rights is how the concept of human rights has grown and been redefined. Such re-imaginings may provide the opportunity to reconceive human rights in a way that reflects the type of

bottom-up demands that maintain the relevance of human rights. Moreover, this development helps reflect the heterogeneous processes that shape human identity and make them relevant to different people and cultures worldwide. Linking the human rights framework to sexual minority issues is beneficial to the development of the former and thus to all people.

The Yogyakarta Principles, which was published after an international meeting of human rights groups in Yogyakarta, Indonesia, in November 2006, is one of the outcomes of linking the human rights framework to sexual minority people. These principles address a broad range of human rights standards and their application to issues of sexual orientation and gender identity. They affirm the primary obligation of states to implement human rights (The Yogyakarta Principles, 2007).

However, the incorporation of notions such as SOGI in human rights discussions has been reflected upon and criticized. For instance, adopting exclusively gender-neutral terms while ensuring that they can be applied broadly is at the cost of not mentioning the circumstances and issues of women. Therefore, the document weakens its ability to address the problems faced by lesbians in many countries (O'Flaherty & Fisher, 2008, p. 236). Additionally, the introduction of SOGI into human rights discourse can be interpreted as installing a distinct gender and sexuality matrix, but the definitions of SOGI in the Yogyakarta Principles facilitate the contestation of these concepts. Therefore, the prevailing interpretation of terms about gender and sexuality should be constantly challenged (Waites, 2009). Similarly, Sally Hines (2009) contends that the United Kingdom's Gender Recognition Act of 2004 reconstructs gender, excluding certain transgender people. Hines (2009) believes that material queer epistemology and politics are better for advocating transgender rights and citizenship. Hines (2009, p.100) suggests that a pathway to diversity depends upon continued moves beyond universalism, and a stronger recognition of the specific subjectivities and social experiences of non-normative and marginalized subjects within human rights and citizenship

discourse, and law and policy. In transgender litigation, instead of focusing on the interpretation of the term transgender and the distinction between transgender and cisgender, the humanity and diversity of transgender people should be emphasized, and their lived experiences should be described (Blake, 2018).

In conclusion, Western studies on sexual minorities' human rights are characterized as follows: First is the acceptance of the universality of sexual minority rights. Second, in supporting their human rights, sexual orientation and gender identity are initially offered to include specific sexual minority individuals; then, the two concepts are continually examined, thereby accommodating more people and ensuring human rights for a broader group. Third, sexual minority human rights advocacy is not only for sexual minority individuals but also for the belief that it can benefit the public.

It is not that sexual minorities no longer face struggles in Western countries, but that human rights can be one of the important perspectives for raising the issue of sexual minorities. The following section briefly outlines the characteristics of human rights in China, which provides the basis for arguing that the Western view of sexual minorities' human rights cannot be applied to China.

Human Rights in China

China enshrined human rights in its constitution in 2004 and the characteristics of Chinese human rights (Peerenboom, 2005; Tsuchiya, 1996) are briefly reviewed as follows:

First, human rights are subject to the limits of sovereignty. International human rights, the ability of individuals to make claims under these rights, and that of the international community to influence the behavior of China are limited by the concept of sovereignty (Peerenboom, 2005). China partially allows international "interference" in human rights issues when violations of international legal norms or international criminal acts occur (Tsuchiya, 1996,

p. 166). However, China opposes criticism from outside the country regarding human rights issues and treats such criticisms as interference of its internal affairs. This state dominance effectively blocks the “universality” of human rights within China’s borders (Tsuchiya, 1996). The view of sovereignty and human rights has not changed (Wu, 2010).

Second, the right to survival and development is given the highest priority and importance because of China’s vast population and degree of economic growth (Peerenboom, 2005; Tsuchiya, 1996). However, the emphasis on survival is not linked to respect for other human rights but rather, is an argument for the suppression and restriction of personal, political, and spiritual human rights. In other words, it is imperative to prioritize collective survival and a “stable society and solidarity,” and the assertion or exercise of individual human rights in a manner or content that would upset such priorities is unacceptable (Tsuchiya, 1996). Meanwhile, China refers to the right to development as a collective right, equates it with the “right of the state to development,” and insists upon the development of the state, society, and the collective as a priority.

Third, national, social, and collective interests are prioritized, such that rights should not overwhelm obligations and responsibilities to others. In socialist China, the interests of the individual and those of the state, society, and the collective are inherently aligned. Thus, the defense of the state, community, and collective claims is in the individual’s interest (Tsuchiya, 1996).

In short, China’s human rights thesis is structured in such a way that the following take precedence: sovereignty, its interpretation of human rights, the right to development, and the collective interest. Criticism of human rights in China, predominantly civil and political rights, comes from Western countries, led by the United States. Peerenboom (2005) highlights that Chinese human rights have brought tremendous economic growth and better living conditions for its people. It is necessary to point out that although China’s score on civil and political rights is significantly lower than the average of low- and middle-

income countries, it performs better than the average country in its income category on most primary indicators. This lends credence to the argument that China is held to a double standard.

The purpose of this study was not to discuss the advantages and disadvantages of human rights in China but to emphasize the ramifications of this human rights philosophy for sexual minority concerns. A bottom-up approach to maintaining human rights (Chase, 2016) is inconsistent with China's human rights doctrine, and sexual minority issues in China do not appear to be of collective concern. Thus, it may be challenging to use the concept of the universality of human rights to resonate with the state and the public with respect to sexual minority issues and to advocate for their rights.

Is there another dynamic theory that can reframe sexual minority issues and involve the public to rethink sexual minority issues in China? This research conducted a case study by applying Sato's (2005) view of discrimination to reframe the sexual minority issues in China (see Figure 2). The discrimination theory of Sato (2005) is described in detail in the next section. By analyzing the official discourse mentioned below, this article provides readers with a visual representation of how the "invisible oppression" of sexual minorities in China has been formed and why it persists.

Theory of Discrimination

Various discriminatory concerns that have been examined separately share a commonality (Sato, 2005, p.9). Sato (2005) places it on the "discriminatory side" and attempted to develop a theory that emphasizes the "discriminatory side" and does not rely on particular discrimination concerns. In addition, prejudice theory may be the most convictive direct explanation for discriminatory behavior. However, prejudice theory has several problems. For example, the deviation of issues, reproduction of prejudice, objectification of the discriminated, and the inability to discover the involvement of "the accomplices" (Sato, 2005, p. 158-162).

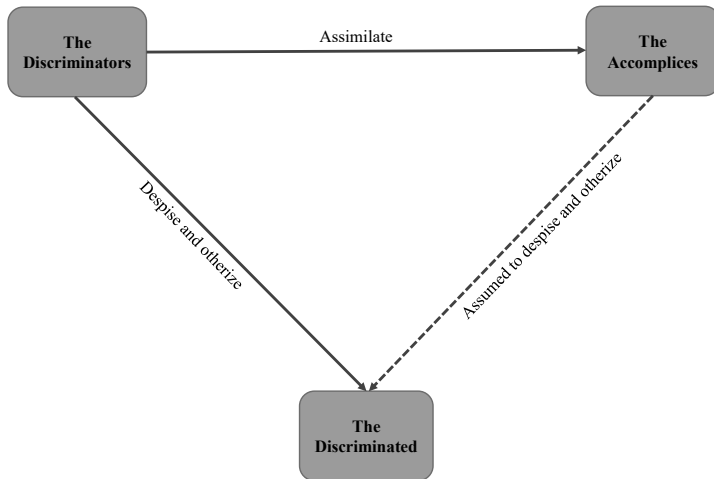


Figure 2 Three-party Relationship Model of Discriminatory Behavior

Source: Sato, 2005, p. 67.

Based on the above, Sato (2005) proposed a three-party relationship model of discriminatory behavior. This theory has been used to analyze discriminatory phrases in novels (Sato, 2005), politician statements (Sato, 2005, 2019), and to explain the formation of men's collective identity (Ueno, 2010, p.34).

According to Sato (2005), discrimination occurs when discriminators impose specific standards to assimilate certain individuals (the accomplices) while otherizing and disregarding others (the discriminated; Sato, 2005, p. 65).

Interest- and assimilation-driven discrimination are two further classifications of discrimination. Interest-based discrimination is a form of discrimination whose primary purpose is othering and contempt. Its premise is that a direct interest exists in advance between the discriminator and particular individuals. Assimilation-driven discrimination is discrimination in which assimilation is the primary goal. Its purpose is to enforce certain rules and legitimize claims. Through assimilation, [we] (われわれ) can be formed, and people can feel the benefits of being [we]. The benefits are maintaining a relationship with a particular person, bringing them closer together,

strengthening ties, and enforcing certain rules or legitimizing certain claims (Sato, 2005, pp. 72–76).

Assimilation-driven discrimination is further divided into aggressive exclusion and symbolic exclusion. Aggressive exclusion with the primary intent of assimilation is not aimed at the act itself, such as physical violence or direct derogatory language or behavior, but at the demonstration (assimilation) of such conduct to a third party (the accomplices). Symbolic exclusion occurs when the action toward the discriminated people is not at all evident, and the discriminated people are spoken of as an entity that is “not here,” and that has nothing to do with [we] and does not have a sense of reality (Sato, 2005, pp. 76–82).

Analysis of Official Discourse: The Formation of Exclusionary Social Spaces

This study applied Sato’s (2005) theory of discrimination to analyze an article that appeared in the official Chinese media outlet *Guangming Daily* on August 27, 2021, titled “Bans ‘Effeminate men’ from TV.”⁷ The article should not be ignored because people can easily read it on social media, for example, Sina Weibo.⁸ Furthermore, it was placed in the official press and is not just an idea of an individual but the will of the government. The official Chinese media is a symbol of authority, and its value judgment will more likely win the approval of the Chinese people. By offering a potential analytical viewpoint on this discourse, this section explains how the exclusionary social spaces for sexual minority people are formed and further discusses the implications for sexual minority issues in China.

The first half of the article comprises primarily insulting and disdainful comments towards males whose gender expressions do not conform to gender

⁷ See “‘娘炮形象’等畸形审美必须遏制” https://epaper.gmw.cn/gmrb/html/2021-08/27/nw.D110000gmrb_20210827_3-13.htm (Accessed on 1 Aug 2022).

⁸ Sina Weibo (新浪微博) is China’s largest micro-blogging website. Launched by Sina Corporation in 2009, it is based on user relationships to share, disseminate, and obtain information.

norms. Words such as *niangpao* (娘炮, a disparaging Chinese term for men with feminine characteristics), *cixiongnanbian* (雌雄难辨, it is hard to tell whether one is male or female by the outward appearance), and *bingtai* (病态, morbid) are written in this article. Additionally, the author calls them *xiaoxianrou* (小鲜肉) and claims that their appearance on TV can negatively impact minors' aesthetics.

It is difficult to distinguish a conflict of interest between *xiaoxianrou* and the author. Therefore, this description would not be directed at *xiaoxianrou*; rather, by instigating contempt against the supposed "unmanly" people, it seeks readers' consent to constitute a [we] that is in good standing with gender norms. Specifically, the author places a negative value on "effeminate men" and looks down on them. Simultaneously, the author emphasizes his own difference and superiority as well as that of the readers who are supposed to adhere to his assumed gender norms. The author deems that they are unlike *xiaoxianrou* who violate gender norms and asks readers to adopt the same position. Thus, by creating an asymmetrical difference between [we] and them who are not [we], the official discourse forms an exclusionary social space to reinforce gender norms. When this paragraph is read, if the readers think, "Yes, that is right," that is, if someone is unaware of the author's intent to assimilate readers and make them agree with the author, then the act of discrimination is complete regardless of the presence or absence of a *xiaoxianrou*. Briefly explained, this is the aggressive exclusion of assimilation-driven discrimination.

The final paragraph states:

In fact, most (the majority) young people do not like such morbid characters⁹. Many young people praised such high-standard works as "The Awakening Years" and "Revolutionaries" (dramas with patriotic and party themes) and felt deeply that this is the way Chinese youth should

⁹ Morbid characters in the article refer to those Chinese pop stars or actors who are influenced by Japanese and South Korean popular culture and become "sissy men."

be (GuangMing Daily, August 27th, 2021, Version 13: Comment).

The author uses the word *daduoshu* (大多数, majority) to put intangible pressure on the readers to justify his point. In other words, the nuance is that if you like the “morbid characters,” you will be in the minority and different from everyone else. Moreover, the use of “morbid characters” instead of *xiaoxianrou* makes people think that “effeminate” men are not real in daily life.

Furthermore, it is not specified as to who the “morbid characters” are, what “Chinese youth should be like” means, and what gender role is expected (nor is there any need to do so), leaving it solely up to the reader’s interpretation and imagination, creating an atmosphere of “those who naturally understand.” This is simply a message of assimilation that is being sent out to readers. Readers and authors who have read such “messages” have created a discriminatory space by understanding each other. Therefore, this is a symbolic exclusion of assimilation-driven discrimination.

The author does not solely oppose the participation of “effeminate men” in the program, but the call that all citizens should observe gender norms and gender-role expectations might be essentially the purpose of writing this article. This is also in line with China’s current policy of moral governance, which is to “pass on superior traditional culture.” For example, the following statement was made by Xi Jinping with the new leadership of the All-China Women’s Federation members when conducting a collective conversation in Zhongnanhai on November 2, 2018.

We must emphasize the importance of promoting the Chinese family’s virtues and women’s unique role in building a good family culture. This involves family harmony, social harmony, and the healthy growth of younger generations. Women, in general, should respect the old, love the young, and consciously assume the responsibility of educating children. Moreover, they should fulfill their role in building family virtues, helping

children develop a good heart, and promoting their healthy growth to be helpful to the nation and the people when they grow up¹⁰.

Similar presentations were given at a previous conference in 2013¹¹. The demand in these speeches contrasts with the previous assertion that it focuses on women's contributions in the public sphere, such as the economy and society, and begins to emphasize women's traditional gender roles as mothers and spouses (Zhu, 2016).

An article that stigmatizes "effeminate men" is likely to have a direct impact on society's attitudes and perceptions of transwomen. While the term "effeminate men" does not encompass all sexual minorities, the matter of forming an invisible oppression space for those who violate gender norms or gender-role expectations is bound to have serious implications for sexual minority people and their issues.

It is more difficult for sexual minority issues to be raised in the public space as the number of assimilated people continues to increase, because this would contradict the intention implied by the official discourse of the state, which is to adhere to gender norms and fulfill gender-role expectations.

This can also make the lives of sexual minority people more challenging. According to Sato (2005), symbolic exclusion causes severe damage to discriminated people, as it is doubly oppressive. If the "othering" of people is on the spot, they will experience *the torn state* of being simultaneously an "accomplice" and a "discriminated" person. As this article becomes a trending topic in society, it becomes more likely that numerous "accomplices" will make it more difficult for sexual minority people to speak out or be themselves and hinder their visibility.

¹⁰ See "习近平同全国妇联新一届领导班子成员集体谈话并发表重要讲话" http://www.gov.cn/xinwen/2018-11/02/content_5336958.htm (Accessed on August 1, 2022).

¹¹ See "王岐山：在中国特色社会主義偉大實踐中撐起半邊天" http://big5.www.gov.cn/gate/big5/www.gov.cn/lhdh/2013-10/28/content_2516927.htm (Accessed on August 1, 2022).

However, Sato's (2005) theory primarily analyzes interpersonal relationships. Moreover, the important reason for the accomplices to be assimilated, that is, why the three-party relationship model can be formed, is to benefit from forming [we]. In this light, it is necessary to explain what benefits people receive when they are assimilated by the state.

The cause for being assimilated is presumed to be a recognition of dignity, a sense of security, and moral pleasure. The state uses its power through official discourse to call ambiguously on the public to "observe gender norms and confirm gender-role expectations." For some, this may seem like a restriction of freedom of gender and sexuality, whereas for others, under the influence of the authoritarian state and the patriotic spirit, there may be moral satisfaction and a sense of justice in being the person the state wants. These people might feel a high degree of responsibility by sanctifying and internalizing the call of the nation and begin to regulate themselves voluntarily, as they believe that by becoming "real Chinese" approved by the state, their dignity will be recognized and that they will have a sense of security and moral pleasure in living in the country. Although the precise gender norms and gender-role expectations that the state is demanding are not clearly described, when those in power look down upon and exclude some people, it soon becomes clear to them what they are not supposed to be. Consequently, people may actively self-reflect and be assimilated.

In short, the state assimilates the public by instigating contempt, othering "effeminate men" in official discourse, and reinforcing gender norms and gender-role expectations. The public who does not care about sexual minority issues may be assimilated by the state out of a sense of security, moral pleasure, and recognition of their dignity. This is the process that creates the invisible oppression of sexual minorities in China (see Figure 3).

Conclusions

This study first summarized existing research in China and found that the

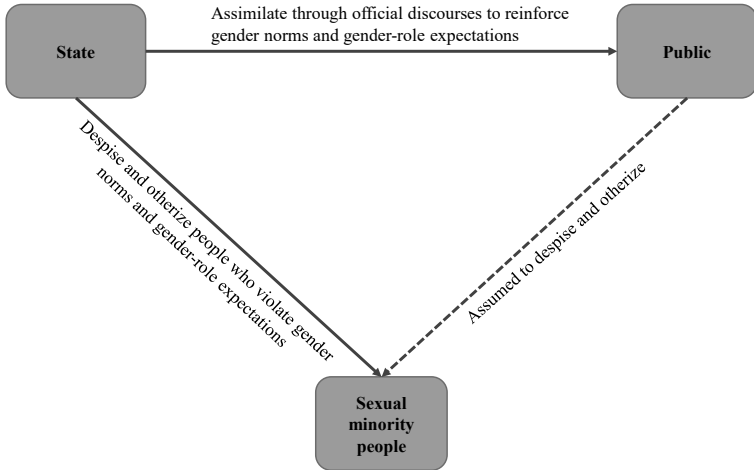


Figure 3 The Formation of Invisible Oppression for Sexual Minority People in China

focus is primarily on factors that impact the situations of sexual minority people and allies, and the strategies they use to navigate such situations. A lack of attention to the role of the public and the reasons for the oppression in society place sexual minority issues in China at the level of “other’s issues.” Then, by way of comparison, how sexual minority issues have been positioned in the West and how they are viewed as “everyone’s issues” were examined. The Western viewpoint includes the concept of SOGI in human rights discourses from the perspective of the universality of human rights and the development of human rights to protect the interests of more people. Simultaneously, the two concepts are constantly being reflected and criticized. This study argued that the same approach is not applicable to China given the characteristics of Chinese human rights theories. Thus, a new, dynamic perspective is required to reframe sexual minority issues in China and involve the public. This study referred to Sato’s (2005) discrimination theory, which, through a case study of official discourse in China, found that the state socially

excludes people who do not conform to gender norms and gender-role expectations by sending ambiguous messages to assimilate the public.

Official discourses have always been influential and an essential reference for the actions of local administration. It must be acknowledged that official discourses sometimes contribute to social harmony and steady development. Nevertheless, it is essential to consider its advantages and disadvantages. Even if people do not intend to engage in discriminatory acts or language against sexual minority people, they subconsciously subscribe to the state's discourse and accept the state's "signal of assimilation," which has encouraged the social exclusion of sexual minority people.

This study provided a new perspective on sexual minority issues when universal human rights theories are difficult to advocate. In China, a space of persistent exclusion is created in society by sending ambiguous signals in an indirect way to the public, even though explicit exclusion or prohibition of sexual minority people by the state is difficult to observe. Therefore, this study suggested that while the social exclusion of sexual minority people can occur under the connivance of the state and the public, there is also the possibility of changing it through the awareness of each citizen.

This study also provided a new perspective on sexual minority studies in China. The influence of the public on sexual minority issues is significant; as such, exploring the interactions between sexual minorities and the general public will allow for a better grasp of the situations of sexual minorities, as well as a reflection on the discourses and institutions in today's society.

Sexual minority people in China are collectively affected by "invisible oppression." However, the different experiences sexual minority people have in China are attributed to their diverse sexual identities. In particular, how transgender people, who have not received the same attention as gays and lesbians, negotiate with their surroundings and develop their paths is an issue that should be addressed in the future.

Author Note

ORCID <https://orcid.org/0000-0001-5920-8584>

I would like to extend my sincere gratitude to my supervisor, Silvia Atanassova Croydon, for her constant encouragement and guidance. No potential conflict of interest was reported by the author.

Correspondence concerning this article should be addressed to Zhao Yingying, Graduate School of Human Sciences, Osaka University. Email: u425364b@ecs.osaka-u.ac.jp

References

- “Bans ‘Effeminate men’ from TV” (“‘娘炮形象’等畸形审美必须遏制”) https://epaper.gmw.cn/gmrb/html/2021-08/27/nw.D110000gmrb_20210827_3-13.htm (Accessed on 1 Aug 2022).
- Beijing LGBT Center. (北京同志中心). (2017). 中国跨性别群体生存现状调查报告 [Chinese Transgender Population General Survey Report]. <https://doc.mbalib.com/view/23d82eecfd6765a009adcf32e455028.html>
- Blake, R. K. (2018). Transgender rights are human rights: A contemplation of litigation strategies in transgender discrimination cases. *Wisconsin Journal of Law Gender & Society*, 33, 107.
- Chase, A. T. (2016). Human rights contestations: Sexual orientation and gender identity. *The International Journal of Human Rights*, 20(6), 703–723. <https://doi.org/10.1080/13642987.2016.1147432>
- Chia, J. L. (2019). “What’s love got to do with it?”: LGBTQ rights and patriotism in Xi’s China. *Australian Journal of Asian Law*, 20(1), 27–37. <https://ssrn.com/abstract=3491038>
- “Chinese gay group WeChat account was blocked, sparking protest: We are all ‘unnamed public accounts’-BBC News,” <https://www.breakinglatest.news/news/chinese-gay-group-wechat-account-was-blocked-sparking-protest-we-are-all-unnamed-public-accounts-bbc-news/> (Accessed on 1 July 2022)
- “Chinese students vow to fight penalty for distributing rainbow flags at Tsinghua University,” <https://www.scmp.com/news/china/politics/article/3185842/chinese-students-vow-fight-penalty-distributing-rainbow-flags>(Accessed on 1 July 2022)
- Chou, W. S. (2001). Homosexuality and the cultural politics of Tongzhi in Chinese societies. *Journal of homosexuality*, 40(3-4), 27–46. https://doi.org/10.1300/j082v40n03_03
- Coleman, E. J., & Chou, W. S. (2013). *Tongzhi: Politics of same-sex eroticism in Chinese societies*. Routledge.
- Endsjø, D. Ø. (2005). Lesbian, gay, bisexual, and transgender rights and the religious relativism of human rights. *Human Rights Review*, 6(2), 102–110. <https://doi.org/10.1007/s12142-005-1020-1>
- Engbretsen, E. L. (2015). Of pride and visibility: The contingent politics of queer grassroots activism in China. In E. L. Engbretsen, W. F. Schroeder, & H. Bao (Eds.), *Queer/Tongzhi China: New perspectives on research, activism and media cultures* (pp. 89–110). NIAS Press. <http://www.niaspress.dk/books/queertongzhi-china>
- Guo, L. (郭立夫). (2018a). Tongzhi solidarity under Chinese authoritarian government: A case study of the Beijing Tongzhi Center. *Komaba Journal of Asian Studies*, 14, 75–105. <https://doi.org/10.15083/00074907>
- Guo L.(郭立夫). (2018b). Moral war: Moral governance and *Tongzhi* activism in China. *Gender and Sexuality*, 13, 85–110. <https://doi.org/10.34577/00004590>
- Hildebrandt, T. (2012). Development and division: The effect of transnational linkages and local politics on LGBT activism in China. *Journal of Contemporary China*, 21(77), 845–862. <https://doi.org/10.1080/10670564.2012.684967>

- Hines, S. (2009). A pathway to diversity? Human rights, citizenship and the politics of transgender. *Contemporary Politics*, 15(1), 87–102. <https://doi.org/10.1080/13569770.802674238>
- Hu, X., & Wang, Y. (2013). LGB identity among young Chinese: The influence of traditional culture. *Journal of homosexuality*, 60(5), 667-684.
- Huang, A. (2015). On the surface: “T” and transgender identity in Chinese lesbian culture. In E. L. Engebretsen, W. F. Schroeder, & H. Bao (Eds.), *Queer/Tongzhi China: New Perspectives on Research, Activism and Activist Research* (pp. 111–130). NIAS Press. <http://www.niaspress.dk/books/queertongzhi-china>
- Huang, S., & Brouwer, D. C. (2018a). Negotiating performances of “real” marriage in Chinese queer xinghun. *Women’s Studies in Communication*, 41(2), 140–158. <http://dx.doi.org/10.1080/07491409.2018.1463581>
- Huang, S., & Brouwer, D. C. (2018b). Coming out, coming home, coming with: Models of queer sexuality in contemporary China. *Journal of International and Intercultural Communication*, 11(2), 97–116. <http://dx.doi.org/10.1080/17513057.2017.1414867>
- Kong, T. S. (2020). Toward a transnational queer sociology: Historical formation of *Tongzhi* identities and cultures in Hong Kong and Taiwan (1980s-1990s) and China (late 1990s-early 2000s). *Journal of Homosexuality*, 1–25. <https://doi.org/10.1080/00918369.2020.1826835>
- Liu, P. (2010). Why does queer theory need China? *Positions: East Asia Cultures Critique*, 18(2), 291–320. <https://doi.org/10.1215/10679847-2010-002>
- O’Flaherty, M., & Fisher, J. (2008). Sexual orientation, gender identity and international human rights law: Contextualizing the Yogyakarta Principles. *Human Rights Law Review*, 8(2), 207–248. <http://dx.doi.org/10.1093/hrlr/ngn009>
- Parkin, S. (2018). LGBT rights-focused legal advocacy in China: The promise, and limits, of litigation. *Fordham International Law Journal*, 41(5), 1243.
- Peerenboom, R. (2005). Assessing human rights in China: Why the double standard? *Cornell International Law Journal*, 38(1), 71–172.
- Sato, Y. (佐藤裕). (2005). 『差別論』 [On discrimination]. 明石書店.
- Sato, Y. (佐藤裕). (2005). 「小説の中の差別表現 – 筒井康隆「無人警察」 [Discriminatory expressions in novels - Yasutaka Tsutsui “Unmanned Police”]. 『差別論』 [On discrimination]. 明石書店.
- Sato, Y. (佐藤裕). (2005). 「あいまいな表現としての差別語と「ワクチン」 – 石原都知事「三国人」発言」 [Discriminatory words as ambiguous expressions and “vaccines” - Governor Ishihara’s “Sangokujin” comment]. 『差別論』 [On discrimination]. 明石書店.
- Sato, Y. (佐藤裕). (2019). 「差別の方法」の記述とワクチン安倍首相「こんな人たち」発言の分析から」 [The “Methods of Discrimination” and Vaccines: An Analysis of Prime Minister Abe’s “Such People” Speech]. 『社会学年報』 [Annual reports of the Tohoku Sociological Society], 48, 19-29.
- Sauer, A. T., & Podhora, A. (2013). Sexual orientation and gender identity in human rights impact assessment. *Impact Assessment and Project Appraisal*, 31(2), 135–145. <https://doi.org>

- g/10.1080/14615517.2013.791416
- Schroeder, W. F. (2015). Research, activism, and activist research in Tongzhi China. In E. L. Engebretsen, W. F. Schroeder, & H. Bao (Eds.), *Queer/Tongzhi China: New Perspectives on Research, Activism and Activist Research* (pp. 57–80). NIAS Press. <http://www.niaspress.dk/books/queertongzhi-china>
- The Yogyakarta Principles. (2007). <https://www.refworld.org/pdfile/48244e602.pdf>
- Tsuchiya, H. (土屋英雄). (1996). 『現代中国の人権 – 研究と資料』 [Contemporary Chinese human rights studies and materials]. 信山社.
- Ueno, Chizuko. (上野千鶴子). (2010). 『女ざらい – ニッポンのミソジニー』 [Misogyny]. 紀伊國屋書店.
- United Nations Development Programme. (2016). Being LGBTI in China: A national survey on social attitudes towards sexual orientation, gender identity and gender expression. UNDP. <https://www.undp.org/asia-pacific/publications/being-lgbti-china-national-survey-social-attitudes-towards-sexual-orientation-gender-identity-and-gender-expression>
- United Nations General Assembly. (2013). Human Rights Council twenty-fifth session, agenda item 6: Universal periodic review — report of the working group on the universal periodic review, China (including Hong Kong, China and Macao, China). https://www.ohchr.org/sites/default/files/HRBodies/HRC/RegularSessions/Session25/Documents/A-HRC-25-5_en.doc
- Waites, M. (2009). Critique of “sexual orientation” and “gender identity” in human rights discourse: Global queer politics beyond the Yogyakarta Principles. *Contemporary Politics*, 15(1), 137–156. <https://doi.org/10.1080/13569770802709604>
- “Wang Qishan: Support half the sky in the great practice of socialism with Chinese characteristics” (“王岐山：在中國特色社會主義偉大實踐中撐起半邊天”) http://big5.www.gov.cn/gate/big5/www.gov.cn/ldhd/201310/28/content_2516927.htm (Accessed on August 1, 2022).
- Wei, W., & Yan, Y. (2021). Rainbow parents and the familial model of *tongzhi* (LGBT) activism in contemporary China. *Chinese Sociological Review*, 53(5), 451–472. <https://doi.org/10.1080/21620555.2021.1981129>
- Wu, C. (2010). Sovereignty, human rights, and responsibility: Changes in China’s response to international humanitarian crises. *Journal of Chinese Political Science*, 15(1), 71–97. <https://doi.org/10.1007/s11366-009-9083-5>
- “Xi Jinping talks with members of the new leadership of the All-China Women’s Federation and delivers an important speech” (“习近平同全国妇联新一届领导班子成员集体谈话并发表重要讲话”) http://www.gov.cn/xinwen/2018-11/02/content_5336958.htm (Accessed on August 1, 2022).
- Zhu, X. (朱雪琴). (2016). 治理中的性與性別：從近年中國大陸性與性別重要事件談起 [Sex and sexuality under governance: From significant gender/sexuality events in recent Mainland China]. In He, C. (何春蕤). & Ning, Y. (甯應斌). (Eds.), *性/別 20 [Gender/Sexuality: The first twenty years]* (pp. 109–136). 台灣中央大學性/別研究室.

Abstract

中国における性的マイノリティ問題のリフレーミング ——差別論の視点から

趙瑩瑩

既存の研究では、中国の文化や政策、偏見を持つ人々、西洋のモデルが性的マイノリティの問題にどのような影響を与えるのか、また性的マイノリティが中国の社会的背景の中でどのように苦闘しているのかに焦点が当てられてきた。しかし、これらの研究では、一般市民の役割が無視されており、性的マイノリティが根強い抑圧を受ける理由についても検討されていない。このように、中国の性的マイノリティ問題は、誰もが関わる問題ではなく、「他者の問題」として捉えられており、性的マイノリティがさらに周辺化されることにつながる可能性がある。これに対して、欧米の研究者は、人権の観点から、性的マイノリティは全ての人に関わる問題であると主張しているが、中国の人権理論の特徴は、欧米の視点を中国に適用することができないことを示している。したがって、中国における性的マイノリティ問題を、一般市民を巻き込む新しいダイナミックな視点から捉え直すことが必要である。

本研究では、佐藤裕（2005）の差別理論を用いて中国政府による公式言説を分析し、国家が同化に関する曖昧なメッセージを送り、性的マイノリティを社会的に排除していると主張した。このため、中国の性的マイノリティは持続的な「見えない抑圧」に直面していると結論した。

本稿は、普遍的人権理論の援用が困難な場合の性的マイノリティ問題に新たな視点を提供し、中国における性的マイノリティに対する「見えない抑圧」は、国家と国民が一体となって生じうるものの、国民一人ひとりの意識によって変えることもできることを示唆するものである。

キーワード：

中国、性的マイノリティ問題、人権、差別、抑圧

2021年度ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞受賞論文について

高松香奈

(2021年度選考委員長)

「ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞」は、ジェンダー研究センターの設立に尽力され、2014年にご退官された田中かず子教授により創設されました。賞の目的は、本学に提出された学士・修士または博士学位論文の中で、優れたジェンダー・セクシュアリティ関連研究を表彰し、そしてジェンダー・セクシュアリティ研究の一層の発展を期待するものです。

2021年度は、優秀な論文が複数推薦されましたが、最終的に三島早希さんの学士論文「現代日本における恋愛伴侶規範性—アロマンティック/アセクシュアル当事者へのインタビューを通じて」に決定しました。

受賞論文は、「恋愛伴侶規範性 (amato-normativity)」を取り上げ、日本の社会において「恋愛伴侶規範性」がどのように経験されているのかという問いを明らかにすることを目的とした論文です。研究結果として、日本社会における「恋愛伴侶規範性」の経験は、これまで指摘されてきた性愛関係の特権化に止まらず、多様な支援関係の周縁化として経験されていることを明らかにしました。ジェンダー、セクシュアリティの視点からの丹念な聞き取り調査と考察が行われており、「ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞」が授与されました。

The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies in AY 2021

Kana TAKAMATSU

(AY2021 Selection Committee Chair)

The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies was established by Professor Kazuko Tanaka, who founded the Center for Gender Studies (CGS). The award's purpose is to recognize outstanding gender and sexuality-related research in B.A., M.A., or Ph.D. dissertations submitted to the ICU and encourage further development of gender and sexuality studies.

Several outstanding papers were nominated for the academic year 2021. The winner was finally selected for Mishima Saki's senior thesis, "Amatonormativity in Japan: Interviews with Self-Identified Aromantics/Asexuals." The award-winning paper focuses on the concept of "Amatonormativity" and aims to clarify how "Amato-normativity" is experienced in Japan. The research revealed that the experience is not limited to the exclusive belief in long-term romantic coupled relationships, as pointed out in previous literature, but is the marginalization from support relationships. The study conducted interview research and was carefully examined qualitative data from gender and sexuality perspectives. This research was informative and was awarded the Rainbow Prize for Gender and Sexuality Studies in AY 2021.

現代日本における恋愛伴侶規範性 ——アロマンティック／アセクシュアル当事者への インタビューを通じて

三島早希

本研究は、これまで指摘されてきた異性愛規範性 (hetero-normativity) とは区別される「恋愛伴侶規範性 (amato-normativity)」という概念を取り上げ、「恋愛伴侶規範性」が、日本社会においてどのように経験されているのかを実証的に明らかにすることを目的としたものである。

恋愛伴侶規範性とは、アメリカの哲学者エリザベス・ブレイクにより提唱された概念であり、異性愛の特権化のみならず、一対一の性愛関係の特権化 (モノガミー規範性) をも問題視する点において、異性愛規範性との差異がある。ブレイクによれば、恋愛伴侶規範性は「中心的で排他的な恋愛関係こそが人間にとって正常であり、また普遍的に共有された目的であるという想定、そしてそのような関係こそが規範的であり、他の関係のかたちよりも優先して目指されるべきであるという想定からなっ」ており (Brake, 2019, p. 157)、一対一の性愛関係以外の、友人関係や独身者のネットワークといった、成人間の非性愛的なケア・ネットワークを不当に周縁化する (Brake, 2019, pp. 156-157)。

近年の日本の家族社会学においては、男女の一対一の性関係や血縁に絶対的な基盤を置き、ジェンダーに基づく役割分担の再生産が行われる「伝統的家族」を相対化しようとするような、多様な生／性の実践に焦点が当てられてきた。そのなかではレズビアンやゲイの家族実践や、血縁や性愛関係にない者同士のシェアハウジング、オープンリレーションシップといった実践に焦点が当てられており、異性愛規範性やモノガミー規範性の問題が指摘されてきたといえる。しかし、これまでの研究においては、恋愛伴侶規範性の中核となる、一対一の恋愛関係や性的関係の特権化する社会規範がどのように経験されているのかについては焦点が当てられてこなかった。

そこで、本研究は、他者に対して恋愛的・性的に惹かれることを必ずしも経験しないセクシュアリティである「アロマンティック・アセクシュアルスペクトラ

ム（以下 Aro/Ace）」の当事者にインタビュー調査をおこない、これまで指摘されてきた異性愛規範性やモノガミー規範性とは区別される恋愛伴侶規範性が、日本社会においてどのように経験されているのかを明らかにすることを試みた。他者に対して恋愛的・性的に惹かれることを必ずしも経験しない Aro/Ace は、異性愛規範性やモノガミー規範よりも、恋愛や性愛関係を特権化する恋愛伴侶規範性とのコンフリクトを経験していると考えられるため、Aro/Ace へのインタビュー調査によって、日本社会における恋愛伴侶規範性の経験に迫ることができると考えられる。

本調査は、Aro/Ace 当事者の経験を通して、日本社会における恋愛伴侶規範性は、恋愛の中心化や特権化としてのみならず、恋愛／婚姻以外の支援関係の周縁化として経験・認識されていることを明らかにした。具体的には、(1)「恋愛」が性や同居に結びつくものとして規範化され、さらに (2) 恋愛が普遍的な理想とされ、また (3) 恋愛関係が他の関係性よりも価値のあるものとされることにより、(4) 恋愛／婚姻以外の支援関係が周縁化されることが示唆された。このように、恋愛伴侶規範性は、恋愛関係以外の、人びとが助け合い、支え合うような関係性を矮小化する。このような傾向は社会規範としてのみならず、現状の婚姻制度などにも見出せるものであろう。

以上のように本研究は、ブレイクによる理論研究から提唱された「恋愛伴侶規範性」を社会的に実証した。特に、日本において Aro/Ace を対象とした質的研究自体が数少ないなかで、本調査を通して、恋愛伴侶規範性に違背する Aro/Ace 当事者の実践においては、恋愛や性愛関係という親密性と、生活の基盤としての共同性が切り離されることが示唆されたことは重要である。

なお、本研究は Aro/Ace に焦点を当てたが、恋愛伴侶規範性は Aro/Ace のみならず、レズビアンやゲイの家族的コミュニティ、ポリアモリーや単親家庭、独身者のネットワークや友人関係、シェアハウジングを実践する者への抑圧にも加担していることが考えられる。

Brake, E. (2019). 『最小の結婚：結婚をめぐる法と道徳』(久保田裕之監訳). 東京:白澤社.
(Original work published 2012).

Amatonormativity in Japan: Interviews with Self-Identified Aromantics/Asexuals

Saki MISHIMA

This paper aims to empirically clarify how “amato-normativity,” which is distinct from hetero-normativity, is experienced in Japanese society.

American philosopher Elizabeth Brake coined the term “amato-normativity” after “hetero-normativity” to question the discriminatory nature of privileging one-to-one amorous relationships. Amato-normativity is defined as “the assumptions that a central, exclusive, amorous relationship is normal for humans, in that it is a universally shared goal, and that such a relationship is normative, in that it should be aimed at in preference to other relationship types” (Brake, n.d.). Amato-normativity prompts the sacrifice of other relationships to romantic love and marriage and relegates friendship and solitudinousness to cultural invisibility. Thus, Brake problematized the privileging of monogamous amorous relationships with a view to dismantling the heterosexual order.

The purpose of this paper is to empirically clarify how amato-normativity is experienced in Japanese society. In previous studies, the focus has been on the practices of lesbian and gay families, living in a shared house between people who are not related by blood or sexuality, and open relationships; and the problems of hetero-normativity and monogamy have been pointed out. However, previous studies that focused on heterosexuals or homosexuals, contrasts such as heterosexuality and homosexuality, monogamy and polyamory (open relationships), and the existence of sexual and amorous relationships have been considered self-evident. In addition, studies of shared housing between people who are not related by blood or sexuality have focused on the contrast between nuclear families and the practice of shared housing, in terms of shared residential life, and have not questioned the social

privileging of sexual and amorous relationships. Therefore, it has been difficult to distinguish hetero-normativity and monogamy from amato-normativity, and it is not sufficiently clear how the social norms that privilege amorous relationships, which are at the core of amato-normativity, are experienced.

This study clarifies how amato-normativity, which is distinct from heterosexuality and monogamy, is experienced in Japanese society through interviews with self-identified aromantic/asexual spectrum people (Aro/Ace). This is because Aro/Ace, who do not necessarily experience romantic or sexual attraction to others, may experience more conflicts with amato-normativity, which privilege exclusive amorous relationships, than hetero-normativity and monogamy.

Through the experiences of Aro/Ace, this study reveals that amato-normativity in Japanese society is experienced and perceived not only as the privileging and centralization of romantic love but also as the marginalization of supportive relationships outside of amorous relationship/marriage. Specifically, it is suggested that romantic love is normalized as being linked to sex and cohabitation (1), and further that romantic love is regarded as a universal ideal (2) and romantic relationships are valued more than other relationship types (3), thereby marginalizing supportive relationships other than amorous relationships or marriage (4). Thus, amato-normativity prompts confining the relationship of people helping and supporting each other in their lives to the relationship of “love” between two people. This tendency can be seen not only in social norms but also in the current marriage system.

This study is significant for two reasons: First, as a sociological study in Japan, it empirically clarifies the centrality and privilege of “romantic love” by using the concept of amato-normativity, which has not received much attention so far. Second, this study tackles the Aro/Ace research that is a relatively new field of gender and sexuality studies, and most of it is centered in English-speaking countries. While there are only a few qualitative studies on Aro/Ace in Japan, this study reveals, albeit in part, the experience of Aro/Ace in Japan.

It is very significant that in the fields of family sociology and gender sexuality studies, the experiences and difficulties of Aro/Ace have been used to empirically clarify the way in which amato-normativity is experienced in Japanese society.

Brake, E. (n.d.). Amatonormativity. Elizabeth Brake. <https://elizabethbrake.com/amatonormativity/>

Brake, E. (2012). *Minimizing Marriage: Marriage, Morality and the Law*. Oxford University Press.

イベント報告

身体を／が語る：日本文学における妊娠、出産、授乳

コーディネーター：レティツィア・グアリーニ

(元CGS研究所助教)

2022年11月13日（土）と14日（日）に国際基督教大学ジェンダー研究センターは「身体を／が語る：日本文学における妊娠、出産、授乳」というシンポジウムを開催した。1日目は、国内外で活躍している現代文学研究者をお招きして、文学における妊娠、出産、授乳の表象についての議論が行われた。2日目に、これらのテーマに焦点を当てている深沢潮氏と山崎ナオコーラ氏、二人の作家の対談を通じて、引き続き身体を／が語る可能性を探った。

オンラインで開催された本イベントには、日本のみならず、海外からの参加者もたくさんいた。1日目のイベントは英語と日本語（同時通訳付き）、2日目の対談は日本語のみで開催された。

11月13日（土）に17時から20時半まで5名の発表の後、討論が行われた。最初の発表者は津田塾大学で教鞭を執っている木村朗子氏であった。木村氏は近年『震災後文学論—あたらしい日本文学のために』（青土社、2013年）や『世界文学としての〈震災後文学〉』（明石書店、2021年）など、震災後文学に焦点を当ててきた。一方、2009年に刊行された『乳房はだれのものか——日本中世物語にみる性と権力』（新曜社）では中世文学における女性たち（乳母、召人、女帝、女院など）の表象を探った。今回のシンポジウムでは日本古典文学における妊娠、出産、授乳について発表した。

マサチューセッツ大学アマースト校で日本文学を教えるアマング・C・シーマン氏は、しばしば文学における女性の身体を論じてきた。*Writing Pregnancy In Low Fertility Japan* (University of Hawai'i Press, 2016年) では与謝野晶子、津島佑子、角田光代、唯野未歩子ら、近代から現代にかけて日本の女性作家が描いた妊娠および出産を分析した。今回の発表では、川上未映子『きみは赤ちゃん』（文藝春秋、2014年）を中心に陣痛について論じた。

三人目の発表者は、オックスフォード大学で近代日本文学の講師として務めながら翻訳家としても活躍しているフリアナ・ブリティカ・アルサテ氏であった。国際基督教大学のジェンダー研究センター研究員でもあるブリティカ・アルサテ氏は、日本現代小説における子育ての表象、またそれに関する身体的な体験について研究しており、近年では川上未映子『乳と卵』（文藝春秋、2008年）や桐野夏生『東京島』（新潮社、2008年）に関する論文も発表した。本イベントでは授乳、民話、自然に焦点を絞りながら小山田浩子『彼岸花』（『庭』新潮社、2018年）および松田青子「エノキの一生」（『おばちゃんたちのいるところ』中央公論新社、2016年）について論じた。

次にイタリアのトリノ大学で日本語・日本文学を教えるアンナ・スペッキオ氏は八木詠美『空芯手帳』（筑摩書房、2020年）を取り上げ、妊婦をめぐる葛藤を探る手段としての「偽妊娠」について発表した。スペッキオ氏は村田沙耶香や綿矢りさなど、日本現代女性文学における生殖技術やコミュニケーション技術と女性性とジェンダー関係を研究する傍ら、翻訳家としても活躍している。2022年にスペッキオ氏による『空芯手帳』のイタリア語版が刊行された。

最後にイベント司会も務めたレティツィア・グアリーニ氏（筆者）の発表が行われた。イベント当時は国際基督教大学ジェンダー研究センター助教であった筆者は、現在、法政大学でクィア・スタディーズや日本現代文学を教えている。また角田光代や柳美里などを中心に日本現代文学における家族、とりわけ父娘関係について研究している。本イベントでは母乳神話とケアの観点から深沢潮『乳房のくいで』（双葉社、2020年）における授乳の表象について論じた。

全ての発表が終わった後、国際基督教大学で日本文学、英文学、ジェンダー理論などの教鞭を執っている生駒夏美氏（CGS副センター長）がディスカッサントとして討論に加わった。また、最後に質疑応答の時間を設けて、参加者も積極的に議論に参加した。

11月14日（日）14時から16時まで、深沢潮氏と山崎ナオコラ氏をお招きし、前日に引き続き日本文学における妊娠、出産、授乳の表象について考える場を設けた。

深沢潮氏は、「金江のおばさん」（2012年）で第11回「女による女のためのR-18文学賞」大賞を受賞してから、『ハンサラン 愛する人びと』（改題『縁を結

うひと』新潮文庫、2013年）、『ランチに行きましょう』（徳間書店、2014年）、『ひとかどの父へ』（朝日新聞出版、2015年）、『ママたちの下剋上』（小学館、2016年）、『海を抱いて月に眠る』（文藝春秋、2018年）など、「家族」を描いた作品が多い。2020年に「母乳」というテーマを中心に母性に焦点を当てる長編小説『乳房のくいで』が出版された。2022年12月に『乳房のくいで』の文庫版も刊行され、本シンポジウムに発表した木村朗子氏が解説を書いた。

山崎ナオコーラ氏は、2004年にデビュー作『人のセックスを笑うな』（河出書房新社）で第41回文藝賞を受賞した。同作が第132回芥川賞の候補ともなった。『浮世でランチ』（河出書房新社、2006年）、『この世は二人組ではできあがらない』（新潮社、2010年）、『美しい距離』（文藝春秋、2017年）など、数多くの作品を発表している。『リボンの男』（河出書房新社、2019年）や「父乳の夢」（『肉体のジェンダーを笑うな』集英社、2020年）、またエッセイの『母ではなくて、親になる』（河出書房新社、2017年）など、育児を描いた作品が多い。

深沢氏と山崎氏の対談の中で、文学＝虚構における妊娠・出産・授乳のみならず、日本社会におけるジェンダー規範、セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（SRHR：性と生殖に関する健康と権利）、産み育てが自己責任化する社会におけるケア、また「家庭」および「近代家族」で自明視されてきた「母親」と「父親」（あるいは「女性」と「男性」）というカテゴリーなどについて議論が行われた。

シンポジウムに先立ってジェンダー研究センターでは読書会を開催し、深沢氏の『乳房のくいで』および山崎氏の「父乳の夢」を学生たちと一緒に読んでいた。イベント当日、登場人物の名前や特定の場面など、細かい部分に関する質問もあり、より一層作品の理解が深まる機会となった。

なお、本シンポジウムは、妊娠する身体、出産する身体、母乳を与える身体のお話を議論することを目的としていた。しかし、研究対象とならなかった物語、また本イベントで語られなかった身体もたくさん存在することに注目したい。たとえば、内田春菊、伊藤比呂美、角田光代など、さまざまな作家は今回行われた発表や議論に含まれていない。さらに、本イベントでは、妊娠、出産、授乳というテーマを複数の観点から取り上げ、さまざまな「語（られ）る身体」を探求してきたが、クィア、ノンバイナリー、トランスジェンダーの人々の人生における

生殖、出産、授乳（育児）には触れていない。また中絶に関する物語も取り上げられていない。今後も妊娠、出産、授乳をテーマにする物語を分析し、身体を／が語る声に耳を傾ける必要がある。

Event report

Narrating Bodies: Pregnancy, Childbirth, and Breastfeeding in Japanese Literature

Coordinator: Letizia GUARINI

(Former Assistant Professor, CGS)

On November 13th and 14th, 2022, the Center for Gender Studies (CGS) at International Christian University (ICU) hosted a virtual symposium on the representation of pregnancy, childbirth, and breastfeeding in Japanese literature. On the first day, from 17:00 to 20:30, we welcomed prominent scholars in the field of Japanese literature. On the second day, from 14:00 to 16:00, Fukazawa Ushio and Yamazaki Nao-Cola joined us to discuss the representation of bodies and families in their literary works.

On the first day, this online event was conducted in Japanese and English with simultaneous interpretation; the conversation between Fukazawa Ushio and Yamazaki Nao-Cola was held only in Japanese. The webinar was open to the public, and participants from both Japan and abroad joined it.

We started our symposium with Dr. Saeko Kimura's presentation. Recently, Dr. Kimura, a professor at Tsuda University, has extensively published on post-disaster literature; her publications include the book *Post-Disaster Literature: Toward a New Japanese Literature* (Seidosha, 2013) and *'Post-disaster Literature' as World Literature* (Akashi Shoten, 2021). She is also the author of the book *Breasts for Whom? Sexuality and Authority in Japanese Medieval Tales* (Shinyōsha, 2009). In her presentation, she discussed the representation of pregnancy, childbirth, and breastfeeding in classical Japanese literature.

Dr. Kimura's talk was followed by Dr. Amanda C. Seaman's discussion of the problem of pain in Kawakami Mieko's *Pregnancy Diary* (Kimi wa akachan, Bungeishunjū, 2014). Dr. Seaman is a prominent scholar in the field of body

representation in Japanese literature. She is also the author of the book *Writing Pregnancy in Low Fertility Japan* (University of Hawai'i Press, 2016), where she explored the representation of pregnancy and childbirth in the texts of Yosano Akiko, Tsushima Yuko, Kakuta Mitsuyo, and Tadano Miako, among others.

After a short break, we started our second session with Dr. Juliana Buriticá Alzate. Dr. Buriticá Alzate is a Departmental Lecturer of Modern Japanese Literature at the University of Oxford and a literary translator; she is also a research fellow at the Center for Gender Studies at ICU. In her research, she explores representations of parenting and related embodied experiences in contemporary Japanese fiction, such as Kawakami Mieko's *Chichi to ran* (Bungeishunjū, 2008) and Kirino Natsuo's *Tokyo Jima* (Shinchōsha, 2008). In her presentation, she analyzed the relationship between breastfeeding, folklore, and nature in Oyamada Hiroko's 'Spider Lilies' (Higanbana, trans. Juliet Winters Carpenter, *Granta*, 2014) and Matsuda Aoko's "Enoki" (Enoki no isshō, trans. Polly Barton, *Granta*, 2020).

Dr. Anna Specchio, a research fellow in Japanese language and literature at the University of Turin, Italy, discussed the representation of fake pregnancy in Yagi Emi's *Diary of a Void* (Kūshin techō, trans. Lucy North and David Boyd, Harvill Secker, 2022). Dr. Specchio's research focuses on the use of communication technologies and reproduction technologies in contemporary Japanese women's writing, such as Murata Sayaka and Wataya Risa. Her Italian translation of Yagi Emi's novel was published in 2022.

Finally, Dr. Letizia Guarini, who was also the coordinator of the event, analyzed the "breast-is-best" ideology and care in Fukazawa Ushio's *In the Country of Breasts* (Chibusa no kuni de, Futabasha, 2020). At the time of the event, Dr. Guarini was Assistant Professor at CGS; she is now an Assistant Professor at Hosei University, where she teaches queer theory and Japanese contemporary literature. Her research focuses on the father/daughter relationship in the works of contemporary authors such as Kakuta Mitsuyo and Yū Miri.

After the end of the second session, we welcomed our discussant, Dr. Natsumi Ikoma. Dr. Ikoma is a professor of Japanese literature, contemporary British literature, feminist theory, comparative literature, and gender studies at ICU and vice-director of CGS. Her recent research focuses on the narrative of posthuman/postwoman in, and about Japan. Dr. Ikoma's comments and questions were followed by the Q&A section; albeit the circumstances that forced us to hold this event online, participants actively joined our discussion.

On November 14th, we continued talking about the representation of pregnancy, childbirth and breastfeeding with authors Fukazawa Ushio and Yamazaki Nao-Cola.

Fukazawa Ushio made her literary debut in 2012 with the story "Kanae no obasan," which was awarded the By Women for Women Restricted-18 Literary Prize (Onna ni yoru onna no tame no R-18 bungakushō) and later included in *Hansaran. Ai suru hitobito* (published in 2013 by Shinchō Bunko with the title *En wo yu hito*). Fukazawa is also the author of *Ranchi ni ikimashō* (Tokuma Shoten, 2014), *Hitokado no chichi e* (Asashi Shinbun Shuppansha, 2015), *Mamatachi no gekokujō* (Shōgakukan, 2016) and *Umi o daite tsuki ni nemuru* (Bungeishunjū, 2018). In her long novel *Chibusa no kuni de* (2020), she tackled the issues of breastfeeding and motherhood. The paperback edition of this novel, published in 2022, contains a commentary written by Dr. Saeko Kimura, who was one of the panelists of this two-day symposium.

Yamazaki Nao-Cola made her debut in 2004 with the novel *Hito no sekkusu o warau na* (Kawade Shobō Shinsha), which was awarded the Bungei Prize and nominated for the Akutagawa Prize. Yamazaki's novels include *Ukiyo de ranchi* (Kawade Shobō Shinsha, 2006), *Kono yo wa futari gumi de wa dekiagarana* (Shinchōsha, 2010) and *Utsukushii kyori* (Bungeishunjū, 2017) among many others. *Ribon no otoko* (Kawade Shobō Shinsha, 2019) and "Funyū no yume" (included in *Nikutai no jendā o warau na*, Shūeisha, 2020) are only some examples of Yamazaki's depiction of new types of family life.

In their conversation, Fukazawa Ushio and Yamazaki Nao-Cola discussed

not only pregnancy, childbirth, and breastfeeding in literary fiction, but also gender norms in Japanese society, sexual reproductive health and rights (SRHR), care, and the categories of “mother” and “father” (or “woman” and “man”) that have been self-evident within the modern family.

Prior to the symposium, CGS held a reading group, where we discussed Fukazawa’s *Chibusa no kuni de* and Yamazaki’s “Funyū no yume” with ICU students. On the day of the event, there were questions about the names of the characters, specific scenes, and other details, providing an opportunity to further deepen understanding of the works.

While this symposium aimed at discussing the stories of pregnant bodies, birth-giving bodies, and breastfeeding bodies, there are many stories, as well as many bodies, that were not the subject of our study; hence, some writers, such as Uchida Shungiku, Itō Hiromi, Kakuta Mitsuyo, to name a few, were not included in our analysis. Moreover, while this event addressed the themes of pregnancy, childbirth, and breastfeeding from various perspectives and explored a variety of “narrating bodies,” unfortunately, the analysis of queer women, non-binary and trans people’s experiences of reproduction, childbirth, and childrearing, as well as the analysis of narratives about abortion, were not covered. Yet, we need to emphasize that there are other bodies and other narratives of pregnancy, childbirth, and breastfeeding that deserve more scholarly attention.

イベント報告

ヒストリー・レッスンズ： 日本におけるフェミニスト／ クィア映画キュレーションの現在

企画・共催：

シュテファン・ヴェーラー (CGS 研究員)・subversive records

報告者：

浜崎史菜 (subversive records)

2022年3月6日に開催された本イベントは、フェミニスト／クィア映画論とフェミニスト／クィア映画キュレーションを現在日本で実践している専門家をお招きし、「ジェンダー」と「セクシュアリティ」の問題が「映画」とその「キュレーション」においてどのように交差してきたかについて考え、日本におけるフェミニスト／クィア映画キュレーションの“今”に光を当てた。すべてオンライン (Zoom ウェビナー) で実施された本イベントの参加者は191名であった。

フェミニスト／クィア映画キュレーションとはどのように政治的な実践なのか。映画キュレーションにおいてフェミニズムとクィアな問題意識はどう交差してきたのか。この交差について考察を深めるため、歴史から他者化されてきたレズビアン女性の姿をアーカイブ資料の中に探し出し、「歴史」の再考を迫るバーバラ・ハマーの映像作品『ヒストリー・レッスンズ』(2000年)を西山敦子氏の日本語字幕付きで国内初配信し、それを通して、フェミニスト／クィア映画キュレーションの限界と可能性について検討した。

共催・企画したシュテファン・ヴェーラー氏のイントロダクションでは、シュラミス・ファイアストーン引用と共に、フェミニストの芸術的表現が「正史」に刻まれてこなかったことが喚起された。またフェミニストの芸術的表現やその歴史さえも必ずしも包括的ではなく、周縁としての他者をつくりだしてきたことにも注意を促された。さらに、フェミニスト映画運動が起こった1970年代と比較し、今日はフェミニスト・クィア映画ならびにフェスティバル等上映の機会が

増えたように見受けられるが、それは真に多様性を反映するものなのか、資本主義・商業主義と手を組んだ表層的なものとなっていないかと批判的議論の必要性が投げかけられた。それらの問題意識を共有した上で、本イベントの目的であるフェミニスト／クィア映画キュレーションの「現在」を多角的に検証することが喚起された。

続いて、subversive recordsの浜崎史菜は、「表象のアクティヴィズム：フェミニスト／クィア映画運動の概歴」というタイトルで発表を行なった。イベントのタイトルとなっている「ヒストリー・レッスンズ」に立ち返り、いかに「歴史」が「表象」と強く結びつき、それによって「表象」が「生存」に繋がる問題であるかが指摘された。「歴史」が取りこぼしてきた「表象されなかった存在」に注意を向ける重要性を説きながら、1960年代後半から1970年代に起きたフェミニスト映画運動におけるフェミニスト映像作品やそれらにおけるクィア性は、これまでドミナントな言説の中で他者とされてきた、眼差される対象としての女性やクィアな存在が表象、つまり、主体の位置を獲得することと同義であったと説かれた。それは対抗言説／表象を作り出す政治的活動であり、男性中心主義的な視覚の政治を挫くものであったのだ。しかし、それと同時に、抵抗のためにカメラが使用される時でさえ、どのような存在が包摂され、どのような存在が排除されているかについて常に注意を向ける必要があると喚起された。

次に現代日本でフェミニスト／クィア映画キュレーションはどのように実践されているのか、subversive recordsメンバーであり映画担当学芸員の中西香南子氏が「上映の場から考えるフェミニスト／クィア映画キュレーションの実践と課題」と題して発表を行なった。日本におけるフェミニスト／クィア映画キュレーション史を検証するにあたり、予算がついた上映会についてはプログラムやチラシが残っており、アーカイブを見ることができるが、そうでないものに関しては存在すらも分からないという「歴史」の“脆さ”や“不完全さ”が指摘された。例として1977年に行われた出光真子や道下匡子らフェミニスト・ビデオ作家らの作品が上映された「女性映画作家フェスティバル」があることが挙げられた。中西氏が映画キュレーションをはじめた2010年代は、ミニシアターの数の減少と重なった時期であり、それがフェミニスト・クィア映画上映の機会の減少と関わりがあるのではないかと指摘された。中西氏自身がキュレーションを務め、

『ボーン・イン・フレイムズ』（1983年）を日本初上映した「Kawasaki Feminist Film Month 3月女性史月間特集」（2019年）での実践から、いかに予算と集客を集め、次の企画に繋ぐことができるかといったキュレーション実践者ならではの現実的な側面が報告された。フェミニスト映画とクィア映画の接続の可能性を探ったsubversive recordsによる「フェミニスト・クィア映画月間：バーバラ・ハマー」（2021年）では、インディペンデントに実行されたが、国家や体制に包摂されることに抵抗しながら、いかに資金をインディペンデントな活動体として獲得していくのかというクリティカルな指摘がなされた。最後に、70年代のフェミニスト映画運動のように、上映だけでなく、観客との対話とアーカイブとしての映画を通したゆるやかなネットワークの形成の重要性が説かれた。また、ある特定の作品を「選ぶ」というキュレーションの作業は、他の作品を「選ばない」ことをも意味しており、そのようなキュレーションのある種暴力的な側面について自覚的でありたいという中西氏の意志が語られた。

続いてnormal screenの秋田祥氏が「半地下のパラダイス—存在を確認する光の集いを緩やかに組み立てる」と題して発表を行なった。2015年からはじまったnormal screenは、地域や場所を越えたクィアな連帯の可能性を持つ映像作品をセレクトし、LGBTの人が安心して共に鑑賞できる場を目指して2015年からはじまった。映像作品を介したエイズ・アクティヴィズムを行う非営利団体Visual AIDSの映像上映を振り返りながら、「沈黙は死」という言葉が、「黙っては見殺しにされてしまう」という意味だけではなく、「沈黙を強いられた、語られなかった存在や経験は無かったことにされてしまう（アーカイブとして残らない）」ことも含意していることを重要な点として提起し、その「沈黙」に目を向けることの重要性が説かれた。さらに、アーカイブに関連して、normal screenの上映活動を振り返りながら、上映イベントと作品の記録をウェブ上で明示することの意義が語られた。今後の課題としては情報保障のさらなる充実を図ることや日本における検閲について考える機会を設けることが挙げられた。最後に、トークタイトルの「存在を確認する光の集い」とは、過去に制作された映画の光を劇場で反射しながら、クィアな存在が現在をいかに生きるかを思索する場をつくる意が込められていることが語られた。

バーバラ・ハマーの『ヒストリー・レッスンズ』配信前に、subversive records

の井上絵美子氏により「バーバラ・ハマー as ボルノ・ドクター」と題し、『ヒストリー・レッスンズ』の紹介がなされた。ハマーがいかに歴史における不／可視化の問題、特に、レズビアンが歴史の中で抹消されてきたかに関心を持っていたかが語られ、ヒストリー三部作と呼ばれる『ナイトレイト・キス』(1992)や『テンダー・フィクションズ』(1995)、そして『ヒストリー・レッスンズ』(2000)において不可視化された存在を可視化し、歴史の「証言」とされるアーカイブを戦略的に批判したことが指摘された。1969年のストーンウォール以前のレズビアン表象を祖上に載せた『ヒストリー・レッスンズ』は、広告や宣伝映画等様々なアーカイブを用い、それらのクイアな読みの可能性を展開させるものであった。『ヒストリー・レッスンズ』はボルノグラフィや雑誌等を含む視覚的資料のみならず、聴覚資料も効果的に用いられ、バイセクシュアルであったブルース・シンガーのベッシー・スミス、レズビアン雑誌を編集していたリサ・ベン、そしてパンクシーンで活躍していたレズビアン人のグレッチェン・フィリップスらの曲が使用されていることが説明された。井上氏のトークタイトルにある「ボルノ・ドクター」という語は、ヘテロセクシャル男性の欲望の表出としてレズビアン表象の多くが偏ったものとなっていることに対し、それを揶揄する形で、権力者や政権を意図的に操るために、歪曲した報道を繰り返すことを指す「スピン・ドクター」という言葉に掛けてハマーによって『ヒストリー・レッスンズ』のオリジナルタイトルとして用いられた。しかし、「ボルノ」という語が助成金先より検閲対象となり、『ヒストリー・レッスンズ』というタイトルに変更されたという。

また、映画配信に先立ち、日本語字幕翻訳を担当された西山敦子氏が作成された作品と字幕に関する豊富な補足資料が配布され、『ヒストリー・レッスンズ』は配信された。

映画配信後は、同志社大学の菅野優香氏が「レズビアン・スクリーン：バーバラ・ハマーによる実験映画史」と題した発表を行なった。菅野氏はハマーがレズビアン人の歴史の複数性を作品で表すとともに、男性中心主義的な実験映画の歴史やエッセンシャル・シネマの枠組みに批判的に介入しているのではないかと指摘した。そして、レズビアン表象が欠如した「空白のスクリーン」にレズビアン人の身体と歴史を映し出すことをハマーは作家人生を通じて取り組んだのではないかと

と提示した。エッセンシャル・シネマの「歴史」から排除されていたハマーの作品は、作品上映のオルタナティブな場として、フェミニスト・ブックストアやウィメンズ・コーヒーハウス、女性学の授業の場等で上映された。「不可視の歴史三部作」に関しても説明がなされた。不可視化されてきたレズビアン、ゲイの歴史をテーマとした『ナイトレイト・キス』（1992）はコラージュやモンタージュを用い、窺視的なまなざしを避けるように断片的に歴史を描き出し、自伝的な『テンダー・フィクションズ』（1995）では、眼差される対象としてではなく、イメージの作り手（主体）としてのハマーの姿が前景化される。また本イベントで配信された『ヒストリー・レッスンズ』（2000）ではレズビアンに関するネガティブな表象をあえて反復的に用い再領有することで、クィアな批評性が浮かび上がる。また、ハマーが大きな影響を受けたマヤ・デレン、そしてハマーと交友のあったジェーン・ウォデニング（ブラッケージ）について語られた。デレンについては、作品における肉体性の重要性、デレンの作った概念である創造的地理（creative geography）、そして作家自らが作品に出るパフォーマーとしての側面を受け継いだのではないかと指摘された。ジェーン・ウォデニングに関し、ハマーは、*Jane Brakhage*（1974）において、スタン・ブラッケージとは異なる視点から彼女を撮ったと言えるという。最後に、菅野氏は、ハマーの描こうとした歴史とは、形式主義に抗った実験映画のカウンター・ヒストリーであり、またその歴史は集合的に書くレズビアン／フェミニスト・ヒストリーであったのではないかと提起した。

質疑応答では、フェミニスト映画運動の射程を北米・イギリス等英語圏に限定せず、様々な地域のフェミニスト・クィア映画を調べ、上映していくことの重要性が再確認された。また、ビデオ作品に関しては、メディアムの老朽化から作品へのアクセスが難しくなることから早急なデジタル化が求められていることが話題に上った。さらに、上映会における情報保障の重要性や上映会を続けるにあたっての現実的な資金の工面の必要性について共有された。

今日日本においてフェミニスト／クィア映画キュレーションを実践する上で直面する困難が提起されながら、まさにフェミニスト／クィア映画キュレーションの「現在」に迫るイベントとなった。「ヒストリー・レッスンズ」というタイトルのように、決して「中立」ではない「歴史」やアーカイブから何を読み取り、

いかにクィアやフェミニストのアクティヴィスト的实践に繋げていくのか、それぞれの登壇者の発表及びビハマーの作品からヒントを得られたように思う。

Event Report

History Lessons **—The Present of Feminist/ Queer Film Curation in Japan**

Co-organisers:

Stefan WÜRRER (CGS Researcher) • **subversive records**

Reporter:

Fumina HAMASAKI (subversive records)

For this event (held on the 6th of March 2022), we invited experts and practitioners of feminist/queer film theory and curation in Japan to discuss how issues of gender and sexuality intersect within the realm of film and its curation, and to shed light on the present of feminist/queer film curation in Japan. This event was conducted online (Zoom webinar) and there were 191 participants.

In what ways is feminist/queer film curation a political practice? How have feminist and queer issues intersected in film curation? One way we approached these issues was through Barbara Hammer's *History Lessons* (2000). Searching for images of lesbian women — one of History's Others — in archival footages and documents, Hammer's *History Lessons* was streamed for the first time in Japan with Japanese subtitles by Atsuko Nishiyama. This film offered us an opportunity to discuss the limits and possibilities of feminist and queer film curation.

The event started with the introduction by Stefan Würrer, who co-organised the event. Citing the words by Shulamith Firestone, Würrer suggested that feminist art practices are often excluded from "history". It was also pointed out that feminist art expression and its history are not necessarily always inclusive and produce the excluded "others". Compared to the 1970s

when the feminist film movement emerged, it seems that there is an increase in opportunities of feminist/queer film festivals and screenings. However, Würrer questioned if that truly reflects diversity, and whether it is superficial phenomenon connected with capitalism and commercialism. By sharing these concerns, Würrer evoked the speakers and audience to consider the “present” of feminist/queer curation from different perspectives.

Fumina Hamasaki (a member of subversive records) gave a presentation titled “Activism for/against Representations: A Brief History of the Feminist/Queer Film Movements”. Hamasaki pointed out how “history” is connected with “representation”, and how “representation” plays a significant role for “survival”. Invoking the importance of paying attention to what was not represented and excluded from the “history”, Hamasaki argued that the feminist films and queerness emerged from the feminist film movement in the late 1960s and 1970s aimed for women and queers as the “others” and the “objects” to be looked at in the dominant discourse to acquire their own representations and subjectivities. It is a political act to create counter-discourses/representations and defy the politics of phallogocentrism. At the same time, however, Hamasaki noted that even when the camera is used for feminist and queer resistance, it is important to always consider who is included and excluded from the practice.

Regarding how feminist/queer curation is practiced in Japan today, Kanako Nakanishi (film programmer and a member of subversive records) gave a presentation titled “Practice and Challenge of Feminist/Queer Film Curation in Japan”. Nakanishi pointed out precarity and imperfection of archival “history” because when it comes to researching the history of feminist/queer film curation, whereas film screening events with budgets are likely to be archived with programs and flyers, for those without budget, we would never know if they even took place or existed. As an example of feminist film curation, Nakanishi introduced “Women Filmmakers Festival”, which screened the works of artists such as Mako Idemitsu and Kyoko Michishita. Nakanishi

started film curation in the 2010s and it is when there was a decrease in the number of “mini theatres” in Japan. Nakanishi pointed out this may be related to the decrease in the number of screening feminist/queer films. Nakanishi presented a practical report such as the ways to gain budgets and audience, and how to lead to a next screening project, based on her film curatorial practice: “Kawasaki Feminist Film Month” (2019) which screened *Born in Flames* (1983) with Japanese subtitles for the first time in Japan. Referring to subversive records’ “Feminist/Queer Film Month: Barbara Hammer” (2021), Nakanishi made a critical point that how we could possibly gain budget as an independent collective while resisting to be politically subsumed by the country and establishment. In the end, Nakanishi argued for the significance of creating a network through not only film screening but also interaction with the audience like the feminist film movement in the 1970s did. Nakanishi also suggested that curation—an act of “choosing” a specific work—is also an act of “not choosing” other works, and that she would like to be aware of such violent aspect of curatorial practice.

Akita Sho (normal screen) gave a presentation titled “A Paradise in the Semi-Underground: Loosely Assembling Existence-Affirming Bundles of Light”. Normal screen started in 2015 and selects films which have potential for queer solidarity beyond areas and space, aiming to create a space where LGBT people watch films safely. Referring to a non-profit organisation Visual AIDS, which engages in activism through film screenings, Akita pointed out that “Silence = Death” means not only that “if you remain silent, you would be left to die,” but also “those who are forced to be silenced would be erased (from archive/history)”. Thus, Akita argues for the significance of paying attention to the “silence”. In relation to archive, Akita, looking back to the film screening events of normal screen, emphasised the importance of listing up the records of the events and films on the website of normal screen. As future tasks, Akita mentioned the necessity to enhance information accessibility, and also create an opportunity to consider censorship in Japan. At the end of the

presentation, it was told that the “Assembling Existence-Affirming Bundles of Light” in the title implies how queer existences create a space to live and speculate by reflecting the light of a film in theatre.

Before online streaming of Barbara Hammer’s *History Lessons*, Emiko Inoue (a member of subversive records) gave a presentation titled “Barbara Hammer as Porn Doctor: An Introduction to *History Lessons*”, introducing Hammer’s *History Lessons*. Inoue explained how Hammer was interested in in/visibility — especially erasure of lesbians — in history, and pointed out that Hammer’s History Trilogy such as *Nitrate Kisses* (1992), *Tender Fictions* (1995) and *History Lessons* (2000) makes the invisible visible and strategically criticizes archive as “testimony” of history. *History Lessons* focuses on the representations of lesbians before the Stonewall Riots in 1969 and by using various archives such as advertisements and propaganda films, it seeks to open up the queer reading of them. *History Lessons* deploys not only the visual resources such as pornographies and magazines but also the audio resources such as the songs by Bessie Smith (who was a bisexual and blues singer), Lisa Ben (an editor of lesbian magazine), and Gretchen Phillips (a lesbian and punk musician). Inoue explained that “Porn Doctor” in the title of the presentation was an original title of *History Lessons*, which Hammer took an idea from “spin doctor” (meaning an act of broadcasting distorted reports in order to manipulate a person in power or government) so as to criticize the fact that many lesbian representations are created out of desire of heterosexual men. However, the word “porn” was censored by its funding body.

Prior to the film streaming of *History Lessons* (2000), documents of rich supplementary information regarding the film and subtitles made by Atsuko Nishiyama were circulated.

After the film streaming, Professor Kanno Yuka (Doshisha University) gave a presentation titled “Lesbian Screen: A History of Experimental Film by Barbara Hammer”. Kanno argued that Hammer’s films represent plurality of lesbian histories and also critically question the male-centred history of

experimental cinema and framework of essential cinema. Kanno suggested that throughout her life as a filmmaker Hammer projected bodies and histories of lesbians onto “blank screen”, that lacks lesbian representations. Hammer’s works, which were excluded from the “history” of essential cinema, were screened in alternative space such as feminist books stores, women’s coffee house, and classroom of women’s studies class. “Trilogy of invisible histories” was also explained. *Nitrate Kisses* (1992) focuses on lesbian and gay histories that were made invisible as its main theme and shows histories fragmentally by using collages and montages in order to eschew the voyeuristic gaze. *Tender Fictions* (1995) has autobiographical nature and foregrounds Hammer as an image-maker (subject), not the object to be looked at. *History Lessons* (2000), which was streamed in the event, intentionally reappropriates negative representations of lesbians and produces queer criticisms. Furthermore, Kanno introduced Maya Deren, whom Hammer was strongly influenced by, and Jane Brakhage (Wodening), who Hammer was friends with. Regarding the significance of Deren, Kanno pointed out that Hammer followed Deren by inheriting bodiliness in works, the idea of creative geography (which Deren created) and the role of filmmaker as performer. As for Jane Wodening, Kanno maintained that Hammer filmed her in *Jane Brakhage* (1974) from a different perspective to Stan Brakhage. In the end, Kanno suggested that histories that Hammer attempted to show are counter-histories against formalism and experimental cinema, and they are collective histories of lesbian and feminist histories.

In Q&A session, the importance of investigating feminist/queer films in different areas –not limited to north America or the UK—and of screening them was discussed. Further, concerning video works, due to deterioration of VHS as medium, it was pointed out that digitization of the video works is urgent task. Also, the significance of enhancing information accessibility and of acquiring budget to continue film screening events was shared and discussed.

The event indeed closely approached “the present” of feminist/queer

curation by discussing the difficulties in the practices of feminist/queer film curation in Japan today. As the title of the event “History Lessons” indicates, from each presenter’s presentation and Hammer’s film *History Lessons*, the event gave us a hint of what we should read from “history” and archives, which are never “neutral”, and how we could possibly connect them to the practice of feminist and queer activism.

イベント報告

フェミニストとして書き、訳し、出版する

コーディネーター：レティツィア・グアリーニ

(元 CGS 研究所助教)

なぜ私たちはフェミニズムに関わる本を書き、翻訳し、出版する必要があるのか？ この問いに答えるべく、2022年3月12日（土）に国際基督教大学のジェンダー研究センターと教育研究所の共催で、「フェミニストとして書き、訳し、出版する」というウェビナーが開催された。小澤身生子氏、松尾亜紀子氏、松田青子氏、フリアナ・ブリティカ・アルサテ氏をお招きし、さまざまな観点からフェミニズムと本について対談が行われた。

フェミニズムに関わる書籍の制作と消費について話し合いながら、書くこと、訳すこと、出版すること、この3つの観点から活発な議論が行われた。文学研究、翻訳研究、ジェンダー研究、出版マーケティングなどのさまざまな分野からの視点を提供することによって学際的なアプローチを試みた。そうすることで文芸創作と翻訳のつながり、また本を作る過程における出版社の役割についても理解を広げられるのではないかと、イベントのコーディネーターとしての期待があった。

このオンラインイベントには、日本のみならず、海外からの参加者もいた。イベントは同時通訳で、英語と日本語で開催された。

本イベント報告では、登壇者の方々を紹介する。また、最後にイベント当日参加者とも共有された「おすすめのフェミニズムの本」のリストを載せる。

小澤身生子は、通訳、そして翻訳家として活躍している。東京大学大学院人文社会系研究科修士号取得、博士課程満期修了の後、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンで修士号を取得した。訳書にリン・ディン『アメリカ死にかけ物語』（河出書房新社、2018年）、リン・エンライト『これからのヴァギナの話をしよう』（河出書房新社、2020年）、ウォルター・テヴィス『クイーンズ・ギャンビット』（新潮社、2021年）、ジェニー・ザン『サワー・ハート』（河出書房新

社、2021年) などがある。カルメン・マリア・マチャドの作品も翻訳し、2020年に『彼女の体とその他の断片』(共訳、エトセトラブックス)、2022年に『イン・ザ・ドリームハウス』(エトセトラブックス)が刊行された。

松尾亜紀子は、出版社で15年間編集者として勤めた後、2018年にフェミニズム専門出版社「エトセトラブックス」を設立した。現在エトセトラブックスの代表・編集者として活躍している。2019年にフェミニストマガジン「エトセトラ」が創刊された。他に同社の刊行物は、牧野雅子『痴漢とはなにか 被害と冤罪をめぐる社会学』(2019年)、ベル・フックス『フェミニズムはみんなのもの 情熱の政治学』(堀田碧訳、2020年)、カン・ファギル『別の人』(小山内園子訳、2021年) などがある。2021年からフェミニズム関連書籍を集めた書店「エトセトラブックス BOOKSHOP」をスタートした。性暴力の根絶を訴えるフラワーデモ呼びかけ人のひとりでもある。

松田青子は、作家、翻訳家として活躍している。2013年にデビュー作『スタッキング可能』(河出書房新社)が三島由紀夫賞および野間文芸新人賞候補になった。2019年に短編「女が死ぬ」(『女が死ぬ』中央公論新社、2021年)がシャーリー・ジャクソン賞の候補として選ばれた。2020年に英訳版『おばちゃんたちのいるところ』(中央公論新社、2019年)の英訳版がTIME誌の2020年の小説ベスト10に選出された。同作はLAタイムスが主催するレイ・ブラッドベリ賞の候補になったほか、ファイアークラッカー賞の小説部門、世界幻想文学大賞の短編集部門を受賞した。カレン・ラッセル、アメリア・グレイ、カルメン・マリア・マチャドなどの作品を翻訳している。

フリアナ・ブリティカ・アルサテは、オックスフォード大学で近代日本文学の講師として務めながら翻訳家としても活躍している。国際基督教大学のジェンダー研究センター研究員でもある。クィア理論とフェミニスト理論を用いて日本現代小説における子育ての表象、またそれに関する身体的な体験について研究している。松田青子『おばちゃんたちのいるところ』をスペイン語に翻訳した(*Donde viven las damas salvajes*, Quaterni, 2022)。現在、伊藤比呂美の詩集を翻訳している。

本イベントの司会を務めたレティツィア・グアリーニ(筆者)は、イベント当時は国際基督教大学ジェンダー研究センター助教であった。現在は法政大学国際

文化研究科の講師としてクィア・スタディーズや日本現代文学を教えている。日本現代文学における家族、とりわけ父娘関係、また授乳や性暴力の表象について研究している。

私たちがおすすめするフェミニズムの本 (by小澤身和子氏、松尾垂紀子氏、松田青子氏、フリアナ・ブリティカ・アルサテ氏、レティツィア・グアリーニ氏)

サラ・アーメッド『フェミニスト・キルジョイ：フェミニズムを生きるということ』飯田麻結訳、人文書院、2022年。

鄭喜鎮編著『#MeTooの政治学 コリア・フェミニズムの最前線』キムリ・イスル訳、大月書店、2021年。

リン・エンライト『これからのヴァギナの話をしよう』小澤身和子訳、河出書房新社、2020年。

フラワーデモ編『フラワーデモを記録する』エトセトラブックス、2020年。

ベル・フックス『フェミニズムはみんなのもの 情熱の政治学』堀田碧訳、エトセトラブックス、2020年。

池辺葵『プリンセスメゾン』小学館、2015年~2019年。

伊藤比呂美『河原荒草』思潮社、2005年。

伊藤詩織『Black Box』文藝春秋、2017年。

ミン・ジン・リー『パチンコ』池田真紀子訳、文藝春秋、2020年。

カン・ファギル『別の人』小山内園子訳、エトセトラブックス、2021年。

川上未映子『夏物語』文芸春秋、2019年。

キム・ホンビ『女の答えはピッチにある 女子サッカーが私に教えてくれたこと』小山内園子訳、白水社、2020年。

桐野夏生『女神記』角川書店、2008年。

小谷真理『性差事変——平成のポップ・カルチャーとフェミニズム』青土者、2021年。

松田青子『おばちゃんたちのいるところ - Where the Wild Ladies Are』中央公論新社、2016年。

村田沙耶香『コンビニ人間』文藝春秋、2016年。

ロビン・スティーブンソン『中絶がわかる本 MY BODY MY CHOICE』塚原久美訳、アジュマブックス、2021年。

高野ひと深『ジーンブライド』祥伝社、2021年。

利根川真紀編訳『女たちの時間—レズビアン短編小説集』平凡社、1998年。

ヴァージニア・ウルフ『自分だけの部屋』川本静子訳、みず書房、2013年。

弓削尚子『はじめての西洋ジェンダー史 家族史からグローバル・ヒストリーまで』山川出版社、2021年。

ユン・ウンジュ『女の子だから、男の子だからをなくす本』すみ訳、エトセトラブックス、2021年。

Cathy Park Hong, *Minor Feelings: An Asian American Reckoning*, One World, 2020.

Fernanda Melchor, *Hurricane Season*, trans. Sophie Hughes, New Directions, 2020.

Event report

Writing, Translating, and Publishing Feminist Books

Coordinator: Letizia GUARINI

(Former Assistant Professor, CGS)

Why do we need to write, translate, and publish feminist books?

With this question in mind, on March 12th, 2022, we welcomed Ozawa Miwako, Matsuo Akiko, Matsuda Aoko, and Juliana Buriticá Alzate to a virtual event hosted by the Center for Gender Studies (CGS) and co-hosted by the Institute for Educational Research and Service at International Christian University (ICU).

This online event was conducted in Japanese and English with simultaneous interpretation. It was open to the public, and participants from both Japan and abroad joined our webinar.

In this event, we discussed the production and consumption of feminist books from three different perspectives: writing, translating, and publishing. We gave an interdisciplinary approach to the event, offering perspectives from the field of literature, translation studies, gender studies, and publishing marketing. The aim of this event was to offer new understandings of the connection between creative writing and translation, and the role of publishers in the process of making books.

This event report includes a brief introduction of the guest speakers and a list of recommended books we shared online with the participants during the webinar.

Ozawa Miwako holds an M.A. in Humanities and Sociology at the University of Tokyo and finished the Ph.D. program at the same university.

She also holds an M.A. at the University College London. After working as an editor, she became an interpreter and translator. She has translated Linh Dinh's *Postcards from the End of America* (Seven Stories Press, 2017), Lynn Enright's *Vagina: A Re-education* (Atlantic Books, 2020), Walter Tevis' *The Queen's Gambit* (Random House, 1983), and Jenny Zhang's *Sour Heart: Stories* (Lenny, 2017). She has co-translated Carmen Maria Machado's *Her Body and Other Parties* (Graywolf Press, 2017). Her translation of Machado's *In the Dream House* (Graywolf Press, 2019) was published in 2022 by etc.books.

Matsuo Akiko is CEO and editor of etc.books. After working as an editor at a publishing company for 15 years, in 2018, she established the feminist publishing company etc.books. In 2019, she launched the feminist magazine *Etcetera*. Works published by etc.books include Makino Masako's *Chikan to wa nanika? Higai to enzai wo meguru shakaigaku*, bell hooks' *Feminism Is for Everybody. Passionate Politics* (South End Pr, 2000; Japanese translation by Hotta Midori), and Kang Hwagil' *A Different Person* (Hani Book, 2017; Japanese translation by Osanai Sonoko). Matsuo Akiko is also one of the organizers of Flower Demo, a movement calling for the eradication of sexual violence.

Matsuda Aoko is a writer and translator. In 2013, her debut book, *Stackable* (Kawade Shobō Shinsha), was nominated for the Mishima Yukio Prize and the Noma Literary New Face Prize. In 2019, her short story 'The Woman Dies' (from the collection *The Woman Dies*, Chuō Kōron Shinsha, 2021), was shortlisted for the Shirley Jackson Award. Her collection of stories *Where the Wild Ladies Are* (Chuō Kōron Shinsha, 2019), translated into English by Polly Barton (Soft Skull, 2020), was included on TIME's list of the 10 Best Fiction Books of 2020. *Where the Wild Ladies Are* was also shortlisted for the Ray Bradbury Award for Science Fiction, Fantasy & Speculative Fiction sponsored by the LA Times, and won the Firecracker Award (fiction category) and the World Fantasy Literary Award (best collection category). Matsuda Aoko has translated work by Karen Russell and Amelia Gray into Japanese, and she has also co-translated Carmen Maria Machado's *Her Body and Other Parties*.

Juliana Buriticá Alzate is a Departmental Lecturer of Modern Japanese Literature at the University of Oxford and a literary translator; she is also a research fellow at the Center for Gender Studies at International Christian University. Her research brings together queer and feminist theory to explore representations of mothering and related embodied experiences in contemporary Japanese fiction. She has translated Matsuda Aoko's *Where the Wild Ladies Are* into Spanish (*Donde viven las damas salvajes*, Quaterni, 2022) and is currently working on a collection of poetry by Itō Hiromi.

The event was coordinated by **Letizia Guarini**, former Assistant Professor at CGS. Dr. Guarini is an Assistant Professor at the Graduate School of Intercultural Communication, Hosei University, where she teaches queer studies and contemporary Japanese Literature. Her research focuses on the father-daughter relationship in contemporary Japanese literature. She is also interested in the representation of breastfeeding and sexual violence in contemporary fiction.

Our book recommendations (selected by Ozawa Miwako, Matsuo Akiko, Matsuda Aoko, Juliana Buriticá Alzate, and Letizia Guarini)

Sara Ahmed, *Living a Feminist Life*, Duke University Press, 2017.

Chiyon Fuijin (ed.), *#MeToo No Seiji Gaku Korea Feminism No Saizensen*, translated by Kimuri Isuru, Ōtsuki Shoten, 2021.

Lynn Enright, *Vagina: A Re-education*, Allen & Unwin, 2019.

Furawā Demo (ed.), *Furawā demo wo kiroku suru*, etc.books, 2020.

Cathy Park Hong, *Minor Feelings: An Asian American Reckoning*, One World, 2020.

bell hooks, *Feminism is for Everybody. Passionate Politics*, South End Press, 2000.

Ikebe Aoi, *Princess Maison*, Shōgakukan, 2015–2019.

Itō Hiromi, *Wild Grass on the Riverbank*, translated by Jeffrey Angles, Action Books, 2015.

- Itō Shiori, *Black Box: The Memoir That Sparked Japan's #MeToo Movement*, translated by Allison Markin Powell, Feminist Press, 2021.
- Kang Hwagil', *A Different Person*, translated by Osanai Sonoko, etc. books, 2021.
- Kawakami Mieko, *Breasts and Eggs*, translated by David Boyd and Sam Bett, Europa Editions, 2020.
- Kim Honbi, *Onna no kotae wa picci ni aru. Joshi sakā ga watashi ni oshiete kureta koto*, translated by Osanai Sonoko, Hakusuisha, 2020.
- Kirino Natsuo, *The Goddess Chronicle*, translated by Rebecca Copeland, Grove Press, 2014.
- Kotani Mari, *Jendā jihen. Heisei no poppu karuchā to feminizumu*, Seidosha, 2021.
- Min Jin Lee, *Pachinko*, Head of Zeus, 2017.
- Matsuda Aoko, *Where the Wild Ladies Are*, translated by Polly Barton, Soft Skull, 2020.
- Fernanda Melchor, *Hurricane Season*, translated by Sophie Hughes, New Directions, 2020.
- Murata Sayaka, *Convenience Store Woman*, translated by Ginny Tapley Takemori, Grove Press, 2018.
- Robin Stevenson, *My Body My Choice: The Fight for Abortion Rights*, Orca Book Pub, 2019.
- Takano Hitomi, *Jiin buraido*, Shodensha, 2021.
- Tonegawa Maki (ed.), *Onnatachi no jikan. Rezubian tanpen shōsetsushū*, Heibonsha, 1998.
- Virginia Woolf, *A Room of One's Own*, Hogarth Press, 1929.
- Yuge Naoko, *Hajimete no seiyō jendā shi. Kazokushi kara gurōbaru hisutori made*, Yamakawa Shuppansha, 2021.
- Yun Unju, *Onna no ko dakara, otoko no ko dakara wo nakusu hon*, translated by Sunmi, etc. books, 2021.

イベント報告

『トランスジェンダー問題』を生きる

コーディネーター：葛原千景

(CGS研究所助手)

本イベントでは『トランスジェンダー・イシュー』の日本語版翻訳者である高井ゆと里氏をお招きし、「トランスジェンダー・イシュー」をめぐる内容について議論を交わした。近年のメディアにおいてトランスジェンダーをめぐる語りは、トイレや大衆浴場、外性器の状態に関する侵襲的な問いで占められている。イギリスのジャーナリストでトランスジェンダーの女性であるショーン・フェイはこうした傾向を「トランスジェンダー・イシュー」と名指し、同名の著書を2021年に出版した。そうしたシスジェンダーの関心によって扇動される偏重報道を批判すると共に、フェイはむしろ医療制度における不正義、階級格差、セックスワークの刑罰化、国家暴力、LGBTの中での周縁性、フェミニズムにおけるトランスフォビアなど、トランスジェンダーの生存に深く影響を与える問題に光を当てた。イベントの構成は、司会のジェンダー研究センター研究所助手の葛原からの概説、高井氏による本の解説、参加者を交えた質疑応答から成り、計90分となった。

イベントは学内外、学生、研究者を問わず広くトランスジェンダー問題に関心のある人々が300人以上参加し、アンケートにおける評価においても非常に好評を得た。とりわけ、社会的に関心が高まる事象である一方で、虚偽の情報が飛び交うトランス問題について時事的に扱うことができたことは大きな成果であるといえる。なかでもトランスジェンダー当事者からも多く好意的なコメントが寄せられたことから、現実社会のトランスの人々にとっても非常にクルーシャルな話題について適切な認識を広める一つの機会となったと考える。

Event Report

Living with *The Transgender Issue*

Coordinator: Chikage KUZUHARA

(Research Institute Assistant, CGS)

We invited Prof. Yutori Takai who translated the Japanese version of *The Transgender Issue: An Argument for Justice* written by UK journalist Shon Faye, and we had a conversation about the book. Faye criticizes UK media representation dominated by only cis-centric “concerns”: genitalia, and she calls this bias the transgender issue. She rather focuses on real transgender issues, injustice in the medical system, class struggle, sex work, institutional violence, and exclusion from feminism and LGB politics. Yutori and Chikage (Research Institute Assistant of CGS) discussed these erasures in 60 min, and they answered questions from the audience in 30 min.

More than 300 people joined this event and highly recognized our talk in their feedback. We could engage in clearing up the misunderstanding for transgender people when harsh transphobia has been standing out in Japan. We must keep addressing and challenging misrepresentation and structural discrimination against trans people and gender varial people globally.

イベント報告

同性婚合法化の軌跡、 これから始まる抵抗の可能性について

コーディネーター：洪毓謙

(CGS研究所助手)

2022年11月12日(土)に国際基督教大学ジェンダー研究センターは長年台湾でジェンダー・LGBTQ運動を推進しているNPO団体「台湾伴侶權益推進連盟(TAPCPR)」幹事長の簡至潔(かん・しけつ)氏及び、弁護士でNPO法人「LGBT(Q)とアライのための法律家ネットワーク(LLAN)」メンバーの山本大輔氏をお招きし、オンラインイベントを開催した。学内外を合わせて計38名の参加者が集まったイベントとなった。

日本・台湾双方の活動家から、抽象的な問題ではなく、「同性婚」を巡る具体的な事例と今日における問題点・課題を説明してもらうことで、ジェンダー・セクシュアリティ研究における重要な課題を知り・学ぶことを目的とするイベントであった。当日はCGSの研究所助手で担当者の洪毓謙が司会を務めた。イベントの趣旨説明、登壇者の紹介の後に、台湾の登壇者であるTAPCPR代表の簡至潔氏より台湾同性婚制度合法化の過程、現状及び未解決の問題点などを説明した。続いて、日本側登壇者の弁護士でNPO法人LLANメンバーである山本大輔氏から日本の同性婚の現状及び判決事例についてご紹介いただいた。双方の講演後にお二方による対談を行い、講演内容について互いに質問やコメントをしていただいた。最後に、お二方にCGSスタッフが選別した一般参加者による質問三つにご回答いただき、イベントは順調に終了した。

登壇者略歴：

簡至潔(TAPCPR幹事長)

大学時代からジェンダー平等運動に参画し、大学卒業後は女性援助の組織でソーシャルワーカーとして働く。2012年にTAPCPRを正式的に設立し、当

団体の秘書長を務めた。任期中はTAPCPRのメンバーと「多元成家法案（同性婚の実現及びジェンダー平等に関する法律の草案）」の提唱、婚姻平等憲法解釈（婚姻の平等のための憲法改正）の要請、差別的な国民投票案への抵抗運動に精力的に関わり、最終的に同性婚の法制化という目標を達成した。同氏はTAPCPRの大型提唱運動の最高責任者として、「凱道辦桌」、「彩虹圍城」、「彩虹環島」、「正視展」、「同婚宴」など、セクシャルマイノリティの権利運動に関わるイベントにも積極的に携わった。台湾で同性婚が法制化した現在でも、継続して国際同性カップルの同性婚実現及びトランス平等運動の推進に取り組んでいる。

台湾伴侶權益連盟 HP

<https://tapcpr.org>

山本大輔（弁護士・LLANメンバー）

企業法務弁護士として都内法律事務所に勤務する傍ら、2017年からLGBTQのことを独学して以来、弁護士・企業法務部員で構成されるNPO団体「LGBT(Q)とアライのための法律家ネットワーク（LLAN）」で、数多くのセクシャルマイノリティの法的支援・啓発活動のボランティアに従事する。LGBTQ+のことをより深く学ぶため、2021年からUCLAのロースクールにてLGBTQ+研究についての学問を専攻する。

LGBT(Q)とアライのための法律家ネットワーク HP

<http://llanjanpan.org/>

Event Report

The Possibility of Resistance from Now — After Legalization of Same-Sex Marriage

Coordinator: Yuh-Chain HUNG

(Research Institute Assistant, CGS)

On November 12th, the Center for Gender Studies at International Christian University held an online event with Chih-Chieh CHIEN (簡至潔), the Secretary-General of “Taiwan Partner Rights Promotion Alliance (TAPCPR)”, an NPO that has been promoting gender and LGBTQ movements in Taiwan for many years, and Daisuke YAMAMOTO (山本大輔), a lawyer and a member of “Lawyer Network for LGBT (Q) and Allies (LLAN).” The event was attended by a total of 38 participants.

The purpose of the event was learning and clarifying important issues in gender and sexuality research. During the event by asking the two activists from both Japan and Taiwan to explain concrete examples of same-sex marriage, and the current problems and issues, helped us to understand the issues deeply and rethink both the meaning of marriage systems and the possibility to resist the norm.

As for the flow of the day, the person in charge of CGS (Yuh-Chain HUNG, Research Institute Assistant) acted as a moderator, explained the purpose of the event, and introduced the speakers. Ms. Chih-Chieh CHIEN explained the process of legalization, the current situation of equality movements, and unresolved issues in Taiwan. After that, Mr. Daisuke YAMAMOTO explained the current situation of same-sex marriage in Japan and introduced some case studies. After both lectures, the two speakers had a talk and asked each other a question and gave comments about the contents of the lectures. Finally, the CGS staff sorted out three questions from the participants, and the event ended

smoothly.

Speakers' Profile

Chih-Chieh CHIEN (the Secretary-General of Taiwan Alliance to Promote Civil Partnership Rights, TAPCPR)

Dedicated herself to the gender equality movement since she was in college, after graduating, she started working as a social worker for a women's aid organization. She officially established TAPCPR in 2012 and has been the secretary-general of the organization. During her tenure, she worked with TAPCPR members to advocate for a pluralism bill, call for a marriage equality constitutional interpretation, and protest against discriminatory referendum proposals, ultimately achieving her goal of legalizing same-sex marriage. She has been the chief executive officer of TAPCPR's large-scale advocacy campaign. After the legalization of same-sex marriage, she continues to promote the same-sex marriage movement for international same-sex couples and trans equality movement with TAPCPR.

TAPCPR Website

<https://tapcpr.org>

Daisuke YAMAMOTO (Lawyer & Member of Lawyers for LGBT & Allies Network, LLAN)

Has been studying LGBTQ issues on his own since 2017. While working as a corporate lawyer at a law firm in Tokyo, he engaged in numerous legal support and awareness-raising activities as a volunteer with LLAN. He is studying LGBTQ+ issues at UCLA Law School in 2021 to learn more about LGBTQ+.

LLAN Website

<http://llan-japan.org/>

2022年度CGS活動報告

春学期

4月20日(水)、4月21日(木) | CGS 春の交流会 2022

場所: ERB 347

4月29日(金) | 春学期読書会

対象図書: イヴ・K・セジウィック『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原
早苗・亀澤美由紀(訳)、名古屋大学出版会、2001年

担当者: 山本理央 (ICU学部生)

日時: 4月29日(金) ~ (毎週金曜日)

4月29日(金) | 春学期読書会 ~初心者のためのトランスジェンダー研究~

対象図書: Susan Stryker, *Transgender History: The Roots of Today's Revolution*, New
York: Seal, 2008

担当者: 葛原千景 (CGS研究所助手)

日時: 4月29日(金) ~ (隔週金曜日)

6月6日(月)~6月17日(金) | 第10回 [R-Weeks] イベント週間

6月6日(月) | 第67回ふわカフェ「ジェンダー・セクシュアリティに関するもやもや」

場所: CGS

世話人: 葛原千景 (CGS研究所助手)

6月8日(水) | 「田中かずこ先生と話そう “地域・ジェンダー・セクシュアリティ”」

場所: 本館前の芝生

コーディネーター: 生駒夏美 (CGS副センター長、CGS運営委員、編集委員)

高松香奈 (元CGSセンター長、CGS運営委員、編集委員)

6月9日(木) | ちゃぶ台返し女子アクション「性的同意に関するトーク」

*GSS科目「ジェンダー・セクシュアリティ研究へのアプローチ」内での講演

場所: Zoom

コーディネーター: 生駒夏美 (CGS副センター長、CGS運営委員、編集委員)

高松香奈 (元CGSセンター長、CGS運営委員、編集委員)

6月10日(金) | 『最も危険な年』(2018年)上映、遠藤まめたさんトーク

『今こそトランスアライになろう』

場所：理学館N220

登壇者：遠藤まめた(一般社団法人にじゅう代表)

コーディネーター：岡俊一郎(CGS研究所助手)

葛原千景(CGS研究所助手)、浜崎史菜(CGS研究所助教)

洪毓謙(CGS研究所助手)

6月13日(月) | フェミニズム&怪物：

ジェンダー&セクシュアリティの視点から怪物表象を考えるワークショップ

場所：ERB 347

登壇者・コーディネーター：洪毓謙(CGS研究所助手)

6月14日(火) | Rebit「教育・就労・福祉からLGBTQを考える」

*GSS科目「ジェンダー・セクシュアリティ研究へのアプローチ」内での講演

場所：Zoom

コーディネーター：生駒夏美(CGS副センター長、CGS運営委員、編集委員)

高松香奈(元CGSセンター長、CGS運営委員、編集委員)

6月15日(水) | 難民支援協会 新島彩子さんトーク

『LGBTの権利と難民〜今日における課題とは〜』

場所：Zoom

登壇者：新島彩子(難民支援協会支援事業部マネージャー)

コーディネーター：レティツィア・グアリーニ(元CGS研究所助教)

6月16日(木) | 堀江有里先生トーク

『〈レズビアン〉として生きること——信仰、宣教、そして抵抗』

場所：本館 304

登壇者：堀江有里(日本基督教団牧師、信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会代表、

国際基督教大学・清泉女子大学ほか非常勤講師)

コーディネーター：岡俊一郎(CGS研究所助手)

6月17日(金) | 子育てについて話す会

場所：Zoom

コーディネーター：生駒夏美(CGS副センター長、CGS運営委員、編集委員)

高松香奈(元CGSセンター長、CGS運営委員、編集委員)

6月17日(金) | Amélie Lamont 著(三木那由他訳)「アライになるためのガイド」を読む会

場所：CGS

コーディネーター：岡俊一郎(CGS研究所助手)

葛原千景 (CGS 研究所助手)
浜崎史菜 (CGS 研究所助教)
洪毓謙 (CGS 研究所助手)

秋学期

9月1日 (木) | 新入生オリエンテーションビデオ「SOGIについて～ジェンダー・セクシュアリティの基礎知識」「性的同意について～性暴力をなくすために～」

公開場所：ICU TV

テキスト制作：岡俊一郎 (CGS 研究所助手)
葛原千景 (CGS 研究所助手)
浜崎史菜 (CGS 研究所助教)
洪毓謙 (CGS 研究所助手)

声の吹き込み：生駒夏美 (CGS 副センター長、CGS 運営委員、編集委員)
高松香奈 (元CGS センター長、CGS 運営委員、編集委員)
ベヴァリー・カレン (CGS 運営委員、編集委員長)
アダム・スミス (CGS 所員)
有元健 (CGS 運営委員、ジェンダー・セクシュアリティ研究メジャーコーディネーター)

9月30日 (金) | CGS 秋の交流会 2022

場所：本館前の芝生

10月15日 (土) | 高井ゆと里さんトークイベント 『『トランスジェンダー問題』を生きる』

場所：Zoom
登壇者：高井ゆと里 (群馬大学准教授)
コーディネーター：葛原千景 (CGS 研究所助手)

10月26日 (水) | Voice Up Japan ICU 支部 & CGS 共催 「雪田弁護士と考える大学生の性的同意」

場所：Zoom
登壇者：雪田樹理弁護士 (女性共同法律事務所、性暴力救援センター・大阪、ヒューマンライツ・ナウ)
コーディネーター：Voice Up Japan ICU 支部
生駒夏美 (CGS 副センター長、教授)

11月12日(土) | 「同性婚合法化の軌跡、これから始まる抵抗の可能性について」

場所：Zoom

登壇者：簡至潔 (台湾伴侶權益推進連盟 (TAPCPR) 幹事長)

山本大輔弁護士 (LGBT (Q) とアライのための法律家ネットワーク (LLAN) メンバー)

コーディネーター：洪毓謙 (CGS 研究所助手)

冬学期

12月16日(金) | CGS 冬の交流会 2022

場所：ERB 347

1月11日(水) | 冬学期読書会 Feminist/Queer Art Reading Group

対象：参加者が興味関心のあるフェミニスト/クィア・アーティスト及び作品

担当者：浜崎史菜 (CGS 研究所助教)

岡俊一郎 (CGS 研究所助手)

日時：1月11日(水) ~ (隔週水曜日)

1月16日(水) | 冬学期読書会2

対象図書：宮地尚子『トラウマ』岩波書店、2013年

担当者：林田祐季 (ICU 学部生)

日時：1月16日(水) ~ (毎週開催)

2月18日(土) | 作品集刊行記念イベント「他者とともにいるアートの可能性
——ミヤギ・フトシとその作品世界」

場所：Zoom

登壇者：ミヤギフトシ (アーティスト)

浅沼敬子 (北海道大学准教授)

岩川ありさ (早稲田大学准教授)

星野太 (東京大学准教授)

ヴューラー・シュテファン (CGS 研究員、武蔵大学助教)

コーディネーター：ヴューラー・シュテファン (CGS 研究員、武蔵大学助教)

3月1日(水) | GSS メジャー卒論発表会

場所：アルムナイハウス・ラウンジ

3月31日(金) | 性的同意ハンドブック配布開始

場所：CGS、キャンパス

企画・制作：Voice Up Japan ICU支部

監修：CGS

CGS公式ウェブサイト「CGS Online」、ツイッター公式アカウント、facebookでは随時、情報を更新しています。また、CGSジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』も「CGS Online」からダウンロードできます。

AY2022 CGS Activity Report

Spring Term

April 20th and 21st, 2022 | CGS Spring Gathering 2022

Venue: Lawn Area in front of Honkan

April 29th | Start of Spring Term Reading Group 1 (weekly, every Friday)

Text: Eve K. Sedgwick. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*.
1985, New York: Columbia University Press.

Organizer: Rio Yamamoto (ICU Student)

April 29th | Start of Spring Term Reading Group 2 (fortnightly, every other Friday)

Text: Susan Stryker, *Transgender History: The Roots of Today's Revolution*, New York: Seal, 2008.

Organizer : Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

June 6th, 2022 - June 17th, 2022 | 10th Annual R-Weeks Event

June 6th, 2022 | Fuwa Café #67 “Unnamable Feelings regarding Gender and Sexuality”

Venue: CGS

Facilitator: Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

June 8th, 2022 | Let's talk with Tanaka Kazuko sensei “Mitaka, Gender, and Sexuality”

Venue: Lawn Area in front of Honkan

Facilitator: Natsumi Ikoma (Vice Director, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Kana Takamatsu (Former Director, Steering Member Editorial Board Member, CGS)

June 9th, 2022 | Talk by Chabujo on Sexual Consent

*Part of GSS101 Approaches to Gender and Sexuality Studies

Venue: Zoom

Facilitator: Natsumi Ikoma (Vice Director, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Kana Takamatsu (Former Director, Steering Member Editorial Board Member, CGS)

June 10th, 2022 | Film Screening *The Most Dangerous Year* (2018) by Vlada Knowlton and Talk "Let's Become A Trans Ally Now" by Endo Mameta

Venue: Science Hall N220

Speaker: Endo Mameta (Founder of Niji-zu)

Organizer: Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, CGS)

Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

Fumina Hamasaki (Assistant Professor, CGS)

Yuh-Chain Hung (Research Institute Assistant, CGS)

June 13th, 2022 | Feminism & Monsters: A Workshop of Thinking Monsters Representations from the Perspectives of Gender and Sexuality Studies

Venue: ERB 347

Facilitator, Organizer: Yuh-Chain Hung (Research Institute Assistant, CGS)

June 14th, 2022 | Talk by ReBit "Thinking of LGBTQ through Education, Work and Welfare"

*Part of GSS101 Approaches to Gender and Sexuality Studies

Venue: Zoom

Facilitator: Natsumi Ikoma (Vice Director, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Kana Takamatsu (Former Director, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

June 15th, 2022 | Talk by Ayako Niijima "LGBT Rights and Refugees: The Issues They Are Facing Today"

Venue: Zoom

Speaker: Ayako Niijima (Manager of Protection and Assistance Unit, Japan Association for Refugees)

Organizer: Letizia Guarini (Former Assistant Professor, CGS)

June 16th, 2022 | Talk by Yuri Horie "Living as a "Lesbian" — Faith, Mission, and Resistance"

Venue: Honkan 304

Speaker: Yuri Horie (Pastor, the United Church of Christ in Japan, ECQA [Ecumenical

Community for Queer Activism], Adjunct Lecturer at ICU and Seisen University)

Organizer: Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, CGS)

June 17th, 2022 | **Chatting on Parenting**

Venue: Zoom

Facilitator: Natsumi Ikoma (Vice Director, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

June 17th, 2022 | **Reading “The Guide to Allyship” by Amélie Lamont, trans. by Miki Nayuta**

Venue: CGS

Organizer: Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, CGS)

Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

Fumina Hamasaki (Assistant Professor, CGS)

Yuh-Chain Hung (Research Institute Assistant, CGS)

Autumn Term

September 1st, 2022 | **Release of Orientation Videos for New Students, “SOGI ~Basic Knowledge of Gender and Sexuality~”, “Sexual Consent ~To Eliminate Sexual Violence~”**

Venue: ICU TV

Text: Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, CGS)

Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

Fumina Hamasaki (Assistant Professor, CGS)

Yuh-Chain Hung (Research Institute Assistant, CGS)

Voice-over: Natsumi Ikoma (Vice Director, Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Kana Takamatsu (Former Director, Steering Member Editorial Board Member, CGS)

Beverly Curran (Steering Member, Editorial Board Member, CGS)

Adam Smith (Member, CGS)

Ken Arimoto (GSS Coordinator, Steering Member, CGS)

September 30th, 2022 | **CGS Autumn Gathering 2022**

Venue: Lawn Area in front of Honkan

October 15th, 2022 | Talk Event: Living with *The Transgender Issue*

Venue: Zoom

Speaker: Yutori Takai (Associate Professor, Gunma University)

Coordinator: Chikage Kuzuhara (Research Institute Assistant, CGS)

October 26th, 2022 | Sexual Consent for College Students with Lawyer Yukita,
co-hosted by Voice Up JAPAN ICU & CGS

Venue: Zoom

Speaker: Juri Yukita (Lawyer, Jyosei Kyodo Law Firm, Sexual Assault Crisis Healing
Intervention Center Osaka, Human Rights Now)

Coordinator: Voice Up Japan ICU

Natsumi Ikoma (Vice Director, Steering Member, Editorial Board
Member, CGS)

November 12th, 2022 | The Possibility of Resistance from Now—After
Legalization of Same-Sex Marriage

Venue: Zoom

Speaker: Chien Chih-Chieh (The Secretary-General of Taiwan Alliance to Promote
Civil Partnership Rights, TAPCPR)

Yamamoto Daisuke (Lawyer and Member of Lawyers for LGBT & Allies
Network, LLAN)

Coordinator: Yuh-Chain Hung (Research Institute Assistant, CGS)

Winter Term

December 12th, 2022 | CGS Winter Social 2022

Venue: ERB 347

January 11th, 2023 | Start of Winter Term Reading Group (fortnightly, every
other Wednesday)

Text: Feminist/Queer art works participants are interested in analyzing.

Organizer: Fumina Hamasaki (Assistant Professor, CGS)

Shunichiro Oka (Research Institute Assistant, CGS)

January 16th 2023 | **Start of Spring Term Reading Group 2 (weekly)**

Text: Naoko Miyaji, *Trauma*. 2013, Tokyo: Iwanami Shoten.

Organizer: Yuki Hayashida (ICU Student)

February 18th, 2023 | **Art as a Way of Being With Others: The Oeuvre of Miyagi Futoshi**

Venue: Zoom

Speaker: Futoshi Miyagi (Artist)

Keiko Asanuma (Associate Professor, Hokkaido University)

Arisa Iwakawa (Associate Professor, Waseda University)

Futoshi Hoshino (Associate Professor, Tokyo University)

Stefan Würrer (CGS Researcher, Assistant Professor, Musashi University)

Organizer: Stefan Würrer (CGS Researcher, Assistant Professor, Musashi University)

March 1st 2023 | **GSS Major Thesis Presentation Day**

Venue: Alumni House Lounge

March 31st 2023 | **Start of distribution of Sexual Consent Handbook**

Venue: CGS, Campus

Creator: Voice Up Japan ICU

Editorial supervision: CGS

Regular updates may be viewed on CGS Online, the official CGS website, Twitter and Facebook. The CGS journals may also be downloaded from the website.

執筆者紹介 Author Profile

三宅大二郎 | 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

専門：社会学、セクシュアリティ研究

Daijiro MIYAKE | Ph.D. Student, Graduate School of Human Sciences,
Osaka University

Specialization: Sociology, Sexuality Studies

平森大規 | 法政大学グローバル教養学部助教

専門：計量社会学、クィア・フェミニズム研究

Daiki HIRAMORI | Assistant Professor, Faculty of Global and Interdisciplinary
Studies, Hosei University

Specialization: Quantitative Sociology, Queer and Feminist Studies

佐川魅恵 | 東京大学大学院総合文化研究科博士課程

専門：社会学、セクシュアリティ研究

Misato SAGAWA | Ph.D. Student, Graduate School of Arts and Sciences,
The University of Tokyo

Specialization: Sociology, Sexuality Studies

長尾優希 | 東京芸術大学大学院国際芸術創造研究科修士課程

専門：クィア理論、現代美術

Yuki NAGAO | Master's Student, Tokyo University of the Arts, Graduate
School of Global Arts, Department of Art Studies and Curatorial Practices

Specialization: Queer Theory, Contemporary Art

菅沼勝彦 | タスマニア大学人文学部専任講師

専門：ジェンダー・スタディーズ、クィア・スタディーズ

Katsuhiko SUGANUMA | Lecturer, School of Humanities,
University of Tasmania

Specialization: Gender Studies, Queer Studies

趙瑩瑩 | 大阪大学人間科学研究科博士後期課程

専門：社会学、ジェンダー・スタディーズ

ZHAO Yingying | Ph.D. Student, Graduate School of Human Sciences,
Osaka University

Specialization: Sociology, Gender Studies

国際基督教大学ジェンダー研究センター (CGS) 所員 Members of the Center for Gender Studies, ICU

2023年3月現在
as of March, 2023

オリビエ・アムール=マヤオリビエ・アムール=マヤール (センター長、運営委員)*
Olivier AMMOUR-MAYEUR (Center Director, Steering Committee Member)*
Women's Studies, French Literature, Film Theory

新垣修
Osamu ARAKAKI
International Law

有元健 (運営委員)
Takeshi ARIMOTO (Steering Committee Member)
Cultural Studies

ヴィンドゥ マイ・チョタニ
Vindu Mai CHOTANI
International Relations, Gender and Politics

クリストファー・ボンディー
Christopher BONDY
Sociology

ベヴァリー・カレン (運営委員)*
Beverly F. M. CURRAN (Steering Committee Member)*
Interlingual Translation, Cultural Translation, Media Translation, Translation Studies

レベッカ・エクハウス
Rebekka ECKHAUS
Bi/multilingualism, Learner Autonomy, Blended Learning

ロバート・エスキルドセン
Robert ESKILDSEN
Modern Japanese History

マット・ギラン

Matthew A. GILLAN

Music, Ethnomusicology

浜崎史菜 (運営委員) *

Fumina HAMASAKI (Steering Committee Member)*

Feminist Theory, Feminist Philosophy, Feminist Art and Literature

生駒夏美 (副センター長、運営委員) *

Natsumi IKOMA (Vice-director, Steering Committee Member)*

Contemporary English Literature, Representation of the Body in British and Japanese Literature

伊藤亜紀

Aki ITO

Storia dell'Arte Italiana, Storia del Costume Italiano

上遠岳彦

Takehiko KAMITO

Biology

加藤恵津子 (運営委員) *

Etsuko KATO (Steering Committee Member) *

Cultural Anthropology, Mobility Studies

菊池秀明

Hideaki KIKUCHI

The Social History of China in the 17th-19th Centuries

アレン・キム

Allen KIM

Sociology

マーク・W・ランガガー

Mark W. LANGAGER

Education, Comparative and International Education

松村朝雄

Tomoo MATSUMURA

Mathematics

峰島知芳 (運営委員)

Chika MINEJIMA (Steering Committee Member)

Atmospheric Chemistry, Environmental Dynamic Analysis

森木美恵

Yoshie MORIKI

Cultural Anthropology, Demography

羅一等

Ildeung NA

Sociology

那須敬

Kei NASU

History of Religion, Culture and Politics in Early Modern England

西村幹子

Mikiko NISHIMURA

Sociology of Education, International Cooperation in Educational Development

大森佐和

Sawa OMORI

International Public Policy, International Political Economy

クリストファー・サイモンズ

Christopher E. J. SIMONS

English Literature

アダム・スミス

Adam SMITH

Psychology

園山千里 (運営委員)

SONOYAMA, Senri (Steering Committee Member)

Classical Japanese Literature, Japanese Studies in Poland and Other European Countries

高松香奈 (運営委員) *

Kana TAKAMATSU (Steering Committee Member)*

Politics, International Relations

椿田有希子

Yukiko TSUBAKIDA

Japanese History

山本妙子

Taeko, YAMAMOTO

European History (French History, Early Modern France, Social History, Urban History, Christianity)

* 編集委員

Editorial Board Members

ICUジェンダー研究所ジャーナル

『ジェンダー&セクシュアリティ』

第19号投稿規程

2023年3月現在

1) ジャーナル概要

『ジェンダー&セクシュアリティ』は、国際基督教大学ジェンダー研究センターが年一回発行するジェンダー・セクシュアリティ研究分野の学術誌である。研究部門では、ジェンダー・セクシュアリティ研究における実証的研究や理論的考察に関する論文（綿密な学術的研究と、独創的な考察から成る、学術界に広く貢献しうる論考）、研究ノート（学術的研究・考察の途上にあつて、学術界に広く貢献しうる論考）を掲載する。フィールド部門では、活動家によるケーススタディ、組織・国内・国際レベルにおけるジェンダー関連活動に関するフィールドレポート（様々な領域の専門家、および研究者が、日々の実践の中から現状の側面を報告するもの）を掲載する。書評部門では、ジェンダー・セクシュアリティに関連する近刊書の書評を掲載する。

2) 第19号発行日：2024年3月

3) 第19号論文投稿締切：2023年7月31日

4) 原稿提出先

Eメール：cgs@icu.ac.jp

5) 応募要綱

a) 原稿

- ・本誌に投稿される原稿は、全文あるいは主要部分において未発表であり、他誌へ投稿されていないものとする。
- ・使用言語は日本語または英語に限る。
- ・原稿の様式は、Publication Manual of the American Psychological Association（2020年発行第7版）の様式に従うこと。様式が異なる場合は、内容の如何に関わらず受理しない場合がある。
- ・第一言語でない言語を使用して論文および要旨を執筆する場合は、投稿前に必ずネイティブ・チェックを通すこと。書かれた論文および要旨に文法的な問題が見られるなど不備が目立つ場合は、その理由により不採用になる場合がある。
- ・姓名・所属・専門分野・Eメール・住所・電話は別紙に記載する（姓名・所属・専門分野は、日本語と英語で記載すること）。審査過程における匿名性を守るため、原稿および原稿ファイル名には執筆者が特定できる形で氏名を記載しないこと。
- ・原稿料の支払い、掲載料の徴収は行なわない。

- ・本誌が国際的に発表される学術誌であることを踏まえ、たうえで原稿を執筆すること。
- ・本規定に沿わない原稿は、改訂を求めて返却されることがある。

a-1) 研究部門（研究論文・研究ノート）

- ・研究論文は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で16,000 – 20,000字、英語の場合は6,500 – 8,500 wordsの長さとする。
- ・研究ノートは、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で12,000字以内、英語で5,000 words以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長40字、英語は最長20 wordsとする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。
- ・日本語/英語両言語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words以内）。
- ・研究論文として投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、研究ノートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は研究論文に準ずる。

a-2) フィールド部門（フィールドレポート）

- ・原稿は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で12,000字、英語で5,000 words以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長40字、英語は最長20 wordsとする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。
- ・日本語/英語両言語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words以内）。
- ・研究論文・研究ノートとして投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、フィールドレポートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は、研究論文・研究ノートに準ずる。

b) 図表および図版

- ・図表は別紙で添付し、本文内に取り込まないこと。
- ・図版は直接印刷に耐える画質のものを添付すること。
- ・本文中における図表・図版のおおよその位置を原稿上に示すこと。
- ・画像やイラスト、図表など著作権が著者にないものについては、署名された掲載使用の許可書を同時に提出すること。

c) 提出原稿

- ・原稿は、電子ファイルでEメール (cgs@icu.ac.jp) に添付して提出する。
- ・電子ファイルの保存形式
 - できる限りMicrosoft Word形式（ファイル名.doc、ファイル名.docx）で作成したものを提出すること。
 - .doc形式でのファイル保存が困難である場合は、Rich Text形式（ファイル名.rtf）、またはプレーンテキスト形式（ファイル名.txt）で保存したものを提出すること。

- 上記以外の形式、特に紙媒体から読み込んだ画像データによる本文及び要旨の提出は認めない。

6) 校正

校正用原稿が執筆者に送付された場合、校正のうえ提出期限内に返送すること。その後、文法、句読法などの形式に関する微修正を、編集委員会の権限で行うことがある。

7) 審査過程

投稿原稿は編集委員会が指名する審査者によって審査される。審査では独自性、学術性、論旨の明快さ、重要性および主題のジェンダー・セクシュアリティ研究に対する貢献度が考慮される。原稿の改稿が求められる場合、審査意見および編集コメントが執筆者に伝えられる。投稿の受理・不受理の最終判断は編集委員会が下すものとする。

8) 著作権

投稿を受理された論文の著作権は、他の取り決めが特別になされない限り、国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会が保有するものとする。自己の論文および資料の複製権および使用権に関して、執筆者に対する制限は一切なされないものとする。

9) 原稿の複写

原稿が掲載された執筆者には3冊（執筆者が複数いる場合は5冊まで）の該当誌を贈呈する。なお、それ以上の部数については別途ジェンダー研究センターに注文することができる。

当規定は予告なく改定されることがある。

The Journal of the Center for Gender Studies, ICU

Gender and Sexuality

Journal Regulations for Vol. 19

as of March, 2023

1) Journal Overview

Gender and Sexuality is an academic journal on the study of gender and sexuality, published by the Center for Gender Studies at the International Christian University. The journal's research section shall consist of research papers on empirical investigations, theoretical discussions on gender and sexuality studies ⁽¹⁾, and research notes ⁽²⁾. The field section shall feature case studies by activists, and field reports ⁽³⁾ concerning gender-related activities at institutional, domestic, and international levels. The final book review section shall contain reviews on upcoming books pertaining to gender and sexuality.

*¹ Research papers should be based on thorough academic research, contain original and creative viewpoints, and contribute to a wider academic field.

*² Research notes should contain discussions that are still in progress but show their potential to contribute to a wider academic field.

*³ Field reports should report on the author's daily practice, focusing on one aspect of the field being studied.

2) Publication Date of Volume 19: March, 2024

3) Manuscript Submission Deadline for Volume 19: July 31, 2023

4) E-mail Address for Manuscript Submissions: cgs@icu.ac.jp

5) Rules for Application

a) Manuscripts

- Manuscripts submitted to this journal must be previously unpublished, in full or in part.
- Only Japanese or English manuscripts shall be accepted.
- Manuscript format must be in accordance with the Publication Manual of the American Psychological Association (7th Edition, 2020). Manuscripts submitted in other formats may be rejected regardless of their contents and their scholarly worth.
- Manuscripts (papers or summaries) that are not in the author's native language must be proofread by a native speaker of that language. Manuscripts with

obvious inadequacies such as grammatical errors shall be rejected.

- The author's name, affiliation, specialization, e-mail address, postal address and telephone number should be written on a separate title page. Name, affiliation and specialization should be indicated in both English and Japanese. To ensure anonymity during the screening process, the author's name should not appear in the text or document file names.
- There shall be no payment involved for manuscripts or for insertion.
- Manuscripts should be written in a style appropriate for an internationally-circulated academic journal.
- Manuscripts that do not conform to these guidelines may be returned with a request for revision.

a-1) Research Section

- Research papers should be between 16,000 to 20,000 Japanese characters or 6,500 to 8,500 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Research notes should be less than 12,000 Japanese characters or 5,000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Titles should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.
- Two abstracts, one in English (no more than 500 words) and one in Japanese (no more than 800 Japanese characters), should be attached on separate sheets with a list of five keywords in both English and Japanese.
- A manuscript submitted as a research paper may be accepted as a research note, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers.

a-2) Field Section

- Manuscripts should be no longer than 12,000 Japanese characters or 5,000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- The title should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.
- Two abstracts, one in English (no more than 500 words) and one in Japanese (no more than 800 Japanese characters), should be attached on separate sheets with a list of five keywords in both English and Japanese.
- A manuscript submitted as a research paper or research note may be accepted as a field report, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers

or research notes.

b) Figures and Graphic Images

- Figures should be attached on a separate sheet. Do not include them in the text.
- Graphic images should also be attached on a separate sheet, and should be of a quality high enough to resist degradation during printing.
- The approximate position of the figure/image in the document should be indicated.

c) Manuscript Submission

- Manuscripts should be submitted as an e-mail file attachment to cgs@icu.ac.jp.
- The digital copy should preferably be submitted in MSWord (filename.doc, filename.docx) format. Files may also be submitted in Rich Text format (filename.rtf) or Plain Text format (filename.txt).
- Files in formats other than those listed above or scanned copies of images or text, shall not be accepted.

6) Revisions

If a manuscript is returned to the author for revision, the manuscript should be revised and sent back by the specified date. Note that slight modifications (grammar, spelling, phrasing) may be carried out at the discretion of the editorial committee.

7) Screening Process

Submitted manuscripts shall be screened and chosen by reviewers designated by the editorial committee. Factors for selection include originality, scholarlyness, clarity of argument, importance, and the degree of contribution that the manuscript offers for the study of gender and sexuality. In the event that a revision of the manuscript is required, opinions and comments by the editorial committee shall be sent to the author. The final decision for accepting or rejecting an application rests in the hands of the editorial committee.

8) Copyright

Unless a special prior arrangement has been made, the copyright of an accepted manuscript shall belong to the Editorial Committee of the ICU Center for Gender Studies. No restrictions shall be placed upon the author regarding reproduction rights or usage rights of the author's own manuscript.

9) Journal Copies

Three copies of the completed journal (or five in the case of multiple authors) shall be sent to the author of the accepted manuscript. Additional copies may be ordered separately.

Note that these guidelines may be revised without prior notice.

編集後記

ベヴァリー・カレン（編集長）

『ジェンダー&セクシュアリティ』第18巻をお届けできることを大変嬉しく思います。国内やグローバルな視点など、さまざまな角度からジェンダーとセクシュアリティを探求する記事をお楽しみください。本号に寄稿して下さった方々、および査読をして下さった方々に感謝の意を表したいと思います。また、本号の編集・発行に尽力されたICUジェンダー研究センターの岡俊一郎氏、浜崎史菜氏には、特に感謝いたします。

Postscript from the Editor in Chief

Beverley CURRAN

It is a great pleasure to present Volume 18 of *Gender and Sexuality!* Please enjoy the articles that explore gender and sexuality from a range of domestic, global perspectives and intersectional perspectives. I'd like to express appreciation to all those who submitted contributions to the issue, as well as those who provided peer review. A special thank you to Shunichiro Oka and Fumina Hamasaki at CGS for all their work in the editing and publication of this volume.

Gender and Sexuality Vol.18
Journal of the Center for Gender Studies, International Christian University

Printed and Published on March 31, 2023

Editor International Christian University
Center for Gender Studies Editorial Committee (in alphabetical order: Olivier AMMOUR-
MAYEUR, Beverly CURRAN, Natsumi IKOMA, Etsuko KATO, Kana TAKAMATSU),
Shunichiro OKA (Research Institute Assistant, CGS), Fumina HAMASAKI (Assistrant
Professor, CGS)

Publisher Center for Gender Studies
International Christian University
ERB-I 301, 3-10-2 Osawa, Mitaka city, Tokyo 181-8585 JAPAN
Tel: +81 (422) 33-3448
Fax: +81 (422) 33-3789
Email: cgs@icu.ac.jp
Website: <https://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

Printing Hakuhousha Co.,Ltd.

© 2005 by Center for Gender Studies, Japan.
All rights reserved.

国際基督教大学ジェンダー研究センタージャーナル
『ジェンダー&セクシュアリティ』第18号

2023年3月31日 印刷・発行

編集 国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会 (五十音順: オリヴィエ・アムール=マヤール、生駒
夏美、加藤恵津子、ベヴァリー・カレン、高松香奈)、岡俊一郎 (CGS 研究所助手)、浜崎史菜 (CGS 助
教)

発行 国際基督教大学ジェンダー研究センター
〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2 ERB-I 301
Tel: (0422) 33-3448
Fax: (0422) 33-3789
Email: cgs@icu.ac.jp
Website: <https://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

印刷 株式会社 白峰社

著作権は論文執筆者および当研究センターに所属し、著作権法上の例外を除き、許可のない転載はできません。



